トゥプラス

秋月あきら（ししゃもにゃん）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
トゥプラス

【Ｎコード】
Ｎ０４７６Ｅ

【作者名】
秋月あきら（ししゃもにゃん）

【あらすじ】
神社の御神木が焼かれ、あくる日に同じ市内で起きた火事の現場で、炎を纏う狐が目撃された。高校の帰り道、謎の少女――椛と出会った。椛は男所帯の家で面倒を看ることになり、その家の住人、悠樹と輝は少女に悪戦苦闘。椛の記憶を取り戻すために町中を探索することになり、事件を追っているうちに主人公たちは……？
たぶん縦書きのほうが読みやすいです。

第1話―非日常の入り口

住宅街の一角から夜空に立ち上る煙。
轟々と燃え盛る業火は地獄を思わせ、紅い炎に中から叫び声を木霊する。
火事の現場に駆けつけてきた人々が声を上げた。燃え盛る屋根の上に何かがいる。
紅蓮の炎を纏い躍る狐の姿が目撃された。しかし、そんなことがありえるはずがない。炎の影が見せた幻影か。誰もが自分の目を疑った。
狐が天に向かって気高く咆哮し、姿を消した。
夜空では蒼白い月が嗤っていた。
どこまでも、どこまでも、鳴り響く赤いサイレンの音。
それを除けば静かな夜だった。

駅の近くには大きな商店街があり、それなりに賑わっているというのに、大通りを自転車で数分進み、道を一歩外れるとそこは、雑木林や古い家が立ち並んでいる。
そんな街並みを背景に大きな下り坂を自転車で滑走すると、すぐ目の前には高校のグラウンドが見えてくる。『自然豊かな』が売りの一歩間違えると田舎臭い、周りをなぜか田んぼや農地に囲まれてしまっている高校――それがこの小春市にある、名前もほぼそのまんまの小春西高校だ。
高校の周りには農地などの他に、すぐ横を流れる楓川（かえでがわ）という川がある。この川は大雨が降ると昔はよく反乱を起こして、学校の敷地まで川水が来てしまっていたらしい。そのため学校の川沿いには堀がある。
農地や川が近くにある、自然の豊かさを売りにしている高校――つまり土地が安かったからここに建てられたに違いない。現に小学

校も田んぼを挟んで向かい側に建っているし、坂の上と下では文化の臭いが違う。

さて、小春高校では四月になり春休みも明けて、新年度を迎えて一週間ほどの日数が過ぎていた。

二年二組の教室では各委員決めが執り行われていた。黒板の前に立ち、司会進行を取り仕切っているの二人組の男女。前日決まった学級委員の葵城（きじょう）・月夜霊（つくよみ）ペアだ。

容姿端麗に加えて秀才で、その上運動神経まで良く、学校でも女子の人気を集めまくっていて、非の打ち所がないと誰からも言われる葵城悠樹（きじょうゆうき）が委員決めの話の進行をしている。　その脇ではミステリアスな雰囲気を全身に纏い、長い黒髪が特徴の美人系の月夜霊尊（つくよみみこと）がチョークを持ちながら書記をしている。

尊は細く伸びた白い指でチョークの先を軽く握り、黒板と向き合ったまま数分の時を過ごしてしまっていた。そのチョークの先にあるのは、最後に残ってしまった誰も立候補者のいない図書委員の男子枠だった。

悠樹は口に手をやり、ワザとらしく咳払いを一つして男子生徒たちを見回す。

「コホン、どなたか立候補をお願いします」

このクラスは女子が二〇名、男子一六名で構成されている。まだまだ委員になってない男子生徒は多くいるはずなのだが、誰も図書委員になろうとする者はいなかった。

図書委員をやりたくない理由は単に委員活動がめんどくさいという他に、すでに決まっているパートーナーの女子生徒に問題がある。その女子生徒の名は星川未空（ほしかわみそら）。

星川未空は無口で、読書好きで、どこか近寄りがたいオーラを発している女の子――まあ、ここまでなら結構どこにでもいそうなタイプの子なのだが、未空には変な噂がつきまとっていた。宇宙人と会話ができるとか、気に入らない人に念（毒電波？）を送って不幸にさせたりなどなど、トンデモ系の噂がまことしやかに学校全体に

広がっていた。
前方の席に座っている楕円形の眼鏡をかけた女の子が大きく手を上げた。それに対してすぐに葵城が反応する。
「何でしょうか香月さん？」
「わたしでよかったら図書委員やりますけど？」
「できれば男子生徒にやってもらいたいのですが、そうですよね立花先生？」
そう言って悠樹が振り向いた先には、教室の――それも最前列の生徒の前にちょうど空いている窓側の日当たり良好の場所に白いテーブルと椅子を並べて、勝手に自分スペースを作り、長く伸びた足を組んで不必要なまでの色気を振りまく、リラックス状態の立花莉奈先生が紅茶を飲んでいた。しかも、ファッション雑誌まで読んでいる。
「葵城クン何か言った？　聞いてなかったんだけど？」
「いや、失礼しました。立花先生はティータイムを続けていてください」
悠樹は立花先生に判断を仰ごうとした自分がバカだったとひどく後悔して、髪の毛を軽くかき上げ、ため息をひとつ付いた。
髪の毛をかき上げた悠樹に対して静かな歓声が湧く。恒例の行事だった。
職務放棄とも取れる行為をしている立花先生はほっておいて、早く残りひとつとなった図書委員の男子枠を決めたいところだが、――時間だけが無常に過ぎていく。
尊は先ほどから身動き一つしないで黒板とまだ向き合っている。根気が強いのかもしれないが、黒板に向かっている顔は呆れているかもしれない。
窓側の一番前に座っている小柄で幼い顔つきの男子生徒が勢いよく手を上げた。これには立花先生も目の前だったので紅茶を飲む手を止めて、何となく熱い眼差しで次の話の展開を見守ってみた。
男子生徒が手を上げたことによって図書委員の枠が埋まり、委員

は全て決まり、尊も黒板との対峙から開放されるに違いない。だが、悠樹はあることに気づいていた。
「何だよ武？　おまえはもう美化委員に決まっているだろう？」
手を上げたのは藍澄武（あおとたける）と言って、悠樹の親友のひとりだったりする。そのため他の人と対応が違う。
「あのさぁ～悠樹、ボク思うんだけど今日来てない『奴』に図書委員やらせればいいんじゃないかなぁ？」
その言葉を受けて悠樹はクラスの席を見回した。空席になっていたのはひとつだけ。悠樹の親友である遅刻魔、真堂輝（しんどうあきら）の席だけだった。
悠樹はすごく納得したように大きく頷き、
「月夜霊さん、真堂輝の名前を書いてください。クラスの意思です」
と言ってクラスの無言の承認を得た。来てない奴が悪いのだ。
黒板と対峙していた尊がやっと解放され、生徒の方を振り向いた、その時だった。教室の前のドアが勢いよく開けられ、ひとりの男が駆け込んで来たのは！！
「遅刻したーっ！！」
と大声を上げて教室に飛び込んで来たのは、今日このクラスで唯一の欠席者、真堂輝だった。
もうすでに紅茶を飲み始めリラックスモードに入っていた立花先生は、ティーカップを持ちながらその手で空いている席を指して教師らしい一言を発した。
「早く席に着きなさい」
彼女が教師らしい発言をするなんてめずらしい。きっと気まぐれだ。雨が降る。
輝が席に着くと、すぐ後ろの席に座っている輝と腐れ縁で幼馴染の涼宮綾乃（すずみやあやの）が声をかけてきた。
「あんた黒板ちゃんと見た方がいいわよ。特に図書委員らへん」
「はぁ？　黒板？」
首を傾げながらも輝は綾乃がシャーペンの頭で指し示す場所を見

た。――よく見た。そしてもう一度目を擦ってから、よ～く見た。
「はぁーっ！？　何でオレが図書委員なの？　オレ本なんて読まねぇーよ？」
綾乃は片手で頬杖をつき、冷めた表情をしながらシャーペンの頭をクイクイっと横に振った。
「自分の名前の横見なさい、よ～こ」
「何ぃ～っ！？　何で星川……っさんなの？」
机に手を付き声を荒げる輝と悠樹の目線が合致した。
見詰め合う二人。この時、輝は悟った。愛のトキメキなどではなく、憎悪に満ちたものを――。
「悠樹キサマか！　キサマの陰謀か！！」
この発言をした瞬間、輝は自分に向けられた鋭く痛いくらいの視線を多く感じた。悠樹ファンの女子生徒がいっせいに輝を睨みつけたのだ。
「あんたバカ？　皇子ファンの前で呼び捨て&キサマはないでしょ」
冷ややかな顔つきをしながら綾乃は小声でそう忠告した。
悠樹は一部の悠樹ファンの間で皇子様と呼ばれている。綾乃の場合は悠樹の本性を知っているので皮肉を込めて皇子と呼んでいる。
一瞬、鋭い視線のあまり胸を押さえて呪い殺されそうになった輝であったが、すぐに気を取り直し、女子生徒たちに向かってビシッとバシッと指を差した。
「おまえたち、悠樹とオレは親友なんだから呼び捨てが何だってんだ！　キサマが何だってんだ！」
一応威勢よく言ってみたが、皇子ファンの視線がより一層鋭くなった。このままでは輝が呪い殺されるのも時間の問題だと思われる。
その時、救いの手を差し伸べたのは他でもない悠樹だった。
「僕と輝は親友同士だから、少しぐらいの汚い言葉使いは許してもらえないかな？」
悠樹スマイル炸裂！　女子の悩殺されまくり！　立花先生突然立ち上がる！　立花先生が立ち上がったのは、ただ紅茶を飲み終えた

から、そろそろ仕事をする気になっただけのことなのだが……。
「さ～て、一見落着したところで今日は先に帰りのホームルームやっちゃうから」
「先生まだオレは図書委員を……」
「お黙りなさい真堂クン。図書委員はアナタで決定よ」
見事に輝の発言は押し込められた。このクラスの権力分布は偏りがあり、絶対的権力を持っているのが立花先生。次に大半の女子の指示を受ける葵城悠樹だ。
立花先生は教壇に両手を付き、たわわな胸を揺らして生徒たちの視線を集めると、鼻先で悠樹と尊を席に戻しホームルームを始めた。
「ハイじゃあ話すわよ。今日の五時限目は委員になった人は集合場所に集まるように」
そう言って委員会の集合場所の書かれた紙を片手でバシッと黒板に貼り付けると話を続けた。
「委員以外の人は教室で他のことするから覚悟しとくように。それと今帰りのホームルームやっちゃったから、委員会終わったら別々に帰っちゃっていいから、以上。質問は受け付けないからね」
どこまでも自分優先な人であった。
立花先生が話し終えたのと同時にちょうどチャイムが鳴った。チャイムが鳴り終わる前にはすでに立花先生の姿は無かった。ちなみに立花先生のティーセットはそのまま放置してある。
このクラスには先ほど委員決めと一緒に決めた特別な係りがある。係りの名前は『立花親衛隊』と言い、仕事内容は立花先生のティーセットの片付けから立花先生の言うことなら何でもやる係りである。立花先生の美貌と色気で毎年簡単に立候補者が出てしまうという係りらしい。
昼休みになると生徒たちは各々の場所で昼食を摂る。輝もまた例外ではなくとりあえず悠樹の後ろの席に座りに行く。
このクラスはまだ出席番号順（男女混合）で席が決まっているので、悠樹の席は最前列の窓側から数えて三番目の授業中は先生がま

ん前に立つという席だ。
昼食の時間になるといつも輝は悠樹のところに出向く。しかし、輝も悠樹も昼食を食べない主義だった。
そんな二人の元へ武がお弁当箱を持って現れる。いつものことだった。
「二人ともたまにはお昼食べたらぁ？」
武は高校に入ってから輝&悠樹と知り合いになった。というより輝と悠樹が一緒にいるといつも武が割り込んで来ていたのだ。そして、いつしか三人は仲良くなっていた。
武の目には輝と悠樹の存在は特別なモノとして映っていた。二人ともすごく変わり者でたくさんの才能を持っていて、とても興味深くおもしろそうなモノだった。だから武は自然と自分に無いモノへの魅力に惹かれて二人の輪に入っていったのだ。
武は適当な席に腰を下ろすと、お弁当箱のふたを両手で持ち上げるようにして開けた。中にはおいしそうなおかずがギッシリ詰まっている。しかし、武の表情は浮かない。
「いつもボクだけお昼食べて、ちっとも楽しくないんだけど？」
少し唇を尖らせて幼い子供のような表情で武は輝と悠樹を見る。武は顔立ちと小柄な身体のせいで歳より幼く見られることが多く、時には小学六年生と間違えられる。そんな武だからこそ唇を尖らしたしぐさが様になっている。上の学年にモテるという風の噂もある。
「オレはもともと一日二食と決めているから」
そう言う輝に続いて悠樹も一言呟く。
「腹が空いていない」
悠樹の口調は仲間内で居ると愛想が無い。公の場でサービスしている分、仲間内ではその反動が来るのだ。それに悠樹は仲間内とそうでない時で『俺』と『僕』を使い分けている。
「え～っ！？　人間だったらお昼になったらお腹空くのが当たり前だよ。輝も悠樹もお昼食べないのにボクより背がおっきいなんて変だよ。あっ、わかった牛乳いっぱい飲みまくってるんでしょ？　そ

うだ、そうに違いないね」
腕組みをしてウンウンとうなずく武のことなどお構いなしに悠樹は話を続けていた。
「それにだ。学校で三人で昼食を摂るとなると『昼食』、つまり食べるものが必要になるということだ。そして、武が望む昼食の風景は三人でお弁当を持ち寄り、おかず交換をしたいのだろう？」
「そうだよ、三人でおかず交換したりしたら楽しいよきっと！」
悠樹は武の考えをバッチリ見通していた。
「誰が俺と輝のお弁当を作るか知っているか？　どちらも俺が作るハメになるんだ」
「悠樹も大変なんだね、家事が何一つできない輝と二人ぐ……ぐっ」
何かを言おうとしていた武の口をとても慌てながら輝と悠樹が塞いだ。いったい武は何を言おうとしたのか？
口から手を放された武は大きく息を吐いて、少しすまなそうな表情をした。
「ゴメン、ついうっかり言いそうになっちゃった。秘密だもんね」
「武はうっかり秘密を漏らすクセがあるから気を付けるように。もっとも本当に気を付けて欲しいのは輝だけどな」
「はぁ？　何で俺なの？　言うわけないじゃん俺と悠樹が……ぐっ」
悠樹は慌てて何かを言いそうになった輝の口を押さえた。
「今、気を付けろと言ったばかりだろ？」
ゆっくりと口から手を放してもらった輝は両手を合わせ、先ほどの武よりもすまなそうな顔をした。
「ごめん、ホントごめん。以後気を付けるようにします」
「まったく、これでよく去年はバレなかったな……」
疲れ切った表情で悠樹は肩を深く落とした。神経を常に張っている彼の寿命は絶対に短い。
輝と悠樹の秘密とは、マンションにふたりだけで住んでいるということだ。学校にバレると恐らくマズイことになるのは目に見えているので、このことを知っているのは学校では当事者の輝と悠樹、

それに武と、輝の幼馴染で隣の部屋に住んでいる涼宮綾乃だけだった。
今、輝と悠樹が二人暮しをしている部屋にはもともと輝が家族と住んでいた。しかし、輝の父親の転勤でやむなく引っ越すことになった時、輝とその妹は学校などなどの問題からこっちに残ることにして、父親と母親だけが父親の転勤先に行ったのだ。
輝の妹である慧夢はもともと近くにあった祖父母の家に行き、輝もその家にいることになっている。少なくとも学校にはそう伝えてある。が本当のところは元々住んでいたマンションに今でも住んでいるのだ。
そして、そのマンションに家庭内の複雑な理由から家を飛び出した悠樹が同居することになったのだ。
悠樹は一様居候ということになっているので、家事全般をそつなくこなしてる。だが本当のところは、輝が家事を何ひとつできないから、しょうがなく悠樹が家事をしているのだ。
「そうだ輝、今日の夕食は何を食べたい？」
突然夕食の話を始めた悠樹。悠樹と輝はいつもこの昼食の時間に夕食の話をしていた。そして、輝は決まってこう言う。
「何でもいい」
「何でもいいじゃわからいだろ？　毎日食事を作るこっちの身にもなったらどうだ？」
悠樹の言葉は主婦の小言のようだった。
口いっぱいにごはんを入れて弁当箱のフタを勢いよく閉めた武は、
「じゃあねえ、パスタなんて食べたいなぁ～」
「武には聞いてないが……夕食はパスタにするか……」
別に夕食を食べに来るでもない武の意見を尊重して、こんな感じでいつも悠樹は夕食のメニュー決めていた。
昼食を食べ終えた武は何かを思い出したように手を叩いた。
「そうだ二人とも知ってる？　また昨日火事起きたの？」
武の言葉に悠樹は眉をひそめた。火事と言えばつい先日、小春市

内の神社の御神木が不審火で燃えたばかりだ。
「火事？　この前小春神社の御神木が焼けてニュースになったのは知っているが？」
輝は何かを思い出したような顔をして首を大きくうなずかせた。
「昨日の火事のことだろ？　遅刻してゆったり飯食ってた時ニュースで見た。あれって武んちの近くじゃなかった？」
「そうそう、それだよ～。あれさぁ、ウチからも火が上がってるの見えてビックリしちゃったよ。でねでね、その火がすごかったんだよ、まるで生きてるみたいにこうゴォォォって」
武はジェスチャーを交えて火のつもりになって迫真の演技をしているつもりなのだが、両手を挙げるその格好は傍から見たらバレーボールのガードのようにしか見えない。
「それでさぁ、消防車とか何台も来ちゃって……。それだけじゃないんだよ、ここからがこの話の重要なところ」
一生懸命話をする武だが、食い入るように聞いているのは輝だけで、悠樹は頬杖をついて話を適当にしか聞いてなかった。この時の悠樹はすでに夕食のことを考えていた。
話の先が気になる輝は武を急かした。
「重要なところってなんだよ？」
「実はさぁ、火事を目撃した多くの人が燃え上がる炎の中に白い狐を見たんだって！」
「狐？」
輝は思わず聞き返してしまった。火事と狐、何の脈絡もない。
「そうだよ狐見たんだって、ミステリーだよね。きっと妖怪だよ妖怪。その狐が火事を起こしたんだよきっと」
だんだん現実味のない話になっていく武の会話を聞いていた輝の口は、いつの間にかポカンと開かれてしまっていた。
悠樹はもともと話を聞き流していたが、彼の特性から話を聞いていなくても相槌を入れるクセがある。
「その狐を武自身が見たわけじゃないんだろう？」

「そうだよ、ボクのお母さんが近所のおばさんに朝聞いたんだって」
「では、そのおばさんは狐を見たのか？」
「ううん、そのおばさんも人から聞いたらしいよ」
少し考え込む悠樹。そして、彼の出した答えは、
「都市伝説と一緒だな。友達の友達のお兄さんが呪いのビデオを見たとか――そう言った遠い知り合いが話に出て来るのが都市伝説などの噂によくあるパターンだ。そう言った話は確証に欠けることが多いので安易に信用することはできない」
端から超常現象などを信じていない悠樹は武の話なんて信じるわけもなく、武は少し不満顔だった。
武はもともと超常現象の類、宇宙人とか妖怪とかムー大陸などなどの話にすぐに興味を持って信用し、輝や悠樹によく話をするのだが、悠樹にはことごとく否定され続けてきていた。だが、今回の武はいつもと違い悠樹対策をちゃんとして来ていたので、自身に満ち溢れていた。
「悠樹のことだから、証拠がないと信じないと思って今回はちゃんとこれを――」
武は制服のポケットから一枚のポラロイド写真を取り出すと、机の上にバシンと叩き付けた。
写真にすぐ食いついて来たのは輝だった。
「ホントだ、炎の中にばっちし狐が映ってるよ。ほら、悠樹も見てみろよ」
写真を手に取りマジマジと見つめる悠樹。
「確かに炎の中に白い狐が写っているが……」
写真には燃え上がる家の屋根が写っており、その屋根の上に白い狐が遠吠えをするポーズで写っていた。
「いくらポラロイド写真だからといっても、これが合成やトリック写真ではないと言い切れないので、この証拠物件については保留だな」
冷めた口調で写真を武に手渡す悠樹であったが、武としては納得

いかない。
「え〜っ！？　信じてくれないの？」
「だいじょぶだ武、オレは信じるぞ。こんな夢も希望も持ってない悠樹はろくな大人にならないんだから」
　輝は武と肩を組んで悠樹のことをワザとらしく軽蔑する眼差しで指を差した。指をさされた悠樹もちょっとワザとらしく腕組みをしてすごく不満そうな顔をする。
「どうせ俺はろくな大人にならない」
「ホント、みんなの前じゃあんな愛想いいのになんで俺たちの前だとこーなんだろーな。典型的なＡＢ型の二重人格性格だよな」
「血液型占いは信用性に欠けるものだ。あれは思い込みでしかない」
　そう言いながらも輝の言葉に少し悠樹はドキッとした。自分でも使い分けているつもりはないのだが、いつの間にかそうなっていた。昔は誰でも輝たちにみたいに接してきたのに、……両親が離婚して新しい母親が来てから自分は変わってしまったような気がする。悠樹はそう考えていた。
　――予鈴が鳴った。もうすぐ五時間目が始まる。
　委員会が終わったら個別に帰ることを許されているので、バッグなどの荷物を持って移動する。
「そろそろ行かねーとな。……ていうか何でオレが図書委員なの？」
　輝はまだ納得していなかった。あんな強引な決め方で納得できるわけがない。
　不満な表情をしている輝を武は上目遣いでみつめた。
「実はボクが休んでる人にしちゃえばって言ったんだよね」
「何ぃ〜！　武、おまえのせいだったのか？　おまえのせいでオレはこれから一年間、辛く険しい道を突き進み、力尽きて死ななきゃいけないんだぞ！」
「ゴメンネ。でも、死にはしないと思うケド？」
「わからないぞ、もうひとりの図書委員は星川だぞ。もしかしたら呪いを架けられてカエルにされて中国料理屋に売られるかもしれな

いんだぞ！」
「アホな会話してないでさっさと行け、遅刻するぞ」
そう言って悠樹はさっさと委員会に行ってしまった。
「ボクらも早く行こ」
「いや、でもだなカエルにされて……」
「カエルの話は廊下で聞くから、早く行こ」
輝は武に背中を押されて廊下に無理やり出された。
廊下には委員会の集まりのため移動をする生徒が多数いた。
「カエルにされたらまず……」
武は飽きもせずカエルについて語る輝の話にまだつき合わされていた。
「カエルはわかったから、それよりもさっきの狐の話なんだけどさぁ」
「さっきの狐がどうかしたか？」
「実はね、こないだ御神木が燃えた小春神社で祭られてる神様って狐なんだよ」
「だから？」
「だからきっとボクの推理だと、御神木を燃やされた狐の神様が人間たちに復讐してるんだよ」
そんな会話をしていたら図書室の横まで来ていて輝はここで武と別れた。
「じゃな武」
「うん、また明日ね」
軽く手を振り武と別れた輝は図書室の中へと入って行った。
図書室に訪れたのはこれで二度目。一度目は授業で来た。輝はもともと本を普段から読むことがない、だから当然図書室なんて用のないところだと思っていた。
室内にはもうすでに図書委員たちが多く集まり決められた席に座っていた。その中には星川未空の姿もあった。
輝は未空の横に座り彼女のことを見た。

「こ、こんちわ」
何となく挨拶。未空は明らかに輝が苦手なタイプだったが、輝はとりあえず誰とでも話すことを普段から心がけている。
「こんにちわ真堂くん」
小さくてゆったりとした口調。
「……えっ？」
思わず言ってしまった。挨拶が返ってくるなんて思っていなかった。確かに今初めて話をしてみたけど、勝手に挨拶しても返ってこないタイプだと輝は未空のことをそう思い込んでいたのだ。しかも苗字まで言われたので驚きは一層強かった。
「真堂クンであってた？」
「あ、そう真堂輝。星川未空さんだよね、よろしく」
輝は手を差し出し握手を求めた。
白くて小さな手はすんなり差し出され、輝の手を握った。
「こちらこそよろしく真堂クン」
未空はやさしい微笑み浮かべた。
正直輝はほっとした。第一に不思議なオーラ（電波）が出ているが、未空は悪い人ではなそうだということ。第二に未空の手が暖かかったこと――これはとりあえず血の通っている人間だということ。もしかしたら未空に体温がなんじゃないかと少しだけ輝は思っていた。
チャイムが鳴りしばらく経ったところで、図書室の中に少し変わった容貌の男が飛び込んできた。
図書室に飛び込んで来た男は長身で、長く銀髪に伸びた髪を腰まで伸ばし、東洋系の顔ではあるが目鼻立ちのはっきとしているとても綺麗な顔を持っていた。
「ごめん、少し遅れちゃったね」
ここにいた生徒の大半がこの男が男か女かどちらなのか判断を迷っていたが、今の声で男なんだと一応納得した。一応というのは中性的な顔立ちと長い髪の毛のせいで、実は女なのではないかと疑う

ことができるからだ。
銀髪の男は生徒たちの前に立つと自己紹介を始めた。
「僕の名前は玉藻琥珀と言います。今年度から図書室の管理人を任されることになりました。よろしくお願いします」
輝が琥珀を見ての第一印象は『地毛かあれは？』だった。次に思ったことは、あんな髪でよく学校の図書管理の職に就けたもんだ。ということ。
微かにだが他人に聞こえるか聞こえないかくらいの声で未空が呟いた。
「少し変わった人」
未空の琥珀への感想。わかりやすい感想だった。
「明日から図書委員の仕事をみなさんにはしてもらいたいのですが、どうやら学期末の在庫整理などの仕事以外は僕ひとりでもできそうだから学期末の召集まで仕事しなくていいから。ということで今日は解散」
この琥珀の解散宣言に一同は少し唖然とした。まだ五時間目が始まって十五分も経っていない。
解散宣言をされたので生徒たちは徐々に帰っていく。早く帰れてうれしいという反面、本当に仕事をしなくてもいいのかという気持ちも少しある。輝は早く終わってうれしいとしか思っていないが……。
生徒たちが図書室を出て行く中、輝は琥珀に近づいていった。
「あの、その髪って地毛ですか？」
どうしてもこれだけ聞いてみたかったのだ。
「ああ、これは染めてるんだよ」
まあ銀髪なんて普通はいないのだが、輝は少し地毛って言ってくれることを期待していたりした。
「もしかしてヴィジュアル系バンドやってたとか？」
「何それ？」
どうやら琥珀はヴィジュアル系を知らないようで、輝は少しがっ

かりした。髪の毛の色は変わっているけど琥珀は案外普通の人かもしれないと輝はがっかりしたのだ。普通の人だったらなんのおもしろみもない。

琥珀への興味がとりあえず今のところ失せてしまった輝は、さっさと帰ることにして図書室を後にした。

図書室には琥珀ともう一人生徒が残っていた。その残っている生徒というのは未空だった。

未空は何も言わずそこに立ち、ただ琥珀のことを見ていた。

「何か僕に用かな？」

未空が沈黙を破ることはなかったが、図書室のドアが開けられ女子生徒が入って来たのと同時に未空は図書室から出て行ってしまった。

第2話―もみじ

学校からの帰り道、未空は同じクラスの月夜霊尊と一緒に歩いていた。
未空と尊は仲のいい友達なのだが、二人は学校では一緒にいることが少なく二人が友達であることを知る者はあまりいない。
二人で歩いている時も会話は特にない。本当に友達なのか疑ってしまいそうになるが、二人の関係はこうやって成り立っていた。
尊が前方を指差した。そこにいたのは道路の上でうずくまっている小さな少女だった。そして、少女は千早と呼ばれる貫頭衣を着て、下には切袴と呼ばれる短めの袴を紅色に染めたものを穿いていた。
――巫女装束である
「小さい子供だな。どうしたんだろうか？」
尊のしゃべり方は少し男口調なところがある。
二人が少女に近づくと、少女は肩をヒクヒクと揺らして泣いていた。少女の見た目は幼く、だいたい八歳くらいだろうか？
「どうしたんだ、迷子か？」
尊が声をかけたが少女は何も言わずにただ身体を震わせながら泣いていた。
少し困った表情をする尊と、無表情で何をするでもなくただ立っているだけの未空。
「泣いていては何もわからない。まずは立って話をしよう」
少女は尊に言われるまま立ち上がりはしたが、その手は未だ目元に押さえつけられ、肩がヒクヒクと動いている。
「あ、あのね。……お兄ちゃんを探してたの……それで……見つからなくて……迷子になっちゃって」
兄とはぐれて迷子になってしまった小さい女の子。――よくありそうな話だ。だが、未空の一言がそれを変えた。
「この子、人間じゃないかもしれない」

尊が眉を潜め未空を見るが、尊はすぐに少女に視線を戻す。不思議な発言をした未空よりも人間でないと言われた少女の方が気になるのだ。

少女は依然泣き止むことなく、そこに人間でないというレッテルを未空に貼られてしまった。普通は泣いている少女に『人間じゃない』なんて言わないし、そもそも人間ではないとはどういうことなのか？　幽霊か何かとでも未空は言いたいのか？　非科学的だ。

もし、この少女が幽霊だと言うならば、よく話で聞くような触ろうとしても手が身体をすり抜けたりするのだろうか？　いや、そんなことが起こるわけがない。

尊は泣いている少女を慰めようとして身体に触れようとしたのだが、その時、驚くべき現象が起きてしまった。尊の手が少女の肩をすり抜けたのだ。

不快な顔をして尊は未空の顔をゆっくりと見た。すると今度は未空がゆっくりと少女の肩に手を乗せた。するとどうだろう、今度はちゃんと少女の肩に手が乗ったではないか！？　いったい何が起きたのか――手がすり抜けたのは幻だったのだろうか。

未空は少女の顔を覗き込むようにして、やさしい笑顔で聞いた。

「名前はなんていうの？」

泣いていた少女はゆっくりと目から手を離し上目遣いで、

「……椛（もみじ）」

と言うとすぐに視線を落とした。

「あなたは何？」

「……」

未空の質問に少女は戸惑い視線を深く下げた。

未空の質問はもちろん名前は聞いているのではない。名前ならもう聞いた――未空が尋ねているのは、人間ではない少女に対して何者であるかということだ。彼女は完全に少女が人間でないことを確信したのだ。

少女は首を横に振る。

「……わからないの。椛はね、椛って名前とお兄ちゃんを探してたことしか覚えてないの」
ただの迷子ではなく、記憶喪失でもあるらしい。しかも、未空は人間ではないと思っている。本格的にただ事ではないようだ。
腕組みをする尊と、また何もせずにただ立っている未空。そして、再び泣き出した少女のもとにある人物が近づいてきた。
「どうしたんですか月夜霊さん、星川さん。この子泣いているみたいですけど？」
この場に居合わせたのは買い物袋を両手に持った葵城悠樹だった。制服のまま夕食の材料を買って家に帰るところでちょうど未空たちと出くわしたのだ。
「この子記憶喪失みたいなんだ」
「それと人間じゃない」
二人の言葉に悠樹は心底戸惑った。記憶喪失だというだけでも大事だと思うのに、未空の口からは確かに『人間じゃない』と聴こえた。
目の前で泣いている少女を人間じゃないと紹介されたら普通は戸惑うし、悠樹はそういう話は信じない。目の前の少女が幽霊だと誰に言われても信じないし、超高性能ロボットだと言われてもきっと信じない。悠樹は一般的に認知しがたい事柄に関しては一切信用しないのだ。
「人間じゃないってどういうことでしょうか？」
「人間外の存在ってこと」
こんなことを未空に言われても困るだけだ。悠樹は助けを求めるようにして尊に顔を向けた。
「月夜霊さんもそう思っているんですか？」
「未空がそう言うなら、そうなんだきっと……」
二人にこう言われてはどうしょうもない。これが輝や武だったら強く反論できたかもしれない。しかし、この二人に対してはしなかった――輝や武以外には自分を押さえて接してしまうのだ。

このままこうしていても仕方が無いので、悠樹はケータイで警察を呼び、この少女の身柄を引き取ってもらおうと考えた。
「ケータイで警察の方を呼びますから、この子の身柄を引き取ってもらいましょう」
そう言って悠樹はケータイをポケットから取り出した。

自宅近くにある本屋でマンガ雑誌を読んだりなどして時間を潰した輝は、自宅マンションへの道を自転車を漕いで急いだ。
マンションに着いた輝は駐輪場に自転車を置き、階段を駆け上がる。輝の部屋は２０９号室である。
自宅のドアを勢いよく開けて輝はダイニングのソファーまで走る。家に帰ったらソファーの上に寝転んで『疲れたぁ～』と言うのが日課なのだ。
が、しかし、輝の足は急に止まり、フローリングの床を勢いよく滑って、腹からズッコケた。
「痛ーっ！」
叫び声を上げて床の上でうずくまる輝を物珍しい目で見る人たちと呆れ顔の悠樹。
「大丈夫か輝？」
微妙に上から悠樹に見下されているように感じの輝は、バッと起き上がってソファーに座っていた三人の女の子に人差し指をバシッと突きつけた。
「何でいんの？」
ソファーに座っていたのは未空と尊と輝の知らない少女――椛だった。
なぜか輝は三人に向かって防御ポーズを取って明らかに取り乱していた。
「何で星川さんと月夜霊さんと……誰この子？　ま、まさか悠樹、かわいいからって誘拐して来たのか！？　……ロリコンじゃないかなと前々から思っていたが、まさか少女誘拐なんて……」

悠樹の手がすばやく動いた。
「アホだろおまえ」
言葉と同時にバシッと輝の後頭部に悠樹の平手打ちが炸裂した。
思わず輝はコケそうになる。
そんな光景を見た椛はお腹を抱えて大きな口で笑い、未空と尊は学校では見たことのない悠樹に少し驚き戸惑いを覚えた。
笑われてしまった輝は自分を殴った葵城に飛びかかったが、すんなり交わされてしまった。
それを見てまた大笑いをする椛。
「あはははは、このお兄ちゃんおもしろい！」
再び笑われてしまった輝は笑っている少女を見て、最初の疑問を思い出した。
「だからこの子何？」
そうなのだ、輝にとっては皆目見当もつかない、この少女はいったいどこの誰で何者なのか、もしかして……。
「もしかして本当に誘拐して来たのかっ！」
勝手な想像でショックを受ける輝。再び動く悠樹のスナップを利かせた手。
「いてっ！」
「だから違うと言ってるだろう。この子は道端で迷子になっているところを月夜霊さんと星川さんに発見されて……」
「じゃあなんでウチにいんだよ？」
「たまたま通りかかった俺が警察に電話しようとしたら、星川さんがどうせ人間じゃないから警察に電話しても無駄だっていうから、仕方なく家が近かったウチに連れて来ることになったんだ」
今の話を聞いてひとつだけ輝の頭に引っかかる言葉があった。
「……今、人間じゃないって言わなかったか？」
「星川さんが言うにはこの子は人間じゃないらしいんだが……」
悠樹は信じていないが、未空に強く言われて尊にも説得されて仕方なく家に連れて来たのだ。

「この子人間じゃないの？　ってことは超高性能アンドロイドか」
そう言いながら輝は椛の腕を持って何度も上げ下げした。
「よくできてるなぁ～、まるで人間みたいじゃん」
輝は完全に椛のことをロボットだと認識した。
「やめてよ、椛はロボットじゃないもん」
輝の腕を振り払った椛は顔を膨らませて、続いて未空が小さく呟いた。
「真堂くん、その子ロボットじゃないから乱暴に扱わないで」
「これアンドロイドじゃないの？　じゃあ何？」
質問された未空は何もかも見透かしてしまいそうな瞳で輝を見据えた。
「真堂くんは超自然的存在って信じる？」
「超自然的存在？」
「妖精とか精霊のことよ。この子もきっとそう」
「マジで！？　すんげぇじゃん。小さい頃から妖怪とかと会ってみたかったんだよな」
未空は妖精とか精霊という例えをしたのに、なぜか輝の頭の中では妖怪と認識された。妖精と妖怪ではイメージが違うと思うが？
「椛妖怪じゃないもん！」
怒った椛は輝の胸の辺りを叩くが力が弱いので痛くも痒くもない。そんな椛も見ていると輝はどうしてもからかいたくなってくる。
「じゃあなんだよ？」
そう言いながら輝は椛のほっぺたを両手でつまんで引っ張り戻したりして遊んでいる。輝は椛に相当な興味を惹かれたのだ。
「痛いからやめてよぉ」
「妖怪も痛覚があるのか、大発見だ」
「だから椛は妖怪じゃないもん」
「だから、じゃあなんだよおまえ？」
「……わからない」
急に椛は声のトーンを下げてうつむいてしまった。そして、肩を

ヒクヒクさせ始め、目には薄っすらと涙が浮かんでいる。
すぐに鋭い刺のような声で尊のツッコミが入る。尊は人の痛いところを攻撃するのが得意だったりする。
「真堂、泣かせたな」
「なんだよ、オレのせいかよコレ？」
「椛は記憶喪失らしい」
これは尊が言ったのだが、なぜか輝の攻撃の矛先は悠樹に向けられる。
「そういうことは先に言えよ！」
「なんで俺なんだ！？」
まったくだ。なんで悠樹なのだろうか？　答えは輝が未空と尊のことをまだよく知らないので、絡みづらいのだ。
実は輝は未空と尊を前にして、いっぱいいっぱいだったりした。テンションが空回りして、そろそろ息抜きをしないと窒息しそうだった。
その時、天の救いか、家のチャイムが鳴った。すぐさま輝が反応する。
「オレ出て来る」
素早く玄関に移動した輝はドアを開けた。するとそこに立っていたのは段ボール箱だった――いや、違った。
「なんだよ、綾乃かよ。って何その段ボール箱？」
家を尋ねて来たのは隣に住んでいる輝とは腐れ縁の涼宮綾乃だった。その腕には段ボール箱が抱えられていた。
「ママの実家から今年もまたパイナップルが送られて来たからおすそ分け」
昔から輝の家と綾乃の家は家族ぐるみで交流があり、おすそ分けを貰ったり、輝の両親がいなくなってからは夕飯のおかずもよく届けてもらっていた。
「おすそ分けって、ただ家族で食い切れないだけだろ」
鋭い家庭事情へのツッコミをされて、図星だった綾乃は強引に段

ボール箱を輝に手渡した。
「そんなこと言わないで黙って受け取んなさいよ……あれ？」
綾乃はあること気が付いてしまった。玄関に靴が異様に多い――しかもさっきから部屋の奥から話し声が漏れてくる。
輝に試練の時が訪れてしまった。
「誰か来てるの？」
ここで未空と尊、それに謎の少女がいることがバレたら大変なことになる。なんで尊と『未空まで』いるのかと尋ねられてしまい、そんなことを尋ねられても輝自身、二人がウチに来てるなんて信じられない出来事だし、椛のことが知れたら絶対話に首を突っ込んで来たがるに違いないのは綾乃の性格を熟知している輝にはわかる。
どうしてもここで綾乃を帰さなくてはいけない。
「ちょっと知り合いが来ててさ。パイナップルありがと、じゃ」
慌てた様子で輝はダンボール箱で綾乃をドアの外へ押し出そうとする。
「何よ！？　何慌ててるの、怪しすぎるわよ」
「怪しくなんかない」
「じゃあ、知り合いって誰よ？」
段ボール箱に押される綾乃は負けじと肘と肩でダンボールごと輝を部屋の中へ押し込もうとする。
「知り合いだって言ってるだろ！」
「だから！」
二人が騒いでいると部屋の奥から悠樹が現れた。
「何やってるんだよ二人とも？」
声に気づいて悠樹の顔を見た綾乃はすごく皮肉たっぷりに言った。
「皇子様ご機嫌麗しゅう御座います」
「だから何でいつもおまえは俺に突っかかって来るんだよ」
輝と綾乃は幼馴染である。そして、悠樹は輝と古くからの友人である。よって自動的に三人は腐れ縁だったりした。それも三人の腐れ縁は幼稚園からのだ。

「だって学校で皇子なんて言われて実はいい気になってるの知ってるんだから。だから皇子って呼んであげてるんじゃない」
「だから何で突っかかって来るんだよ？　昔はそうじゃなかっただろ、中学は入ってから急にそんな態度取るようになって……俺が何かしたか？」
「別に何もしてないけど……」
急に口ごもってしまった。綾乃は何かを隠していた――中学の時から。
「本当に俺は何もしてないのか？　何かしてるんだったら謝るから……」
「別に何もしてないよ……悠樹は……ただ、アタシが……」
うつむき声が小さかった綾乃は急に顔を上げて元気よく話し始めた。
「それよりも～、誰が来てるの？」
「言うな悠樹……ぐふっ」
綾乃の肘が輝の腹にクリティカルヒットした。
「誰が来てるか教えて？」
「言ってはいけない悠樹……ぐはっ」
綾乃の回し蹴りが輝の背中に炸裂した。その際アングルによってはミニスカの中が見えてしまっていたに違いないが、残念なことに誰にも見えなかった。
「悠樹早く教えて！」
「本当に言っていいのか？　輝は……」
「いいから教えてよ」
「月夜霊さんと星川さんと女の子が……」
「マジで！？　星川さんが来てるの？　……訳アリね」
と言って綾乃は靴を脱ぎ捨ててダイニングに走っていってしまった。
ダイニングに駆け込んで来た綾乃は、三人が座るソファーの前で止まって腕組みをして考え込み、行き成り指差し尊を指名した。

「月夜霊さん、事情説明！」
「事情とは何のだ？」
「まず、月夜霊さんと星川さんがここにいる理由と……そこの誰？」
綾乃の目に飛び込んで来たのは巫女装束を着た童女――椛だった。
「この子は椛。記憶喪失で迷子になっているところに出くわしてここに連れて来た」
話を聞いていた綾乃の肩を後ろから来た輝が叩いた。
「しかも、妖怪だ」
まだ、輝の中では妖怪ということになっている。
「確かに格好は現代風じゃないわね。座敷わらし？」
綾乃の中でも椛は妖怪にされてしまった。
綾乃もまた椛が人間ではないことを信じた――それが悠樹には不思議でたまらなかった。どうしてここにいるみんなはそんな話を信じるんだろうか……。
綾乃は椛をまじまじと見て、
「で、この子どうするの？」
至極最もな質問だった。ここに連れて来たのもそのことについて話し合うためだ。しかし、そのことについての話は一向に進んでいなかった。
輝が自宅に帰って来るまで椛をどうするか話してはいたが、悠樹は警察に連絡した方がいいと言い、それを未空と尊に止められていて時間が過ぎてしまった。
もし、警察に連絡しても人間でない椛の対処はできないだろうから、記憶喪失で親の行方がわからないとされて、児童養護施設に送られてしまうだろうというのが未空の言い分だった。
「は～い、意見があるんだけど……」
綾乃が勢いよく手を挙げ答えた。
「まず、椛ちゃんの記憶を取り戻すことが先決で、その間誰かの家で預かるのがいいと思うんだけど？」
「はぁ？」

輝は口を空けて綾乃のことを見た。これは『どこの誰が預かるんだよ』と言う意思表示である。
「アタシが思うに輝の家が適役だと思うんだけど、どうかなみんな？」
「ちょっと待てよ、なんでウチなんだよ！？」
「だって、輝んち両親いないからいいじゃん。ね、悠樹はいいよね？」
「確かにこの家で預かるのが一番リスクが少なく、いろんな人に迷惑をかけなくて済むと思う」
「ちょっと待てよ悠樹。ここは俺んちなんだから決定権はオレにあるんだぞ」
輝としては椛のことをほっては置けないが、自分の家で面倒を看るとなると話は別である。しかし、綾乃は絶対この家に預けようとしている。
「輝く～ん、日本は民主主義の国だから多数決で決めましょう。輝んちでいいと思う人は挙手して」
輝以外のみんな『謀った』ように一斉に手を上げた。この瞬間輝は思った――悪の策略だ。
「じゃあ、多数決に基づいて輝の家で椛ちゃんを預かってもらいましょう。ハイ拍手、パチパチパチぃ～」
笑顔で拍手をする綾乃。輝は何か納得いかない。
「少数意見の尊重はどうしたんだ？　オレの意見が尊重されないなんて民主主義じゃない！」
「あら、多数決で決まったんだから文句言わない。ほら、椛ちゃんだって」
輝が下を見ると椛が潤んだ目で輝のことを見つめていた。その表情を見て激マブだと思ってしまった輝は負けた。
「しょうがない。責任を持って悠樹が面倒を看るから安心しろ」
「……結局俺か」
ああ、無情だ。いつも悠樹は輝から大変な役回りを回される。こ

れはきっと輝と付き合っている以上、一生続くに違いない。
何も言わず悠樹はこの場から消えようとした。
「どうしたんだ悠樹？」
輝が声をかけると、冷めた目で振り向き、
「夕食の準備するけど、月夜霊さんと星川さんはパスタですが食べていきますか？」
「そうだな、まだ椛について話し合うこともあるだろうから夕食を食べながら話そう。未空はどうする、帰るか？」
「あたしも残る」
「じゃあ、五人前ですね」
悠樹は、この家で家事を全部するのは宿命なんだと思うことにした。
「皇子様、一人前追加ね」
悠樹が振り向くとそこには人差し指を立てた綾乃が立っていた。
「……六人前」
少し疲れた気分だ。輝と綾乃は絶対料理を手伝わない――むしろできないのを知っているので、尊と未空のどちらかが手伝ってくれないかと淡い期待を抱いてみる。
「あたしはできないから」
未空に先手を打たれた。悠樹の心を見透かすような的を射る一言。だが、天は悠樹の味方だった。
「食べるだけでは悪いから、私が手伝う」
尊はソファーから立ち上がって悠樹のもとへ近づいていった。悠樹は本当にうれしかった。
「ありがとう、助かるよ」
そう言うと悠樹は輝を軽く睨んだ。睨まれた輝は不思議な顔をする。そして、悠樹と尊はキッチンに向かった。
キッチンとダイニングはカウンター越しに吹き抜けになっている。
悠樹は冷蔵庫から材料を出して並べると少し考え込んでしまった。手伝ってもらえるのはうれしかったのだが、実際料理を始めようと

すると独りの方が手際よくできるのではないかと思えてきた。
「月夜霊さんは……」
尊も悠樹が思っていることを察したらしく、
「……私は簡単なスープを作るから」
「あ、そうですか。材料は冷蔵庫にあるのを勝手に使ってください」
尊は冷蔵工の中を物色しながら、呟くように言った。
「月夜霊さんじゃなくて尊でいいから」
「えっ、あの何で？」
「それと、言葉使いももっと気軽でいい。……無理してるように見えるから」
無理をしているわけではなかった。しかし、そうなってしまうのだ。
悠樹が小さい頃から彼の両親は仲が悪く、中学生になる前に両親は別れ新しい母親が来た。それから悠樹は自然と『良い子』の自分を演じるようになったのだ。
「尊さん、僕……俺は別に無理してないですから」
悠樹は尊に自分の心を見透かされてしまったような衝撃的な感覚を受けた。だから、このひとの前では『良い子』を演じていても意味がないと思ったのだが、うまくいかなかった。
「すまない変なことを言ってしまって、逆に気を使わせてしまった」
「そんなことないから、尊さんも俺のこと悠樹でいいから」
その時、ダイニングから輝が声をかけてきた。
「飯まだぁ～！」
「アホかおまえは、そんなに早くできるわけないだろ」
悠樹に言うことは当たり前のことで、そんなこと輝もわかっていて言ったのだが、自分の置かれている状況から逃れたかったのだ。
夕食の準備のため悠樹と尊は台所へいってしまい、残された輝は三人の女性に囲まれていた。普通の女性ならウハウハの状況だが、ここにいる女性陣ではそうもいかなかない。みなちょっと個性派だ。
悠樹たちがいなくなってから綾乃は椛と遊び始めて、輝はソファ

ーでぼんやり座っている未空と会話をしようと試みたのだが、話すことが無くてすぐに会話は終了してしまったのだ。
仕方なく輝はテレビを見て時間が過ぎるのを待つことにした。
テレビをつけると椛が急にテレビ画面の前に釘付けになってはしゃぎ出した。
そんなこんなで時間が過ぎていき、食事の用意もでき、食事をしながら椛のことについて話し合うことにした。
テーブルの上に並べられたスパゲティーと野菜スープを口に運びながら、この場を仕切っているのは綾乃だった。
「さっき椛ちゃんと話していたりしてわかったポイントは三つ、記憶喪失、お兄ちゃんを探している、人間じゃない。この三点を踏まえて明日から調査ってことで」
スパゲティーを食べるのに集中していた輝がその手を止め、思わずぼやいた。
「はぁ！？　調査って何するんだよ。それに明日はせっかくの休日じゃん」
明日・明後日は土日で休日だった。
フォークを持っていた綾乃の手がすばやく動き、前方に座っていた輝の顔の前に突きつけられた。フォークが凶器と化して輝の顔数センチ前で止まっている。
「輝は強制参加ね、あと悠樹も」
少しドスの聞いた声で言う綾乃に輝も悠樹も何も言わず反論しなかった。
尊はスープをひと口飲んだ後、
「私は、土日は用事があるから無理だ」
続いて未空も、
「あたしも無理」
二人とも断ったが、綾乃はこの二人には無理強いはしない。輝と悠樹が特別なのだ。
口にいっぱいスパゲティーを頬張りながら輝が綾乃に質問する。

「それで調査って何すんだよ？」
「それを今から話し合うんじゃない」
確かにそのために設けられた食事会ではある。
尊が椛にやさしく聞いた。
「何か覚えていることは？」
首を横に振る椛。
「自分の名前とお兄ちゃんを探してることと……」
椛は何かを一生懸命思い出そうとしているようだった。
「それから、それから……キツネ」
一同は不思議な顔をしたが、その中で悠樹と輝は――特に輝は『キツネ』という単語に何か引っかかるものを感じた。
未空が急に呟いた。
「椛ちゃんの服装、巫女装束よね？」
この言葉を聞いた輝の頭の中では何かが思い出されようとしていた。巫女装束と言えば神社が思い浮かべられる。そして、輝は武との会話を思い出して、飛び上がりながら声をあげてしまった。
「そうだ！」
全員の視線が輝に集まった。
「……いや、何でもない」
普段は何でもかんでも思いついたことは口に出して言ってしまう輝だが、この時は言わなかった。今は椛について少しでも情報が欲しいが、確信の薄い情報では周りを混乱させてしまう。
少し怒ったような表情をする綾乃。
「もぉ、何でもないなら大きな声上げないでよ、ビックリしたじゃない！」
「すまん。ちょっと別のことで思い出したことあって……」
未空がさっき言おうとしていた話を続けた。
「巫女装束と言えば神社だと思うんだけど、この辺りに神社はある？」
輝は瞬時に小春神社の名前が浮かんだが、答えたのは悠樹だった。

「この辺りにある神社と言えば……この前火事のあった小春神社が一番近い」
「じゃあ、明日は小春神社に行くってことで決定ね」
話の進行、及び決定権はこの場では綾乃にあるようだ。

話し合いと夕食も終わり、尊と未空は帰ることになり、悠樹は二人を送っていくと申し出たが断られてしまった。
悠樹にしてみれば、夜になれば女性を家まで送っていくのが当たり前のことだと思っているのだが、高校生にもなって夜は危ないからなどと心配するなんて小さい子供じゃないんだからと笑われてしまう。
それでも、悠樹はキャラ的に女性を家まで送っていかなければ気が済まなかった。それで結局、悠樹は二人を駅まで送っていくことになった。
輝の自宅からは駅がそれなりに近くにあり、デパートや駅前商店街があったり、朝方まで営業している店が多くあるので、駅までの道は車や人の往来があり、コンビニなどの前には柄のよくない人たちがたむろっていたりする。だから悠樹はどうしても駅まで送ると言ったのだ。
星が瞬く夜空をぼーっと眺めながら未空は前を歩き、その後ろを悠樹と尊が並んで歩いていた。
「尊さんは、どうして俺が無理してるって思ったんですか？」
「人間の心なんて簡単に読めるものだし、まだ出会って間もないが学校での悠樹とあの場所での悠樹は雰囲気が全然違っていたよ」
「俺は他人の気持ちなんて理解したいけど全然理解できない」
「私も人間の気持ちなんて理解できない。でも、なんとなくだが伝わってくる」
――やがて、駅前の広場を抜けて駅ビルに入る前で悠樹は二人と別れることにした。
「二人とも気をつけて」

「葵城くん、さよなら」
「ありがとう悠樹、送ってくれて」
そう言って二人は駅の中に入っていった。
片手を上げて二人をしばらくの間見つめていた悠樹は、踵を返して自宅への岐路に着いた。

未空と尊がいなくなった輝宅では、綾乃が本性を現そうとしていた。
「椛ちゃん、ちょ～カワイイ！」
声を上げる綾乃。ソファーの上にちょこんと座っていた椛に魔の手が忍び寄るまでもなく、飛び掛る！
ガフッと綾乃は椛を押し倒した。もうこれで椛は綾乃の餌食だ。
顔を真っ赤にする椛の顔見て、喜色満面の笑みを浮かべる綾乃。綾乃は小さくてかわいい子供を見ると襲いたくなってしまうアブナイ人なのだ。
椛に襲いかかった綾乃を白い目で輝は見ているが止めようとはしなかった。
「犯罪行為だぞ、それ」
「だって、カワイイんだもん」
ぎゅぅっと抱きしめられている椛は少し苦しそうな表情をしているが、綾乃の猛攻の前には声が出なかった。
ハグハグしながら綾乃は自分の頬を椛にスリスリしている。
「柔らかくてスベスベェ～」
「うぐぅ～……やめてよ、ねえ」
ぽあんとした桜色の頬をした椛が少し潤んだ目で、しかも上目遣いで綾乃を見つめるが、それが綾乃の感情をさらに刺激してしまった。
「カワイイ、カワイイ、もうカワイイ～っ！」
「あうぅ～……」
椛はノックアウト寸前だ。だが、綾乃の攻撃はさらに続く。

クラスでも一番の大きいバスト（自称）を誇っていたりする綾乃の胸には今、椛の顔が押し付けられている。そんなわけで椛は呼吸ができなかったりする。
「うぐ、うぐぅ～……うっ」
椛の身体から力が抜けた。自分の世界に入っている綾乃はそんなことには気づきもしない。
ふと椛に視線をやった輝の表情が変わり、慌てたようすで綾乃を吹っ飛ばして椛を救出した。
「何してるんだよ！　椛が死んだらどうすんだよ、巨乳バカ！」
「巨乳バカって何よ！　好きで巨乳やってるわけ……あっ」
この時初めて綾乃は椛が死にそうになっていたことに気づき、輝の身体を遥か遠くへぶっ飛ばして、椛の身体を抱きかかえた。
「だいじょうぶ椛ちゃん、どうしてこんな……」
やったのは綾乃だ。自覚が少し足りない。
ゆっくりと椛は目を開けて綾乃の瞳を見つめて……。急に怯えた表情をして逃げた。
「お姉ちゃん怖いよぉ」
ぶるぶる震えてしまっている椛は輝の後ろに隠れて、輝の服を強く掴んで、顔だけを出して綾乃のことをじーっと見ている。
綾乃はショックを受けた。こんなかわいい女の子に嫌われるなんてありえないと思った。――明らかに非があるにも関わらず。
かわいい娘に恐れの眼差しで見られているなんて綾乃には耐えられないことだった。
「ごめんね椛ちゃん。お姉ちゃんが悪かったから……だから、だから、一緒にお風呂に入って全部水に流しましょう」
輝はそれは違うだろうと思ったが、今さっき綾乃の攻撃を受けてぶっ飛ばされたばかりなので、その気持ちは心に留めて置くことにした。
気持ちを切り替えた綾乃は、猛ダッシュで輝をぶっ飛ばして椛を抱きかかえて掻っ攫うと、お風呂場へと消えていってしまった。

フローリングの床の上で腹ばいになって倒れている輝は、二人が消えていった方向へと手を伸ばし、どっちにしてもぶっ飛ばされたと思い力尽きた。
輝がもう動くのもだるくて床の上で寝そべっていてしばらくすると、お風呂から出てきた綾乃に蹴飛ばされた。
「何やってるの、こんなところで？」
「別にぃ～」
「それよりも、お風呂入って気づいたんだけど、椛ちゃんの服が無いんだけど？　しょうがないから同じ服着せちゃったけど……」
綾乃の言う通り、椛はお風呂に入る前と同じ格好をしていた。付け加えると綾乃も当然服は自分のウチにあるので同じ格好をしている。
「服がないから、どうしたんだよ？」
「明日椛ちゃんの服も買いにいこうかなぁ～って思ってね。ほらだって、こんな格好じゃ目立つでしょ？」
巫女装束を着ている子供なんて街中には普通いない。
服を買いにいくのはいいとして、輝には気になる点がひとつだけあった。
「誰がお金出すの？」
しばらく考えて綾乃はポンと手を叩いた。
「皇子様はお金持ちだから大丈夫でしょ」
皇子様とは当然悠樹のことを指している。実は悠樹の家はお金持ちで、悠樹の銀行口座には親から毎月多額のお金が振り込まれている。その金で好き勝手にやれということなのだ。
ちょうどいいところに悠樹が帰宅して来た。
「ただいま」
そう言いながらダイニングに入って来た悠樹のことを綾乃が懇願の熱い眼差しで見つめた。
「皇子様ぁ～、綾乃お願いがあるんだけどぉ」
ちょ～猫撫で声＆ブリッ子モードで綾乃は悠樹に接近して、顔と

顔を間近に寄せた。
急にそんなことをされても悠樹は冷めた表情をしていた。綾乃敗北。
「お願いって何？」
「椛ちゃんにお洋服買ってあげたいんだけど、私たち一般人はお金がないから」
「それって皮肉か？　でも、まあいい。俺も服のことはこのままの格好じゃまずいと思っていたから買うよ」
「よっし！　ほら、椛ちゃんも皇子様にありがとうして」
綾乃に命じられるまま椛は悠樹に駆け寄って抱きつき、上目遣いで一言。
「お兄ちゃんありがとぉ」
この行動はお風呂で綾乃に仕込まれたものだ。綾乃は最初っから悠樹に金を出させるつもりだったのだ。
抱きつかれた悠樹は少し顔を赤くした。小さい女の子と接する機会があまりない悠樹は、小さい子供に抱きつかれるなんて初めての経験だった。
顔を赤らめてしまった悠樹を見て、綾乃はしてやったりとニヤリと笑みを浮かべた。悠樹をからかうのが楽しくてしょうがないのだ。
特にもうすることもなく満足した綾乃は自宅に帰ることにした。
「じゃあアタシ帰るから、椛ちゃんのこと頼んだわよ」
玄関まで三人は綾乃のことを見送った。
玄関を出る直前綾乃が、
「明日はアタシの気分でここに迎えに来るからよろしく」
輝と悠樹に何も言わせずガチャっと玄関のドアが閉められた。世界は綾乃中心に回っていた。

夜は更けて、家の中は寝静まっていた。
輝と悠樹は各々の部屋で眠り、椛はどこで眠るのかと話し合った結果、今は使われていない輝の両親の寝室で寝ることになった。

椛はダブルベッドに入りながら天井をじーっと見つめていた。
ベッドに入ってからもうだいぶ時間が経ったはずだが、まだ眠れない。それどころか目が冴えてしまっている。
自分が何者かわからない不安。いろいろなことが頭を駆け巡る。
椛という名前とお兄ちゃんを探していたことは覚えていた。それと、未空に人間じゃないと言われたこと――確かに自分でも自分が人間じゃないことはなんとなくわかる。けれど、人間じゃない自分は何者なのか、それが思い出せずにいた。
暗く静かな部屋で椛は居ても立っても居られなくなり、ベッドから飛び起きた。
枕をしっかりと抱きしめて、部屋の外へ静かに物音を立てずにゆっくりと出た。
廊下は暗く、恐ろしいほど静かだった。
椛は静かに廊下を歩き、とあるドアの前で立ち止まり、ドアノブに手をかけてゆっくりと回した。
ドアが開き椛は中へそっと入っていった。
部屋の中はこの家の中で一番掃除や片づけが行き届き、もともとは輝の妹の部屋だった場所。今はもう完全に悠樹の私物が置かれて彼の部屋に模様替えされていた。
静かに近づいて来た人の気配に悠樹は気づき目を覚ました。
「椛ちゃん……眠れないの？」
「うん」
不安そうな顔をして椛はうなずいた。
しばらく考えた悠樹であったが、掛け布団を持ち上げて椛を招き入れた。
「おいで、いっしょに寝よう」
椛は言われるままに布団の中に入っていった。
布団の中は悠樹の体温で暖められとても心地よかった。椛の不安は徐々に溶かされていく。
「ねえ、お兄ちゃん」

「お兄ちゃんって言われると恥ずかしいから悠樹って呼んでくれるかな？　それと輝も輝でいいと思うよ」
「悠樹、あのね、人間じゃない椛にやさしくしてくれてありがと」
「……うん」
椛は悠樹に擦り寄ると目をつぶり眠りについた。
悠樹は椛が人間じゃないなんて信じているわけではないが、信じていないわけでもない。ただ、どちらにしても証拠がなく、椛という存在は確かに今ここにいる。悠樹にとって椛がなんであろうと別にどうでもいいことだった。
悠樹はすぐ傍で眠る少女のことを少し考えてから眠りに落ちた。

深夜遅くまたしても小春市内の住宅から火が昇った。何の前触れもなく業火が家を包み込んだのだ。
深夜ということと突然火が上がったということもあり、近隣住民はまだ火事に気づいていなかった。
そんな中、燃え上がる炎をひとり見つめる者がいた。――星川未空。
未空はいったいここで何をしていたのか？
燃え上がる炎を無表情な顔で見つめる未空。その表情からは何を考えているのか全くわからない。
やがて、家の中から住人が死相を浮かべながら逃げ出してきた。
家の中から逃げ出して来たひとりの若者が叫び声をあげた。
「誰か助けてくれ！！」
家は轟々と燃え上がり近隣の住人も家を飛び出して来た。
大勢の人々が集まり、未空はその人ごみに紛れてこの場を後にしようとした。
家事に遭った住人のひとりの若者が、集まった人々にこう言っているのが微かに聴こえてきた。
「狐が、狐を見たんだよ」
その声は心底怯えきっているように聴こえた。

だがもう未空は振り向きもせず足早にこの場から離れていった。
火事の現場を離れて未空はある場所に向かっているのだ。その場所とは小春神社。火事の現場からそんなには離れていない。
徒歩なのでだいぶ時間がかかってしまったが、未空は鳥居をくぐり小春神社の境内に足を踏み入れた。
大きな神社ではない。入った瞬間に全体が見渡せる。
昔はこの神社はもっと広かった。だが徐々に狭くなり、今では人が訪れることなど滅多になかった。
神社の神が宿っていたとされる御神木である大きな楓。昔は秋になると紅葉して、美しい葉は見ものであったが、今は老樹となり紅葉するもなくなり、いつしか人々はこの楓のことを忘れてしまっていた。
その御神木であった楓の面影は今はもうない。火事で焼けてしまったのだ。
火事で焼けたことによって、そう言えばそんな木もあったと近隣住民に思い出されたのは、実に哀しいことだった。
黒く焼け焦げてもなおそこに立ち続ける大木。近々切り倒されることが決まったが、誰も反対する者はいない。
未空は焼けてしまった大木にそっと触れた。
「……復讐」
焼け焦げてしまった大木に触れながら、未空はゆっくりと空を見上げた。
「空は昔と変わらないのに、地上の移り変わりは早いのね」
空には星が綺麗に浮かんでいた。

第3話―ショッピングに行こう！

朝になり、大きなあくびをしながら部屋から出てきた輝は、ちょうど部屋から出てきた悠樹と椛と鉢合わせした。
あくびを途中で止めて輝は叫んだ。
「二人で寝てたのか！？　エッチだ、不潔だ、人として間違っているぞ！」
滅茶苦茶な言われようだった。
「そういう考えを抱く方が不純だ」
確かに輝はいろんな想像を瞬時にしていた。
「不純のどこが悪いんだ。純粋な人間なんてこの世界には存在しない。神が人間を創った時、天使の時に使った炎じゃなくて泥で人間を創ったんだ。そして、知識の林檎を食べた人間はエデンの園を追放されて……」
「何が言いたいんだ？」
悠樹の言うとおり輝の話は先が見えてこない。つまり、輝の言いたかったセリフはこれだ。
「悠樹だって人間である以上は汚れているんだ」
ふ～ん、という表情をした悠樹の会心の一撃が炸裂。
「……朝食自分で作るか？」
輝は痛恨の一撃を受けた。
「いや、朝食の準備お願いします」
内心、料理のできない自分に料理のことを出すなんて卑怯だと思いながらも、輝は負けを認めた。
悠樹は自分の後ろにいた椛を輝に預けるとキッチンに向かっていった。
残された輝は椛の手を取りダイニングに向かった。
ダイニングは輝が家の中で最も一番長くいる場所だ。
ソファーテーブルを囲んで大きいソファーが二つあり、そのソフ

ァーで横になりごろごろしながらテレビを見るのが輝の日課だ。
今日は椛を横に座らせて輝はテレビのリモコンで電源を入れた。
今の時間帯は子供向けのアニメもやっているので、とりあえず輝はそのチャンネルを回した。
椛はアニメを食い入るように見ている。
アニメの内容はメイド服を着た主人公たちが変身して、ねこ耳やらなんやらに変身して悪と戦うという内容だ。輝には理解しがたい内容だったが、思ったことがある。
「子供向け番組じゃない。深い深夜に大人が見る番組だ」
この番組で主人公が身に付けている変身時の服は当然の如く売り出されているが、なぜかそのサイズには子供用の他に大人用のサイズまで売り出されている。
アニメを見ていると、悠樹が朝食をトレイに乗せて運んで来た。
今日の朝食のメニューはトーストとスクランブルエッグとウインナー。簡単なメニューではあるが、輝が作ると誰にも理解してもらえない芸術作品になってしまう。トーストは闇のように黒くカチカチの物体に変化し、スクランブルエッグは殻入りの歯ごたえ万点カルシウム豊富な黄色と白色の混じった一つの塊になり、ウィンナーはタコさんウインナーにしようと、できもしないことに挑戦し、おぞましい怪物を作り出してしまう。
のどかに朝食を摂っているとチャイムがピンポーンと鳴った。
次の瞬間、ドンドン、ガチャガチャ、ドゴッっというけたたましい轟音が玄関から鳴り響いてきた。のどかな朝食は一瞬にしてぶち壊しだ。
ゴンゴンゴン！！　まだ玄関から音がしている。借金の取立てではないが、迫力なら負けていない。
コーヒーカップをテーブルの上に必要以上に強く置いた悠樹は、頭を抱えながら玄関に歩いていきドアを開けた。
ドアの先に立っていたのは準備万端な綾乃だった。
「おはよー！」

「近所迷惑だ」
「えっ？　何のこと？」
ものすごいとぼけぶりだった。
「ドアを殴ったり蹴ったりしてただろ」
「近くで工事でもしてるんじゃないの？」
玄関のドアには蹴ったような汚れ傷が付いている。それを確認する悠樹であったが、彼はそのことにはあえて触れなかった。
「まだ、朝食も終わっていなければ着替えも済んでいない」
「じゃあ、家の中で待たせてもらうから」
そう言うと綾乃は悠樹を押しのけ強引に家の中へ入っていった。
ダイニングに着いた綾乃は輝の横に来てウインナーを奪って口に入れると、
「早く食べて、着替えて、出かけるわよ」
「オレのウインナー！？　最後に残しておいたんだぞ！」
「最後に残しておくのが悪いのよ。人生なんていつ何が起こるかわからないんだから、好きなものは先に食べる。そうしないと後悔するわよ」
「おまえが食ったんだろ」
「だから何が起こるかわからないのよ」
「あ～っ、もう、意味わかんねぇ」
そう言って輝はコップに残っていた牛乳を一気飲みすると、怒ったようすで自分の部屋にいってしまった。
そんな光景を見ていた悠樹は深くため息をついた。
「はぁ、子供の争いを見ているようだ」
「仕返しよ、仕返し。アタシも前に輝に同じことされて、同じセリフ言われたから、そのままお返ししてやったのよ」
ウインナー闘争の根は以外に深かったのだ。
「お姉ちゃん子供みたい、あはは」
綾乃が振り向くと椛に指をさされ笑われていた。
「どうせアタシは子供よ」

コーヒーを喉に流し込んだ悠樹は、カップを置くと綾乃に背中越しに手を振りながら自分の部屋に行こうとした。
「じゃあ、俺着替えてくるから洗い物よろしく」
「何でアタシが！？」
「時間の節約」
悠樹は洗い物を押し付けて行ってしまった。ドアを叩かれたり蹴られたりして、悠樹にとって大事な朝食の時間を妨害されたことを少しだけ根に持っていた。
仕方なく綾乃はお皿やコップをトレイに乗せてキッチンに向かった。その際、椛も綾乃の後ろにちょこちょこしながらついていった。
キッチンに着いた綾乃は食器を流し場に置いてため息をついた。
「ふぅ、水仕事は肌が荒れるから嫌なのよね……？」
綾乃がふと横を見るとそこには椛が大きな瞳で自分のことを見ているではないか。
「手伝ってくれるの？」
「うん！」
「ホントに！？　椛ちゃん、ちょ～いい娘でちょ～カワイイ～！」
ぎゅぅ～っと椛を抱きしめた綾乃は急いで椅子を持って来て、その上に椛をちょこんと乗せた。
「椛ちゃんはアタシが洗ったお皿を拭いてね」
「うん任せて！」
かわいい椛の支援もあって綾乃は意気揚揚とお皿洗いに励み、どんどん洗ったお皿を椛に渡していく。
二人の息はぴったりで、どんどんお皿洗いのスピードは加速していく。だが、少し加速し過ぎた。
どんどん渡されるお皿を拭こうと慌ててしまった椛は、ついうっかり手からお皿を滑らせてしまったのだ。
床に落ちたお皿は四方に弾けて飛んで割れた。
「……ごめんなさい」
椛の瞳はすでに涙が零れ落ちそうになっている。そんな椛に綾乃

は笑顔を向ける。
「だいじょぶ、だいじょぶ、どうせ輝んちのだから」
笑顔のまま綾乃は割れたお皿の破片に手を伸ばした。が、その時！
「痛っ！」
指先から赤い血が滲み出て来た。綾乃は破片に触れた時に指を切ってしまったのだ。
涙を流しながら椛は紅い血を見た。その時だった、涙が急に止まり椛の表情が恐怖に染まっていったのは――。椛は紅い血に燃え上がる紅蓮の炎を見た。
「きゃーっ！」
急に叫び声を上げた椛。それに気づいて輝と悠樹が駆けつけて来た。
「どうした！　なんだ、泥簿か、強盗か、痴漢かっ！？」
一番取り乱しているのは輝だった。
「おまえが慌ててどうするんだ。――どうしたんだ？　叫び声をあげたのは椛ちゃんだろう？」
激しく泣きじゃくる椛。今はとても話せる状態ではなかった。変わりに綾乃が自分のわかる範囲で話した。
「二人でお皿洗いしてたら椛ちゃんがお皿を割っちゃって……それでアタシが破片で怪我して、急に椛ちゃんが……アタシにも何が起きたのかわからないのよ」
嗚咽しながらゆっくりと顔を上げた椛。その目には涙がいっぱいだ。
「うぐっ……げほっ……うっ、あはははは～っ！」
急に椛は腹を抱えて笑い転げた。その指差す方向には輝が立っていた。
「オレ？」
……無言で輝のことを見つめる悠樹と綾乃。そして、二人も笑い出した。
「く、ははっ、なんだその格好は！？」

「きゃはは、何それカッコわるぅ～、もうウケるよ輝ったら……はは」
最初は何のことだかわからなかったが、輝は自分の下半身を見て初めて気がついた。
「なんじゃこりゃ～！！」
ズボンがずり落ちて派手な柄のトランクスが丸見えだった。実に間の抜けた滑稽な格好だ。
「あはは、おもしろ～い！！」
まだ腹を抱えて椛は笑っている。何はともあれ椛が元気を取り戻してくれたのでよかった。
だが輝は顔を真っ赤にして急いでズボンを上げてベルトを締めた。
「なんだよ、急いで駆けつけようとしたらこうなっちまったんだよ。いい加減笑うなよ！」
やるなと言われるとやりたくなり、笑うなと言われると笑ってしまうのが人間の性である。特に綾乃はツボにハマッて大爆笑だ。
「きゃはは……もう、ダメェん……腹痛い……死ぬって、きゃは……」
「笑うならあっち行って笑ってろ、皿はオレが片付けておくから」
「きゃはは、うん……任せたから……きゃはは」
笑い過ぎて歩くのもままならなくなってしまった綾乃は、腹を押さえながら悠樹に支えられながらこの場を後にした。
椛はこの場に残り、輝のこと上目遣いで見つめていた。
「笑ったりして、ごめんなさい……」
「いい、いい、別に。笑いたい時は笑えばいいんだよ。さっ、椛もあっちいってろ危ないから」
「うん」
大きくうなずくと椛は走っていってしまった。
輝は一息ついて割れた皿の片付けを始めようとしたのだが――。
「きゃはははは～っ！！」
遠くからどっかの誰かさんの声が聞こえた。

「……綾乃笑い過ぎなんだよ」
輝は再び顔を真っ赤にして皿を拾い始めた。

出かける準備ができ、まず最初に椛の服を買いにいくことにした。
向かう先は歩いて二〇分ほどの距離にあるデパートだ。
自転車だと数分でいくことが可能だが、椛を連れて自転車の二人乗りでいくのは危険だということになった。
ちなみに輝はジャンケンで負けた奴が椛と歩いてデパートまでいき、残りの二人は自転車でいくという案の出したが、瞬時に反対され却下された。
椛と綾乃は手を繋いで仲良く輝と悠樹の前方を歩いている。綾乃は今、二人っきりの世界を満喫している。
「デパートに着いたら椛ちゃんのお洋服、いっぱい、いっぱい、買おうねぇ～」
「本当に椛のお洋服買っていいの？」
「だいじょうぶ任せなさい、代金は皇子様持ちだから好きなだけ買いましょう」
綾乃たちの後方で悠樹がクシャミをしたが、きっとただの風邪だ。虫の知らせなんてあるはずがない、きっと、たぶん、おそらく……。
だが、悠樹は嫌な予感がしていた。誰が椛の洋服の代金を出すのか、彼は聞かされていなかった。
しばらくするとデパートが見えてきた。もう、信号を渡ればすぐの距離だ。
信号が青に変わり、椛は綾乃と手を繋ぎ、もう片方の手を高く上げて信号を渡る様は、『お姉さんとお買い物、手を上げて信号を渡るなんて偉いねぇ～』って感じで、とてもかわいらしかった。
そんなかわいらしい椛の後ろ姿を見て、輝は自分の妹とついつい比べてしまった。
輝曰く、自分の妹は小さい頃から世界一かわいかった。だが、最近は兄に反抗的でちょっぴり生意気、でも、そんなところがまたか

わいんだよなぁ～。とのことである。
輝の妹の慧夢が最近輝に反抗的なのは事実だった。蹴りは飛んでくるは、罵声は飛んでくるはで、輝は反抗期なんだなと思っているが、実は別の理由がある。ついつい妹がかわいいあまり、輝がちょっと苛め過ぎてしまったのだ。それに輝は気づいていない。
デパートの中はそれなりに人で溢れていた。このデパートができた当初はもっと人で溢れていたのだが、何処も彼処も不況のあおりを受けているのだ。
それにもう一つ、客足が年々減少傾向にある原因がある。
小春市は大きく分けて、坂の上と坂の下を境界線に分かれている。坂の上は都市化が進んでいるのだが、坂の下は立地条件が悪く田舎臭い景色が広がっているせいか都市開発が遅れていた。当初は坂の下の都市化計画が市で計画されていたのだが、不況のあおりでその話は無かったことにされてしまったのだ。
デパートは七階建てで、六階までが売り場で七階は駐車場、そして、地下にも駐車場がある。
輝たちは三階にある子供服売り場に向かった。
子供服売り場には当然だが子供服がいっぱいある。それも年々増えているような気がするし、値段が大人服と変わらない――それよりも高い場合がある。
「さあ、お洋服選びましょう」
綾乃はとにかくヤル気満々だが、椛はいっこうに動こうとしなかった。
繋いだ手の先にいる自分を不安そうな瞳で見つめる少女。綾乃的ベストアングルだったが、今はそんなことよりも、なぜそんな顔をしているのかを聞かなくてはいけない。
「どうしたの、どれでも好きなの選んでいいんだよ『悠樹』持ちだから」
この時初めて悠樹は知った。
「俺が払うのか？」

「「もちろん」」
輝と綾乃の声が『謀った』ように重なった。しかも、満面の笑み。
「……予想範囲ではあったがな」
「じゃあそういうことで、皇子の許可も出たことだし椛ちゃんのお洋服いっぱい買いましょう」
ちなみに悠樹は許可を出した覚えはない、ただあきらめただけだ。
椛は辺りをきょろきょろと見回すが動こうとしない。いっぱいの服に囲まれて、どれを選んだらいいか迷い、困ってしまっているのだ。
そんな椛を引っ張り、リードしてくれるのは綾乃だ。
「アタシが選んであげるから、ねっ！」
手を引っ張られて、椛は売り場を駆け巡りツアーに連れていかれてしまった。
ツアーに置いていかれた二人はやることがなくなったしまった。
「どうする悠樹？」
「あっちに自販とベンチがあっただろう」
「そうだな」
二人は自動販売機で飲み物でも買ってベンチで女性の買い物を待つことにした。
二人は思う。女性の買い物にしっかり付き合える男はいったいどんな魔法を使っているのだろうか？
先に自動販売機の前に立った輝は財布を取り出し五〇〇円玉を入れると、
「おごるから何飲む？」
「コーヒー」
「じゃあオレは紅茶」
ベンチに座る悠樹にコーヒーを差し出し輝もベンチに深く腰掛けた。
沈黙の時間が続き、だいぶ時間が経った頃、輝が突然口を開いた。
「なあ悠樹」

「何だ？」
「椛ちゃんのことどう思う？　オレは人間じゃないっての信じてるんだけど？」
「どっちとも言えないが、人間である可能性の方が現実的だ」
「あっそ、つまんねぇ～な」
輝は両手をいっぱいに高く上げて身体を伸ばした。そして、
「でも、今の状況はちょ～おもしれー。武に話したらもっと楽しくなると思うんだけどな……」
「駄目だ」
間入れず悠樹の言葉が入った。
「それは絶対に駄目だ。確かに武は超常現象おたくだ、で必ず話に首を突っ込んで来る。そこが駄目だ。話がややこしくなる」
「どーしてさ、武きっと役に立つぜ」
「武の知識が役に立つ可能性はあるが、あいつは騒いで、はしゃいで、独りで先走って
周りをかき乱す」
「まぁな、武のことだから『マジで！？　ホント！？　スゴイやそれ！　ねぇねぇねぇ、うわぁ、もう、うれしーな』とか早口で騒ぎまくるよな……」
「だろ？　だから言うなよ。誰にも」
輝は立ち上がり空き缶をゴミ箱の中に投げ込んだ後に言った。
「椛ちゃんの記憶戻ると思うか？」
「さぁな。――一週間は待ってみるつもりだが……」
輝は眉を寄せて口を空けた。
「はぁ？　一週間って何？」
「一週間経ったら警察に連絡して椛を引き取ってもらうからな」
「なんだよそれ！　聞いてねえよ！」
「今初めて言ったからな。でもこれは守ってもらうぞ。いつまでも俺たちで面倒を看るわけにもいかないだろう」
「勝手に決めんなよ！」

「では、何かいい方法を言え」
「無い！　けど、記憶が戻るまでオレが面倒看る」
「アホだろおまえ、家事一つできない奴が小さな子供を育てられると思っているのか？　それに今の状態じゃ椛は国からの社会保障も受けられないし、病気になった時も困るだろう」
「椛ちゃんは人間じゃないから、もともと国からの保障なんて関係ねーよ」
　二人の間には明らかに奸悪なムードが漂っている。そこへ現れた綾乃がたまたまケンカを止めるきっかけになった。
「椛ちゃんの服決まったから悠樹お金出して」
「わかった……」
　ゆっくり立ち上がると悠樹は、ゴミ箱の中に空き缶を投げつけてこの場を後にしていった。

「……なぜ、こうなる？」
　『理解不能』の四文字が悠樹の頭の中をいっぱいにした。先ほどの輝との言い合いを悔いての発言ではない。ある『数字』がそうさせたのだ。
　横にいた輝もその『数字』を悪魔の数字だと思った。しかし、驚愕のあまり声には出せなかった。
　デパート内にある子供服専門店。そこで微笑んでいる綾乃は悠樹と輝にとっては悪魔が笑みを浮かべているようにしか見えなかった。その傍らにはかわいらしい服と靴に着替えた椛が佇んでいる。こちらはかわいらしい仔悪魔に見える。
　レジに表示されている数字は確かに、どうがんばっても、どう目を凝らそうと、二〇万七千九〇〇円と表示されている。これを悪魔の数字と呼ばずして何と呼ぶのか！？
　買った量が半端ではなかったのだ。椛が私生活を送るために必要な服をまとめてあれやこれやと綾乃が選んだ結果、大きい手さげ紙袋が六袋分。

店員は明らかに不信の眼つきで悠樹たちを見ている。こんな子供たちがこんな大金を払えるのだろうかという気持ちからだ。それに椛は試着した服を着たままで帰る準備オーケーである。
ショートしていた悠樹の脳が復帰した。
「……こんな金あるわけないだろ」
店員は少し嫌な顔をした。金がないならこんなに買おうとするなと、いらつきを覚えたのだ。だが、しかし悠樹は――、
「少し待っていろ、現金を下ろしてくるから」
決して買えないとは言わなかった。財布に持ち合わせが入っていなかっただけだ。
普段は主婦感覚の金銭感覚を持ち合わせている悠樹だが、たまにその金銭感覚がズレる。その要因は彼の育ってきた家庭環境にありそうだ。
デパート内にあるキャッシュディスペンサーで現金を下ろしてくると、悠樹はレジにバンと出した。ここでなぜか輝がニヤッとした。それは店員の表情が手のひらを返したようによくなったからだ。
これで買うまでの肯定は無事終了したわけだが、問題はこれからだ。
大きい手さげ袋を六袋も誰が持つのか？
一斉に『謀った』ように輝に視線が集中した。
「オレ？」
「当ったり前じゃない、アタシと椛ちゃんはか弱いレディーだし、悠樹はお金払ってくれたんだから
、輝が持って当然でしょ？」
みんなで分担して持つという選択肢は最初から存在していなかった。最初から輝が持つ運命だったのだ。
しぶしぶ納得した輝は手さげ袋を両手いっぱいに持った。――重い。
こんな荷物持ちのシーンはテレビなどの中だけだと思っていたが、現実にあるもんなんだなと輝は思った。

そんなことを思って回りを見回すと、すでにみんな先をさっさと歩いていた。
――荷物を押し付けられて置いていかれた。そう思った輝は急いでみんなの後を追ったが、三人はエレベーターに乗り込み、輝が乗り込もうとしたその時エレベーターのドアは閉まった。くだらないギャグとしか思えない出来事だ。
この時輝の何かに火が点いた。――輝猛ダッシュ！
階段まで走り、二段飛ばしで階段を駆け下りる。そして、一階のフロアの床が見えたところでジャンプ！
輝は階段から華麗にジャンプしたつもりだった。
ゴキッ！　骨が鳴った。思わず足首を押さえてうずくまる。これは痛そうだ。
いつもならこんなジャンプ軽々飛べるはずだ。体育の成績もいい方だ。だが、荷物が予想以上の邪魔をした。
捻挫くらいしてしまったかもしれない。だが、輝は走った。なぜだかわからないが走った。
痛みに耐えてどうでもいい根性を見せてしまった輝はどうにかデパートの外に出た。
みんなを探そうと辺りを見回した輝はすぐに遥か遠くを歩く三人を見つけた。
早く追いかけようと思った輝であったが、その足が不意に止まった。
少し遠くを歩いている人物。それが輝の目に飛び込んで来た。
「あの銀髪は……」
視線の先には、長い銀髪の髪を風に戯れせ歩く男がいた。
玉藻琥珀はある人物と会うためにカフェで待ち合わせをしていた。
軽い昼食を摂りながら琥珀が待っていると、黒ずくめの服を着た女性が琥珀の前に現れた。
女性が琥珀の前の席に着くと注文を取りにウェイターがすぐにや

って来た。
「ご注文はお決まりでしょうか？」
「彼と同じものでいい」
女性の声は落ち着いており、ミステリアスな雰囲気を感じさせた。
ウェイターの去った後、女性はテーブルに肘をつき話を始めた。
「今の生活には慣れたか？」
「ああ、君には感謝しているよ。行く当ても無かった僕を拾ってくれたわけだしね」
「そうか、それならいい。だが、目立った行動は慎むように言ってあったはずだが？」
「彼らは僕の血を呼び覚ましてしまったんだ。都で暴れていた頃を思い出すね」
二人はいったい何のことを言っているのか……琥珀が都で暴れていた？
琥珀は妖艶とした笑みを浮かべていた。その表情は女性の一言によって驚きの表情へと変えられた。
「椛がいたぞ」
「何だって！？　椛を見つけたのか？　神社に戻った時にはもういなかった」
「そうだな。私が見に行った時もすでにいなかった」
二人は椛のことを探していたのだ。だが、この二人と椛との関係はいったい……？
「それで、どこにいるんだ？」
「真堂輝という学生を知っているか？　今その家に椛はいる」
「すぐにでも会いにいく。あそこを出ていく時に不本意で傷つけてしまったが、長い時を共にした仲だ……」
「駄目だ、今はまだ会いにいくな。おまえはすでに二度の火事を起こしている。これ以上の表立った行動はするな」
「大妖怪と呼ばれていたこの妖狐琥珀が、たかが火事を起こしたくらいでなんだと言うんだ？」

なんと小春市で最近起きた火事は琥珀の仕業だったのだ。そして、椛が探していたお兄ちゃんとはこの琥珀のことであった。
だが、琥珀は椛の実の兄ではない。椛のいう『お兄ちゃん』とは自分より年上の若い男性を指し示す『お兄ちゃん』なのだ。しかし、この二人には言葉では語り尽くせないほどの絆で繋がれていた。
「椛は僕の命の恩人だ。都で痛手を負い命からがら逃げていた僕を匿ってくれたのは彼女だった……。だから僕は今まで犯した罪を彼女に言われ悔いるようになり、彼女と同じように人間のために今まで尽くしてきたんだ。……それなのに人間は！」
「だから我々は立ち上がったのではないか？　この土地を我々の仲間の楽園をにしようとな……」
「そうだよ、だから椛には僕たちの仲間になって欲しい。彼女は僕たちと同じ存在であり僕の大切な女性だ。それに僕らの計画に椛の力が絶対必要だ」
彼らの計画とはいったい何か？
全ての中心にいるのは記憶を失った少女――椛だった。

第４話｜御神木

ショッピングの帰り道、本来の目的であった椛のことを調べるために四人は小春神社に来ていた。

小さな境内に焼け焦げた楓の木はあった。そこに四人のよく知る人物が立っていた。

「こんにちは、奇遇ね」

微笑を浮かべ挨拶をしたのは星川未空だった。しかし、彼女はそのまま神社を出て行こうとした。

「待ってください星川さん」

悠樹が声をかけると未空はゆっくりと振り向き静かに言った。

「椛ちゃんの記憶、早く戻るといいわね」

もう、誰も止めなかった。誰が止めても未空はいってしまう。不思議なことにそう誰もが思ったからだ。

未空が去った後、綾乃は急に嫌な顔をした。

「星川さん用事があるって言ってなかった？」

声に少し怒りがこもっている。

「もしかして独りで椛ちゃんのこと調べてたわけ？　ちょっと協調性に欠けるんじゃないの！」

頭にきていた綾乃はみんなに同意を求めようと振り向いたのだが、そこでは椛が焼けた木の前に立ち、輝と悠樹がそれを見守っていた。それを見た綾乃は口を閉じることにして椛を見守った。

椛は見る影も無くなった黒く焼け焦げた大木にそっと触れた。手を触れ、おでこを押し当てた。

しばらくして綾乃が椛に声をかけた。

「何か思い出した？」

「ううん、何も……」

哀しそうな表情でそう答えた椛。しかし、悠樹は口にはしなかったが、椛に何かを感じ取った。

綾乃は残念そうな顔をしている。
「絶対神社と関係ありそうだったんだけど、違う神社なのかな？」
そう言いながらも綾乃はこの神社に何か感じるものがあった。それは綾乃だけではない、ここに来た全員がそう感じていた――星川未空も。
「今日は買い物に付き合わされて疲れたから、もう家に帰るぞ」
そう言って輝は荷物を大きく振りながら身体の向き変えると、さっさと神社を出ていってしまった。
「待ちなさいよ輝！」
綾乃も走って輝の後を追って神社を出ていった。
残された悠樹は椛の手を取り、椛の顔を見ると、
「記憶なんていつ戻るかわからないからな」
と呟いた。この言葉を無視するように椛は悠樹の手を引っ張って歩き出した。

マンションに帰って来た輝は綾乃と別れた後、すぐに荷物を置き『疲れたからもう寝る』と言い残して部屋の中にこもってしまった。
悠樹はダイニングを見回した。いつもは大抵ここで輝がごろごろとしながらテレビを見ているのだが、今日はいない。
誰かの視線を感じた悠樹はその方向を見た。そこに立っていたのは椛だった。
心配そうな瞳で自分のことを見つめている。そう思った悠樹はすぐに視線を逸らせてしまった。
椛にとって最善だと判断した自分の考え――。『一週間は待ってみる』、そうは言ったものの、悠樹の気持ちは複雑だった。
人の幸せはそれぞれで、椛の記憶が戻り何らかの解決策が出るまで自分らで面倒を看る。この選択肢は誰の幸せなのか？
「椛はどうしたい？　このまま記憶が戻らなかったら俺たちと暮らしたいかい？」
「うん、ここにいてもいいなら悠樹たちと一緒にいたい……。だっ

て、悠樹も輝も綾乃お姉ちゃんも、み～んな大好きだもん！」
「……俺も椛のこと好きだよ」
悠樹は判断を保留とした。椛のことを今後どうするか、わからなくなったからだ。
気分を切り替えようとした悠樹だったが、椛と二人きりにされて何をすればいいのかわからなかった。
昼下がりの二時過ぎ。昼食はまだ食べていなかったが、昼食を食べない悠樹には椛に食事を作ってあげるという発想が浮かばなかった。
綾乃を呼ぶという選択肢も考えたが、綾乃を頼ってばかりではいけない。椛と二人きりになることは今後もあるだろうから……。
「椛ちゃん何かしたいことある？」
「ううん」
「何かして遊ぼうか？」
「お話聞かせて、悠樹やみんなのお話。みんなのこといっぱい知りたいから」
「じゃあ、ソファーに座ってゆっくり話そうか」
時間はすぐに過ぎ去っていった。
悠樹は友達との楽しかった思い出や、小さい頃は輝につられて悪戯を一緒にしてよく怒られていたこと、昔は妖精や幽霊など、そういったものを信じていたことなどを話して聞かせた。
椛は自分のことを覚えていないので、ずっと聞き手に回っていたがすごく楽しそうに悠樹の話を聞いていた。
だいぶ時間が経過してしまったことに悠樹は気づき、はっとした。
「そうだ、夕飯の買い物行かないと」
「椛も行きたい！」
「そうだね、二人で行こうか」
悠樹はソファーから立ち上がると椛に手を差し伸べた。うれしそうな顔をした椛が小さなその手で悠樹の手をしっかりと握り締め立ち上がった。

そのまま二人は手を繋ぎ玄関を出た。この微笑ましい光景を輝が見たら絶対嫉妬するに違いない。
スーパーは歩いて一〇分程の距離にある。
店内は夕飯の食材を買い求める主婦たちでいっぱいだった。
悠樹は椛が迷子にならないように手をしっかりと握り、店内を歩き始めた
いろいろな食材やお惣菜コーナーも見て回るが今日のメニューが決まらない。
悠樹は学校のある日はいつも武の意見を参考にして夕食を決めているのだが、学校が無い日はなかなか夕飯のメニューが決まらない。
「椛は何か食べたいものある？」
「う～ん」
椛も首を傾げて困ってしまった。このままでは夕飯のメニューが決まらない。
その時だった。ちょうどいいところへ、夕飯のおつかいに来ていた藍澄武が姿を現したのだ。
「やあ悠樹」
「夕食何が食べたい？」
行き成りだった。会ってすぐに悠樹はそう聞いた。だが、武は平然と言葉を返す。
「今日はてんぷらうどんなんだよね～、ウチの夕飯」
「じゃあ、てんぷらうどんにするか」
武を椛に目をやった。
「その子だれ？」
「俺のいとこの椛だ」
「椛ちゃんっていうのか、カワイイ名前だね。ボクの名前は藍澄武、ヨロシクね」
差し出された手を掴み握手した椛はニッコリと微笑んでぺこりと頭を下げた。
「はじめまして」

「さて、てんぷらを買ってさっさと帰るか」
悠樹は椛の手を取って半ば強引に歩き始めた。
「待ってよ悠樹、会ったばっかじゃないか。椛ちゃんとももっと話したいし、ねえ！」
「夕食が遅れると輝がうるさいのでな」
全くの嘘だった。輝は一度寝ると朝まで起きない。悠樹はただ武に椛のことがばれるのを何としても避けたいのだ。
椛の手を引きお惣菜売り場へ急ぐ。ここでてんぷらを買って急いで帰る。
てんぷらの詰め合わせを手に取り急いでレジに向かおうとしたのだが、武がすぐに追いかけて来た。
「なんで逃げるのさ」
「別に逃げてはいない。急いでるだけだ」
「ウソだよ絶対。悠樹はボクから逃げてる」
こう言って武は椛のことを見た。
「これはボクの勘だけど椛ちゃんのことで隠し事でしょ」
――鋭い。武は勘が異様に鋭いのだ。
「今度ゆっくり話すから、今日は急いでいるんだ」
再び悠樹は椛の手を取り早足でレジに向かっていった。
「今度絶対話してよぉ」
武の声は悠樹に届いたかどうかわからない。
てんぷらの詰め合わせだけを買うと悠樹は椛を連れて外に出た。
「どうも武に隠し事をするのは得意ではないな」
「ねえ、どうして椛のことといとこって言ったの？　椛、悠樹のいとこじゃないよ」
二人は帰り道を歩きながら話した。
「そうだね、椛は俺のいとこじゃないよね。でも、これからは人前ではそういうことにしてくれるかな、椛が人間じゃないってみんなが知ったら大変なことになるからね」
「うん、わかった」

この時、悠樹は自分の発言にはっとした。椛のことを人間じゃないと何時の間にか言っていたのだ。
周りの雰囲気に押されて、悠樹の中で何かが変わりつつあった。
悠樹は昔からこんな性格だったわけでもないし、小さい頃は幻想的な世界を信じていた。いつから信じなくなってしまったのか……。
夕暮れの中を家に帰って来た悠樹と椛は少し早めの夕食を食べた。うどんを茹でて、スーパーのお惣菜売り場で買って来たてんぷらを乗せた手抜き料理。毎日の料理を作る悠樹としてはたまには手抜きも必要だった。
輝が起きて来てもいいようにてんぷらを残して置いたが、結局輝が起きて来ることはなかった。
そして、夜は更けて朝が来た。
部屋から出て来た輝は昨日と同じように悠樹と椛と鉢合わせになった。しかし、今朝の輝ははやし立てることなく、ただ、
「おはよ」
と言って、それ以上口にせずにダイニングにいってしまった。
朝食時の会話も二人とも椛とは楽しそうに話すが、二人の会話は単語を交わすのみだった。
昨日のデパートでの言い争いがまだ緒を引いているらしい。
そんな二人に挟まれた椛は表情が曇ってしまった。
「どうしたの二人とも？」
「……ごちそうさま」
そう言って席を立った輝は椛の質問に答えないまま部屋に帰ってしまった。
悠樹は心配そうな表情をした椛に見つめられてしまった。すぐに笑顔を作るがどこかぎこちない。
「……別に何もないから、椛は心配しなくていいよ」
わかりやすい嘘だった。誰がどう見ても二人の間に何かがあったのは明白だ。小さな椛にだってそのくらいわかる。
食事を終えた椛はすぐさま輝の部屋へと向かった。

か弱い力でドアを叩くと椛は緊張したような震えた声を発した。
「は、話があるの」
ドアが開かれその隙間から輝の顔が覗いた。
「何？」
「ううん、なんでもないの。ちがう、なんでもあるの」
「はぁ？　まあ、いいや、とにかく中入りなよ」
椛を部屋の中に入れると輝はドアをすぐに閉めた。悠樹に話を聞かれたくないような気がしたからだ。
部屋の中は少し散らかっていた。物が乱雑に置いてあり整理整頓されているとは言えない部屋だった。輝の部屋はこの家で一番散らかっている。
「適当な所に座って」
背の低い小さなテーブルの前に腰掛けた輝に続いて、椛も床にちょこんと座った。
「悠樹と輝がケンカしてるから、心配なの」
「だいじょぶだって、オレと悠樹のケンカは必ず最後は仲良くなれるから、今までだっていっぱいケンカして来たしな」
「でも、椛のことでケンカしてるんでしょ？　だから椛がいると、ずっとケンカが続いて……うぐっ……」
しゃべりながら椛は何時の間にか泣いていた。そう、椛も自分のことで二人がケンカしていたことに気づいていたのだ。
「だいじょぶだって、心配すんな。椛のことでケンカなんてしてないから」
「ほんとに？　椛のことじゃないの？」
「ああ、ホントだって」
嘘をついた。しかし、椛の澄んだ眼で見つめられると、ものすごい罪悪感を感じる。
「じゃあ、何で輝と悠樹はケンカしてるの？」
「え～と、それは……」
「……やっぱり椛のことでケンカしてる」

「……違うって」
「ごめんなさい椛のことで……ごめ……うぐっ……うっ……」
また椛は嗚咽混じりに泣き出してしまった。そして、そのまま輝の部屋を飛び出していった。
「ま、待て！」
手を伸ばしたが間に合わない。そして、すぐに追いかけたが玄関から外へ出ていってしまった――。
輝も急いで外に飛び出した。しかし、そこには椛の姿はなかった。どこにいってしまったのかと辺りを見回したがどこにもいない。
「マズイなこりゃー」
そう呟くと輝は家の中に戻って悠樹を呼んで来ることにした。
呼ばれた悠樹は椛が飛び出していったことを聞いてひどく心を動揺させた。
「本当か！　でもどうして？」
「オレらがケンカなんかしてっから、椛ちゃんは責任感じて出てっちまったんだよ！」
「行くぞ輝！」
「おうよ、手分けして探すぞ」
二人は家を駆け出て椛を探しに出た。
マンションを出てすぐに二人は分かれたが、心当たりなんて何も浮かばない。どこをどう探していいのかわからない。
輝は自転車に乗って近所を探すがどこにもいない。椛はいったいどこにいってしまったのか？
輝はひどく後悔をしていた。悠樹と喧嘩していたのは確かだったが、どうしてもっと上手な嘘をつけなかったのか。うまい嘘がつけていれば、椛は家を飛び出したりなんかしなかった。――そうじゃない、何で自分は悠樹と喧嘩なんてしてしまったのか……。
突然あることが輝の脳裏に浮かんだ。
「そうだ、あの神社かもしれない」
小春神社――そこにいるかもしれないと思った。根拠はないが、

あそこには何かがあった。
すぐさま自転車の方向を変えて小春神社へと急ぐ。
そして、小春神社の前まで来た時、前方の道から悠樹が自転車に乗って現れた。
「輝もここだと思ったのか？」
「ああ、悠樹もか？」
「そうだ。二人が偶然に逢うなんて奇跡だな」
「奇跡なら椛もここにいるハズだよな」
「たぶんな」
二人は境内の中に入った。そして、焼けた木の下で泣く少女を見つけた。
「椛、探したぞ」
悠樹がやさしく声をかけると、椛はゆっくりと顔を上げた。その瞳は真っ赤で、涙が止め処なく零れている。
「うぐっ……ううっ……うっ……」
嗚咽で全く声が出ない。そして、涙は地面に水溜りを作れそうなくらい流れ、止まることがない。
二人の男は同時に手を差し伸べて、同時に言った。
「「帰ろう」」
椛は涙を懸命に止め、肩を震わせながら両手で二人の手を取った。
そのまま椛は二人の男に抱きしめられた――。
「椛のことでは俺たち、もう喧嘩しないから……」
「出ていかれると悠樹とケンカするよか心が痛むからよ」
椛の身体は震えていた。
「うっ……う……でも……も、椛がいると……迷惑でしょ？」
「大丈夫だよ、いつまでもいていいから……」
悠樹はそう言った。彼の中で何かが弾け飛んで新たなものが生まれたのだ。
「さ～てと、帰るか」
気を取り直した輝の声を合図に三人は家への岐路に着いた――。

第5話_忍び寄る影

朝が来て、月曜日になり、いつも通り学校が始まった。
授業はいつもとなんら変わりなく進み、時間が過ぎていく。しかし、輝と悠樹にはその時間がとても長いものに感じた。
二人がそう感じるもの無理はない。椛を独り家に残して来てしまったのだから……。
当初は二人とも家に残ろうとして、これから日ごとに交代で一人が家に残ることにしようとしたが、この生活がいつまで続くかわからないので、椛に独りで留守番をしてもらわないと今後困るだろうという判断をして仕方なく二人で家を出て来た。
今まで仮面の被って学校生活を送って来た悠樹だったが、この日ばかりは気が気ではない。人に声をかけられても気づくのに遅れるし、問題を当てられても間違いを連発してしまった。そんな悠樹を見て、悠樹ファンはレアなものが見れたと喜ぶのだが――。
輝は輝で、いつもは騒ぎまくっているクセして、今日に限っては無口で物思いに耽る恋の悩みを持った青年みたいな顔をして、大勢の友達から心配され、春に大雪が降るとまで言われた。
ようやく昼休みになり、輝はいつも通り悠樹の近くの席まで行った。しかし、二人とも重々しい表情で無言だった。
すぐさま武が心配そうな顔をしてやってきた。
「どうしたのさ二人とも？　朝も声かけたのに反応してくれなかったしさぁ」
だいぶ遅れてから悠樹が言葉を返した。
「……いや、すまん」
「遅いよ反応。二人揃って変だよ、変！」
いつもならここで何らかの反応が返って来るのだが今日はない。
武は顔を赤らめ膨らませた。何かあるなら自分に話して欲しいに二人は心ここにあらずと言った感じで、武はなんだか仲間外れにさ

れた気分だった。
輝が突然席を立った。
「オレ、早退するわ」
「えっ？」
武が驚くのに間入れず悠樹も、
「輝が早退するなら俺も早退する」
「ええっ！？」
武は驚くことしかできなかった。なんで二人が早退しなければならいないのか検討もつかない。
「オレが早退するから悠樹は残れ」
「俺だって椛のことをほって置けると思うか？」
この時武はピンと来た。
「椛って、あの椛ちゃん？　あの子がどうしたのさ？」
「あの娘がどうかしたのか？」
会話の中に女性の声が入って来た。
三人が振り向いた先にいたのは月夜霊尊だった。彼女は何時の間にか三人の近くに立っていた。
武はまた驚いた。尊が輝と悠樹に関係があったなんて初めて知ったからだ。いつの間に友達になったのか、そんな疑問が湧く。
「あのさ、二人ともいつ月夜霊さんと友達になったの？」
「藍澄、今は黙っていてくれないか。それよりも椛がどうしたんだ？」
武は尊の言葉にショックを受けた。また仲間外れにされた感じだ。
武は仲間外れにされることを大変嫌う。特に輝と悠樹に仲間外れにされるなんて、ものすごい恐怖を感じてしまう。なのに輝と悠樹は武に隠し事をしていた。
尊の質問に促されて輝が答えた。
「椛を家に独り残してきたのが心配でさ」
――無言のまま数秒時間が経過した。そして、尊は思わず笑ってしまった。

「ふふ、そんなことか。てっきり私は椛が怪我か病気でもしたのかと思ったよ」
「笑いごとじゃねぇーよ。あんな小さい子に留守番させるなんて」
「大丈夫だよ、あの子はしっかりしてそうな子だから」
尊は笑いながらそう言った。
武はなんとなくだが話が見えてきた。
「あのさ、つまり、こないだボクの会った椛ちゃんが輝んちで独り留守番してるってこと？」
「そういうことだ」
悠樹にそう言われて武は納得したが、肝心な秘密は何も知らない。でも武は疎外感から解放された。
「な～んだ、そういうことか。でも、二人とも心配し過ぎだよ」
とりあえず椛の話が一区切りついた所で輝が尊に聞いた。
「そうだ、星川さんは？」
「未空なら今日は休みだ」
ここで武は再び驚きと同時に仲間外れにされた気分になった。輝から未空の名が出るとは思いもしなかったのだ。
「あ、あのさ。輝と悠樹はいつ月夜霊さんと星川と友達になったの？」
輝と悠樹は少し困った。成り行きを話すわけにはいかないので、どうやって武に説明したらよいのか？
二人が黙っていると尊が口を開いた。
「私と悠樹は同じクラス委員で、未空と真堂も委員が一緒だろ？そして、私と未空はもともと仲が良かったし、悠樹と真堂も仲が良かったので、それで四人で仲良くなったんだ」
理由としては無理がないが、悠樹と尊は友達になったとしても、輝と未空が友達になったなんて武としては少し信じられなかった。しかし、月夜霊さんは嘘をつくキャラには思えないし、別に嘘をつく理由もないだろうと思い、信じることにした。
武はすっかり忘れていたお弁当のフタを開けた。

「そうだった、お昼食べなきゃ」
そんな武を見て輝は、今は昼休みなんだと思い、あることを思い出した。
「そうだ。図書委員来なくてもいいって言われたけど、昼って本当は仕事の時間だからいってみるか」
席を立ち上がり図書室にいこうとした輝を尊が止めた。
「今日は管理の人が休みで図書室は開いていないぞ」
「えっ？　そうなの？」
せっかくヤル気を見せようとしたのだが、図書室が閉まっているのでは仕方ない。
輝は再び席について武の昼食に付き合うことにした。

学校を休んだ未空はある場所に向かっていた。
輝と悠樹が学校にいる今しか椛を襲うチャンスは無い。だから急いで輝のマンションに向かわなくては……。そう未空は考えた。
マンションに着いた未空は急いで階段を駆け上がり、輝の部屋の前まで行くと、まずドアノブに手をかけた。――開いている！？
未空はゆっくりとドアを開けて、静かに部屋の中に忍び込んだ。
ダイニングのドアを開けて入って来た未空は不敵な笑みを浮かべた。
「間に合ってよかったわ。でも、やっぱりあたしが思った通り、今がチャンスと考えていたのね、あなたは……」
ダイニングの中ではすでに椛と琥珀が対峙していたのだ。未空は琥珀の計画を阻止しに来たのだ。
未空は琥珀から目を離さないように移動して椛の前に立ち、椛は未空の背中に隠れる形となった。
「僕は椛に用があるんだ、そこを退いてくれないか？」
「駄目よ、この子は渡せない。この子を渡すととんでもないことが起こりそうな気がするから……」
「とんでもないことか……さすがここまで来たことはあるな娘。だ

が、理由はそれだけじゃないんだ椛。僕は椛を敵に回したくない、できれば僕らの仲間になって欲しいんだ」
椛は未空を後ろに押し退け前に一歩踏み出した。
「それは私にはできないわ、琥珀」
まるで別人のような椛。その声質は幼児のままだが、口調と表情は妙に大人びていた。――記憶が戻ったのだ、それもだいぶ前に戻っていた。
「なぜだ！？　なぜ僕らの仲間になれないんだ？」
「琥珀、貴方と私は長い時を一緒に過ごし、多くの部分を分かち合うことができました。しかし、私と貴方は根本の存在理由が違ったのです。人々の想った我々のイメージは違うものだったのです」
「人間は僕らのことを忘れようとしている。だから僕らは人間を支配することによって、存在を維持しようとしているんだ。この世界に残るためには仕方ない選択なんだ」
「琥珀、それは間違っているわ。この世界は神が創ったものではなく、神や妖怪などそう言った存在は、それを求める人間によって想像され存在しているもの。人間を支配するなど間違っていることだわ」
この世界にいる全ての神々及び妖怪や妖精などは、人間によって想像され創り出された存在だったのだ。
人間が救いを求めることにより多くの神が生まれ、人間が何かに恐怖することによって妖怪などが生まれたのだ。しかし、今現在では多くの存在たちが人間たちから忘れれようとしていた。
「僕は消えるのは嫌だ。椛だって人々から忘れられ、神社は廃れ、御神木を焼かれて人間を恨んでいないのか？」
「そうね。私は人々の信仰によって存在していたものだから、信仰されなくなった今現在は力も衰え存在が消えかけ、ついには幼児化までしてしまったわね。そして、御神木の楓の木まで焼かれてしまって完全に消えかけてしまった――でも、それも運命。人々が私のことを必要としない時代が来たことのだけ、それならば消えるのも

運命として受け止めます。でも、今は……」
小春神社の神として存在していた椛は消滅の危機まで一度陥った。しかし、今は記憶も取り戻し、力も取り戻しつつある。それは輝や悠樹たちのお陰だった。
椛の存在を身近に感じ、椛が存在していることを実感する。その想いが強ければ強いほど椛は存在していられる。
それと同じ方法を琥珀は行ったのだ。人間の世界に溶け込むことによって自分の存在を維持する。そして、今、琥珀はそれを大規模にやろうとしていたのだ。
「僕らはこの小春市に僕らのように消えかけている存在を呼び、人間の世界に溶け込ませる。そして、いつしか人間を支配する存在へとなるんだ。そのための大規模な術を行うためには椛の力も借りなくていけないんだ。椛、ここに僕らの楽園を創ろう！」
沈黙して話を聞いていた未空が口を開いた。
「小春市全体に張り巡らせれていた術はそのためだったのね。術を張ることによって、戸籍も、なにも自分を証明する物のない存在たちを人間の世界に溶け込ませるための人間への目くらまし……」
未空は休日の二日間、小春市全体に張り巡らされている術を不信思い、独りで調査をしていたのだ。
琥珀の手が高く上げられた。
「人間にしては高い霊力を持った娘だ。この場で始末せねば僕らの脅威となることは間違いないな」
上げられていた琥珀の手が獣の手へと変化し、鋭く振り下ろされ空を裂いた。すると、風の刃が巻き起こり未空に襲いかかった。
未空はそれを間一髪で避けると、椛の手を掴みこの場から逃げようとした。しかし、風の刃が再び繰り出された。
風の刃を避けそこなった未空は腕を切られてしまった。掠っただけであったが、服は二〇センチほど切り裂かれ、そこから血が滲み出していた。
腕を切られたことなど構わずに未空は椛の手を引いて走り続けた

が、不意に身体を後ろに引き戻されてしまった。
未空が後ろを振り向くと、椛の片方の腕が琥珀に掴まれているではないか。椛は二人に腕を引っ張れて身動きのできない状態になっていた。
「琥珀放して！」
「娘！　椛を渡してもらおう」
未空はポケットに入れていつも持ち歩いている儀式用に使うナイフを鞘から抜いて琥珀に飛びかかった。
ナイフは琥珀の腹に刺さり、真っ赤な血が服に染みて滲み出て来た。
「よかったわ、黒魔術のナイフを持ち歩いていて……」
普通はそんなナイフを持ち歩く人間などいないが、そのことが今回は役に立った。
腹を刺された琥珀は椛の腕を放してよろめいた。
「くっ……小癪な！」
琥珀はナイフを抜き取り床に投げつけると、未空の首を片手で掴むと力を込めた。
「……く、苦しい……ううん……」
未空は首にかけられた手を必死に取ろうとしたが、その最中に全身の力が抜け動かなくなってしまった。
琥珀が首から手を放した瞬間、未空の身体はバタンと床に崩れ落ちた。
すぐに琥珀は椛を捕まえようとしたが、すでに姿が無い。
「……逃げられたか」
琥珀は腹を押さえて出血を止めながら、玄関からゆっくりと出ていった。
――それからだいぶ時間が経過して、悠樹が自宅に帰って来た。
悠樹はマンションの部屋に行く途中、不信な血痕を見つけた。それは自分の部屋まで続いている。
そして、血痕は本当に自分の部屋の前まで続いていた。

慌ててドアに鍵を挿し込み鍵を開け、ドアノブを引くがドアが開かない。まさかと思い、鍵をもう一度開けるとドアが開いた。
ドアを開けるとすぐそこの廊下に未空が倒れているではないか！
悠樹はすぐに未空に駆け寄り、脈があるか確かめ、息をしているか確かめた。大丈夫だ、どちらも正常だった。しかし、首に絞められたような痕がある。
ここでいったい何があったのか、悠樹には検討もつかなかった。
悠樹はまずは未空の身体を軽く叩き起こそうとした。
「星川さん、大丈夫ですか？」
「……ううん……葵城クン？」
未空がすぐに気がつき、悠樹は安堵の表情を浮かべた。
「よかった、気がついてくれて。でも、どうしたんですか、何があったんですか？」
「椛ちゃんが琥珀という人物に襲われそうになって、あたしはそれを阻止しに来たのだけど、気絶させられてしまって……その後はどうなったのか……」
ゆっくりと状態を起こした未空の腕を見て悠樹は驚愕した。
「腕から血が出ているじゃないですか！」
「大丈夫。もう血は止まっているから」
「……もしかして、玄関の外の血も星川さんの！？」
「それはきっと琥珀の血よ。ナイフで刺してやったから」
悠樹は未空が人を刺したということにびっくりし、なぜナイフなんかを持ち歩いているんだと思ったが、そのことには触れないで別の話をした。
「それで、椛はどうしたんですか？」
「わからないわ。でも、きっと逃げてくれたはずよ」
ふらつきながら未空は立ち上がると玄関から出ていこうとした。
椛と琥珀を探しにいく気なのだ。
「どこに行くんですか！？」
「早くいかないと」

「待ってください、僕には話が全然わかりません。まずは星川さんの腕の手当てをしながら、詳しく話を聞かせてください」
ダイニングで未空の手当てをしながら悠樹が聞いた話は、高等向けで悠樹が信じられる内容ではなかった。だが、未空が傷を負っていることは事実だし、椛の姿も消えてしまっている。
「僕は椛を探しにいきますが、星川さんはここで待っていてください」
「駄目よ、あたしも行くわ」
「駄目ですよ、星川さんは怪我をしているんですよ」
未空の腕には包帯が巻かれ、首にも絞め痕を隠すために包帯が巻かれている。だが、未空の決意は固く、その瞳は真剣だった。
「あたしも行く」
「……わかりました」
悠樹はそれ以外の言葉は言えなかった。
二人は急いで椛を探しにいった。ある場所に向かって――。

悠樹と未空が家を出て比較的すぐに輝が帰って来た。
家まで続いていた血痕に驚かせられたが、家の中に入った輝はもっとびっくりした。
「なんじゃこりゃ～！？　なんで家の中が荒らされてるんだ？」
それは琥珀が暴れたためだが輝は知る由も無い。
「椛ちゃ～ん！」
返事が無い。
「椛ちゃ～ん！」
やはり返事が無い。ここに椛はいないのだが、輝は知る由も無い。
「……何があったんだ！？」
輝は全ての部屋中を隈なく探したが、誰もいない。
物置もベランダもトイレの便器の中まで探したがいない。
「神隠しか！？　じゃなくって誘拐か！？」
ここで輝の思考は一時停止。――そして、復帰。

「悠樹は知ってるのか……連絡……ってあいつケータイ持って無いじゃん」
悠樹は今時珍しい、携帯電話を持っていない高校生だった。その理由は携帯電話を持っていると、何時も束縛されているような気がするかららしい。
「そうだ、綾乃は帰って来てるのか！？　えっと、あいつの力を借りるのか？　誰が俺が！？」
輝はだいぶ取り乱している。そのまま、玄関を出て隣の綾乃の部屋に行った。
ドアノブに手をかけると鍵が開いていた。
綾乃だって自分の家に無断で入って来るのでお相子だ。ということで輝は家の中に飛び込んだ。
「……」
勢いのよかった輝の動きが停止し、身体が氷のように固まってしまった。
輝の視線の先には、同じく固まってしまっている綾乃の姿が……しかも、風呂上りでバスタオルを身体に巻いただけの状態！？
綾乃の肌から立ち上る湯気を遠い目をしながら見て輝は呟いた。
「おじゃましました」
「きゃ～～～っ！」
ってことになるのは当然の展開だった。
次の瞬間、綾乃が自分の方に近づいて来たのまでは覚えているのだが、そこで頬に強烈な痛みを覚えて記憶がプツリと停止した。
輝が目を覚ますと、女性の顔が自分を覗き込んでいた。
「だいじょぶ輝？」
綾乃だった。もうすでに髪の毛を乾かして服を着替えていた。
「……殴っただろ？」
「だってぇ～、しょうがないじゃない」
「別に裸見たわけじゃないんだし、殴ることないだろ」
「あんたが行き成り入って来るからいけないんじゃない！」

「こんな時間に風呂なんか入ってるからいけないんだろ」
「だって六時間目の体育で汗いっぱいかいちゃって気持ち悪かったんだもん。輝がチャイムも鳴らさないで入って来るのがいけないよ！」
「おまえだってたまにウチに勝手に入って来るだろ！」
お相子だった。この話の決着はいつまで経っても平行線を辿ることだろう。だが、今はそれよりも椛のことだった。そのことで輝は来たのだ。
「勝手に上がったのは悪かったけど、それよりも、椛がいないんだよ。しかも部屋が荒らされてるし……」
「もう一度言って！？」
「だから、椛がいなくて部屋が荒らされてるんだよ」
「身代金目当ての誘拐！？」
「わかんねぇよそんなこと。とにかく綾乃も椛探すの手伝え」
「あったり前じゃない」
「じゃあ急いで行くぞ」
走り出そうとした輝の腕を綾乃が掴んだ。
「ちょっと待って、どこを探すのよ？」
「知るかそんなの！」
「まずは輝んちで手がかりとか探した方がいいんじゃないの？」
こう綾乃に言われて、二人はまずは輝の家で何かないか探すことにした。
輝の家で手がかりを探し始めてすぐに、綾乃はダイニングの上にであるものを見つけた。「バッカじゃないの輝」
「はぁ？　オレのどこがバカなんだよ！」
「これ見なさいよ」
綾乃は片手を腰に当て、もう片方の手でテーブルの上にある紙を指差した。
「あっ、こんなのあったんだ」
呟きながら輝はその紙を手に取り、書かれている文字を読み上げ

た。
「椛が琥珀という人物に襲われて行方がわからなくなった。俺と星川さんで探しにいく――悠樹。……はぁ？　意味わかんねぇよ、もっと詳しく書けよ。ってか琥珀ってもしかして……あの琥珀か！？」
輝の表情が驚愕に変わった。
「琥珀って誰よ？」
「長い銀髪の若い男で、この前学校の図書管理人になったばっかの人だよ」
「だから、なんでその人と椛ちゃんが関係あるのよ」
「いや、待てよ。違う琥珀かもしれない……けど、あの琥珀は確かに変な感じがした……そうだよ、椛ちゃんと同じような感じがしたような気がする」
「それってまさか！？」
「琥珀も人間じゃないかもしれない！」
「もしかしてだけど、椛ちゃんの探してたお兄ちゃんって、その琥珀のことなんじゃないの？」
「ナイスだ綾乃！　オレも冴えてるけど、おまえも冴えてるな。でも、わかんねぇことばかりだ。くそーっ、とにかくどこでもいいから椛を探しにいくぞ！」
輝はわき目も振らず急いでいってしまった。
「待ってよ輝！」
綾乃のも輝の後を追って玄関を出た。

椛は逃げていた。
記憶は戻ったが、力の方がまだ全くと言ってほど回復していない。
椛の力は神格として人々に信仰されていた想いのエネルギーが根本だ。しかし、今の椛は神としての信仰を失っている。今ここにいるのは、ただの少女でしかなかった。
一度消滅しかけた椛だったが、輝や悠樹たちが自分の存在を強く感じてくれたことにより、どうにか消えずに済んだ。だが、彼らは

神としての椛を信じていたのではなく、少女椛という存在を信じてくれたに過ぎない、それでは元の力は取り戻せなかった。
ただひたすらに何処に向かうでもなく逃げ続ける椛。自分はいったいどこに逃げようとしているのか？　なぜ自分は逃げなくてはいけないのか？　私は琥珀を探していたのではないのか？
椛の頭の中でいろいろな考えが、浮かんでは解決されないまま蓄積され、頭は痛いほどに混乱していた。
椛は琥珀を探していた。御神木であった楓が炎に包まれた晩――琥珀は怒りに燃えて火をつけた人間たちを追って出ていった。
出ていく琥珀を椛は止めようとしたが、逆上している琥珀は昔のように悪に心を支配され不本意ではあったが椛に傷を負わせて出ていってしまった。
椛は傷を治すことはできたが、最後の砦であった御神木も焼けてしまい存在の危機に陥った。
椛は琥珀の帰りを待った。しかし、琥珀が戻ってくることはなく、椛は琥珀を探すために外の世界へ出たのだ。
「琥珀に会わなくては……」
琥珀をどうにかして説得する。それには力ずくでもかまわない。しかし、今大きな力を無理して使えば自分の存在が消えてしまうかもしれない。
椛は哀しさを感じた。琥珀には消えるのも運命なのだと言ったが、今は自分が消えてしまうのが哀しかった。
輝や悠樹たちとの出逢い。それが椛には心残りだった。今消えてしまうのは嫌だと思った。
遥か昔は人間と椛は近い存在だった。人々は椛を信仰して、誰もがその存在を信じ、椛もまた人々の前に姿を現すことがあった。しかし、現代では椛のような存在が人の前に姿を現すことが叶わぬ時代となってしまった。
椛はとても哀しかった。久しぶりに人々と接し会えたというのに、なぜ消えなくてはいけないのか？

昔はあんなにも多くの人々に慕われ敬われていたというのに……。
人々の想いを聞き届け、川の氾濫を食い止めたこともあった。しかし、今は川は高い壁に囲まれ大きな氾濫を起こすことはなくなった。
人々の想いを聞き届け、飢饉に悩む人々を救ったこともあった。しかし、今の日本では食料に困ることなどない。多くの人が餓えて死ぬことなどない。
全ては昔と変わってしまったのだと椛は哀しんだ。必要とされなくなった自分は消えてしまう存在なのだと時代の流れに運命を任せた。
椛は自分でどこをどう歩いたか覚えていなかったが、気がつくと小春神社の前に立っていた。
「御神木は焼けてしまったけれど、私の場所はここにあるのね……」
ゆっくりと小春神社に入っていった椛。そして、彼女は焼けた木の下までいった。
そっと焼けてしまった木の表面に手を触れ、椛は目を閉じた。
大きな命の息吹が椛の小さな手を伝わり感じられた。表面は焼けてしまっているが、木はまだ生きていたのだ。
「あなたは強いわ。でもこのままでは切り倒されてしまうでしょう。だから、私の力を分けてあげます」
椛は両手で木を抱きかかえるようにして手を回した。大きな木には手が回りきらないが、それは関係ない。椛が楓の木をやさしく包み込むことが大切なのだ。
椛は自分の力を焼けてしまった大木に流し込んだ。こうすることによって、元通りの立派な楓の木に還してあげようとしているのだ。
焼けた大木は椛の力を流し込まれ、見る見るうちに表皮が蘇り、枝は伸び、ついには葉を付け季節外れの紅葉に華咲いた。
綺麗な紅葉の下で椛は涙した。
「何年ぶりの紅葉かしら……」
長い年月の間、紅葉することのなかった御神木が今再び紅葉し綺

麗に色づいたのだ。
しかし、突然、紅葉した葉が急速に枯れ落ちて、枝も木も枯れて全てが朽ち果てようとした。
「どうして？　どうしてそんなことをするの！」
――違った。楓の木はただ朽ち果てようとしているのではなかった。だから椛は叫んだのだ。
楓の木の力が全て椛の身体の中に強引に流し込まれていく。命の息吹が椛の身体の中に止まることなく流し込まれていく。
「どうしてそんなことをするの？　このままではあなたは枯れてしまうわ！」
椛の呼びかけを無視して、楓の木は持てるエネルギーを全て椛の中に流し込もうとしている。
椛は拒否しようとしたが、それでも止まらなかった。
楓は枯れ果てて、背をどんどんと縮ませ、最期には枝一本の太さまでになって、消えてしまった。
椛は泣き崩れてしまった。楓の木は自分を生かすために力を全て自分に注ぎ込んでくれたのだ。
椛は楓の木に力を与え、その後、琥珀を力ずくでも説得をして消えるつもりだった。それなのに自分は消えてはいけないようだ。
――椛は全ての力を取り戻した。これならば琥珀とも同等以上に渡り合える自信がある。自分の力で琥珀と話をつけなくてはいけない。
「……ここで待つわ」
きっとここで待っていれば琥珀が現れる。そんな気がした。

輝の家を出てすぐに琥珀は椛を追おうとしたが見つからなかった。
浅手ではあったがナイフで刺された傷を癒すのにだいぶ力を使ってしまった。琥珀にとってそれは誤算だった。まさか、あの場所で未空のような特別な人間に出くわすとは思いもよらなかったのだ。
傷は完全に癒え、出血も止まったが、それに使った力は重症を負

った時と同じくらいだ。あのナイフには未空によって特別な術が架けてあったのだ。
琥珀は椛のことを町中探すが見つからない。
特別な力を持った者同士は気配で相手の場所を特定することができるが、範囲が広過ぎるとそれもできない。手がかりがない以上は闇雲に探すしかなかった。
椛はいったいどこに行ってしまったのか？　計画は進み椛をなんとしても探さなくてはいけないというのに……。
琥珀たちの計画にはどうしても椛の力が必要だった。
小春市がまだ小春市と呼ばれていなかった遥か昔、この地域で最も力を持った神は椛だった。この地域を治めていた神でなくては最後の術は架けられないのだ。
しかし、琥珀が椛を自分たちの仲間に引き入れたい理由はそれだけではなかった……。彼は椛に対して深い感情を抱いているのだ。
琥珀はあることに気づいた。
「そうだ、あそこならば椛がいるかもしれない」
二人が長い時を共に過ごしたあの場所。小春神社に椛はいるのではないか。そう思い琥珀は運命に引き寄せられ小春神社に向かった。
運命は嘘をつかなかった。琥珀は小春神社の前に来て、椛がこの中にいることを確信した。
小春神社には人の目や感覚ではわからないが結界が張られている。しかし、それは琥珀を阻むものではなかった。関係ない人間に危害を加えないように椛が人間を入れないように張ったものだ。
琥珀は結果に触れて腕を突き刺した。その感覚は琥珀にとってはゼリーに触れたような感覚だが、人間が触れると鋼鉄の壁のようである。
琥珀が結界を通り抜け境内に入ると、やはりそこには椛が立っていた。
「待っていましたよ琥珀」
椛の姿は巫女装束に着替えられていた。本来は自らの衣装は自ら

の力によって変えられる力を持っているのだ。それは姿にも応用される。
　少女であった椛が光に包まれたかと思いきや、次の瞬間には、椛が立っていた場所には巫女装束を着た大人の美女が立っていた。――これが椛の元の姿だったのだ。
「力を取り戻したのか椛？」
「ええ、神の時の力とは別の力が私の身体の中には宿っていますが、その力の大きさは昔と変わりません」
「そうか、よかった。椛が元の姿に戻って本当に僕はうれしいよ。その力があれば大きな術を使うことができ、僕らの計画に大変役立つことだろう。椛、僕らの計画に協力してくれないか？」
　椛は首を横に振った。
「それはできないわ。けれども、あなたの言ってる術とは何なの？」
「僕らはこの大地を使って世界中にいる同志たちと交信し、この小春市に呼び集めたい。そのためには土地神である椛の力が必要なんだ。土地の全てのエネルギーを直接使えるのは椛、君しかいない。僕らでは少しくらいの土地のエネルギーを借りたり使ったりすることはできても、大量のエネルギーを一度に操ることができるのは土地と密接な関係にある椛しかいないんだ」
「そうね、私がこの土地に呼びかければ大きなエネルギーが操れるでしょうね。そうすれば、世界中に交信することもできるし、エネルギーを集中させれば都市一つくらいなんて簡単に吹き飛ばせるでしょう」
「そうだよ。そのエネルギーを使ってこの小春市を完全に外の世界と隔離する計画なんだ。外からの侵入者を一切拒み、中にいる人間たちは幻の世界で生きてもらう」
　椛はすごく哀しそうな瞳で琥珀のことを見つめた。
「やはり貴方と私は全く違うのね」
「仕方ないよ。僕は人間の恐怖心から生まれた存在なのだから……」
　こう言った琥珀の瞳もとても哀しそうで、遥か遠くの何かを見つ

めていた。

第6話_妖狐

元はただの狐であった。それがいつしか大妖怪琥珀と言われるまでになったのだ。

遥か昔、琥珀がまだ普通の狐であった頃。琥珀は普通の狐ではあったが、その毛の色は周りの者がいわゆる狐色なのに対して、琥珀は白銀であった。

白銀の琥珀は周りの狐たちから仲間外れにされることもあったが、琥珀の母だけは他の兄弟たちと変わらぬように琥珀を育てた。

ある日、琥珀は空腹に耐えかねて人里に下りたことがあった。

人里には恐い人間が住んでいるので決していってはいけないと母狐に言われたことがあった。しかし、今はその母狐も猟師に弓矢で射抜かれ死んでしまい、どこかに連れていかれてしまった。その光景を木々の間から隠れて見ていた琥珀は決して人間と関わっていけないと思った。

人里に下りて帰って来た仲間もたくさんいる。その仲間はご馳走を持ち帰って来た。しかし、大半の仲間は重症を負わされて命からがら逃げて来たり、一生帰って来ないことがほとんどだった。

それでも琥珀は食料を求め山を下りて人里に向かった。

里に住む者たちは貧しい農民ばかりだ。

都では豪華な屋敷に住む貴族たちがいるが、地方の小さな里に住んでいる人々の家は現代では家と呼べない物がほとんどだった。

家の形は円錐で、その基礎は木でできているが、その表面は泥や草などでできている。原始時代のような家だが、下層の人々の家はこれが当たり前だった。

文化の伝達が遅いので都と地方では格差が大きくできてしまうのだ。

里に着いた琥珀はびくびくしながら、人間に見つからないように散策を始めた。

里に来たのは今回が初めてのことだったので、どこに行ったいいのか、どこに何があるのかわからない。
物陰や草むらに隠れながら移動するが、食糧となるものは何も見つからなかった。この里も食糧不足に悩んでいたのだ。
琥珀はさっと草むらに隠れた。人間の足音が聴こえたのだ。
人間は琥珀に気づかず、すぐ横を通り過ぎていってしまった。きっと見つかっていたら毛皮を剥がされ肉を食われていたに違いない。
安堵感で琥珀はほっと肩を撫で下ろした。こんなにも近くで人間を見たのは初めてのことだった。
山でも猟師は見たことはあったが、それは遠くからだ。近づいたら殺されてしまう。
琥珀は再び里の中を歩き始めた。そして、ついに目当ての食料を見つけた。
細い枝や木で作られた囲いの中に鶏が何匹もいる。うまそうな鶏を見て琥珀は思わず舌なめずりをした。
あの鶏を一匹でも盗めば空腹で死ぬこともなくなるだろう。しかし、どうやってあの鶏を盗み出したらいいものか？
囲いは鶏が逃げ出さぬように高くなっている。人間にしてみればそれほど高くない高さだが、狐の琥珀や鶏に取ってはとても高い物に感じられ、飛び越えて出入りするなど夢物語である。
琥珀は考え、穴を掘って下から潜り込めないかと考えた。しかし、それには時間がかかる。そこで琥珀は人間が寝静まる夜まで待つことにした。
この時代にはまだ電気などはないし、動物の脂を固めて作った蝋燭はあったが貴重品なので普段は絶対使わない。なので、人々は日が沈むとすぐに眠りにつく。
日が沈み、完全に人間が寝静まった頃を見計らって琥珀は穴を掘り始めた。
土が柔らかかったせいもあり、琥珀が通れるくらいの穴をすぐに掘ることができた。

その穴を通って鶏小屋に入った琥珀はうれしさのあまり楽園に来てしまったのでないかと思った。
目の前にはうまそうな鶏がいる。腹いっぱいに食っても食い尽くさないほどの数だ。
しかし、琥珀には誤算があった。
鶏たちが急に騒ぎ出したのだ。
琥珀を見た鶏たちは怯えて羽をばたつかせたり、大声で鳴いたりした。
慌てて琥珀は一羽の鶏を噛み殺すと急いで逃げた。
一匹しか盗み出せなかったが、それでも大収穫だ。それにあのままあそこにいたら、きっと人間に見つかっていた。そう思うと琥珀は身震いをしてしまった。
山に帰った琥珀は里で盗んで来た鶏を仲間に自慢し、自分で食べきれない分を仲間に振舞ってやった。
数日が過ぎ、琥珀はまた腹を空かせていた。
里にいってまた食料を盗んで来るか迷った。今度は失敗して人間に殺されるかもしれない。
迷っているうちに日が過ぎていき、空腹に耐えられなくなった琥珀は再び里に下りることにした。
今度は策の周りの地面に石が混ぜられていて掘ることができなかったが、少し離れたところから掘り進めて簡単に中に入った。
鶏がまた騒ぎ出すが、慌てず琥珀は一羽の鶏を噛み殺して持ち帰り逃げた。
それからというもの琥珀はたびたび里に下りては鶏や他の食料を盗み出した。
食料がなくなるという被害を受けた里の人々はあの手この手で策を講じたが、盗みに慣れてきた琥珀はなんなく罠などを掻い潜り盗みを働いた。
長い間このようなことが続くうちに里の者は恐怖心を抱くようになった。それは里の者は誰も盗みを働いている獣、つまり琥珀の姿

を見た者が誰もいなかったからだ。そのため人々はもしかしたら食料を盗んでいるのは獣ではなく妖怪の仕業ではないかと考えるようになっていった。

人々に妖怪と思われるようになった琥珀はそんなことなど知る由もなく盗みを続けていった。

里から食料が減ると琥珀は別の里で盗みを働くようになり、盗みの範囲は徐々に広がっていった。そのため食料を盗み家畜を食い荒らす妖怪の噂も広がることになった。

ある日のこと、琥珀はいつものように盗みをしようとしていた。

深夜になり琥珀は民家の中に入っていった。盗みを重ねるうちに琥珀の犯行は大胆になっていったのだ。

物色をしていた琥珀の耳がピンと立った。寝ていたはずの住民が目を覚ましたのだ。しかもそれは生まれて間もない赤子だった。

琥珀は焦った。きっとこの赤子は大きな声で泣くに違いない。そう思った。

泣かれて親に起きられるとまずいと思った琥珀は赤子の首に飛びかかった。

殺してしまえ。浅はかな考えではあるがそうすれば泣かれずに済むと思ったのだ。

首を噛み切り殺そうとしたが、すぐには死なず赤子は大きな声で泣いた。両親が飛び起きた。

琥珀はどうしていいかわからなかった。赤子はどうにか殺すことができたが、人間に初めて見つかってしまった。

血だらけになった自分の子供と、口の周りを真っ赤に染めた狐を見た人間は叫んだ。

琥珀は逃げた。一心不乱に逃げた。しかし、後ろからは赤子の両親と騒ぎを聞きつけた者たちが執拗に追いかけてくる。

暗闇の中を琥珀は山の中へ逃げ込んだ。途中で多くの者が琥珀を追いかけるのを止めた。暗闇の中を追うのは危険だと判断したためだろう。だが、赤子の両親はどこまでも追って来る。

山の中を琥珀が逃げている途中、後ろの方から人間の叫び声が聴こえてきた。赤子の父親が足を滑らせ崖から落ちて死んだのだ。
その後からは誰も琥珀を追って来なかった。
赤子を殺され夫まで失った女は里に帰ると、子供は狐に食われ、夫はその狐に殺されたと里中の者に訴えた。こうして琥珀は妖狐と呼ばれることになった。
琥珀の毛の色は他の狐と違い白銀だったためにその噂は瞬く間に広がり、誰もが琥珀のことを妖狐だと思い込んだ。
人間に追われるという恐怖を味わった琥珀は二度と里に下りないことを誓った。だが、人間たちは琥珀を捕まえようと考えていたのだ。
白銀の毛を持つ妖狐を捕まえようと里の者たちは立ち上がった。家畜を襲われ、人まで死んだ。このまま妖狐を野放しにして置くわけにもいかないと考えた。
あくる日から人間たちによる妖狐狩りが大々的に始まった。
山で静かに暮らしていた琥珀は、最近は山に入ってくる人間が増えたなぁ、と他人事のように考えていたが、それがまさか自分を狩りに来ているなんて夢にも思っていなかった。
山に多くの人間が訪れるようになり、山での生活が琥珀に取って困難なものになってきていた。
いつも人間から身を隠し、ビクビクしてなくてはいけない。
こんな生活にはもう嫌だと思った琥珀は遠く別の山に移ることにした。そんな矢先だった。
山で食料を探していた琥珀は獲物の野うさぎに気を取られて、人間が近づいてくるのに気が付かなかった。そして、人間に見つかってしまった。
琥珀を見つけた狩人は弓を構えて琥珀目掛けて矢を放った。見事に矢は琥珀の後ろ足に突き刺さった。
琥珀は痛みに耐えかね大声で吼えた。そして、矢を口に咥えて抜くと血を垂らしながら懸命に逃げた。

逃げても逃げても人間は追ってくる。しかも人間の数は徐々に増えていた。
琥珀はどうしても生き延びたかった。やさしかった母を殺した人間に殺されるなど絶対に嫌だ。そう思いながら琥珀は足を引きずりながら逃げた。
人間たちとの距離は徐々に開らけていき、これなら逃げ切れると思った矢先だった。琥珀は怪我をしていなかった前足に鋭い爪が突き刺さるような痛みを覚えた。
罠に掛かってしまった。まさかこんなところに罠が仕掛けてあったなんて思いもしなかった。
いつもなら罠に掛かるはずが無い。しかし、人間に追われ、足まで怪我をしていて焦っていたのだ。
後ろからは大勢の人間の足音が聞こえてくる。
逃げたいという気持ちで罠を外そうとするが、罠は外れず傷が広がり激痛に襲われるだけだった。
人間の姿が目の前に見えた。それでも琥珀は諦めずに罠を外そうとした。けれども外すことは最後まで叶わなかった。
人間に捕らえられた琥珀は生け捕りにされて里まで連れていかれた。
里に着いた琥珀は木でできた檻の中に入れられた。そして、檻に入れられてもなお琥珀は逃げようとした。
まず琥珀は地面を掘って逃げようとした。
地面にはなぜか枯れ草が敷き詰められていて、それを退かすと石が見えた。他の場所も調べたが全て石が敷き詰められていた。これでは逃げることができない。
人間たちは前もって琥珀を捕らえたときのために檻を作っておいたのだ。
その檻の下には穴を掘って逃げられないように石を敷き詰め、檻自体もとても頑丈な木で作られていた。
琥珀は諦めずに檻の壁に何度も何度も突進した。しかし、びくと

もしない。それで余計に身体を痛めてしまった。
今逃げ出すのは無理だが、いつか機会が廻って来るだろうと思い、琥珀はその時に備えて身体を休ませることにした。
しばらくすると檻の外に大勢の人間たちが集まってきた。里中の者が集まって来たに違いない。しかし、なぜ？
これから何かが始まろうとでも言うのか――？
突然檻の中に枯れ草が大量に投げ込まれた。枯れ草でも食えというのか？　それにしても量が多い。
人間たちが歓声をあげている。これは公開処刑だった。
檻の中に松明が大量に投げ込まれた。さっきの枯れ草はこのためだったのだ。
火は枯れ草に燃え移り勢いよく燃え出した。
琥珀は鳴き叫ぶがどうにもならない。火は広がり自分をも呑み込もうとしている。そんな琥珀を見る人間たちの顔は琥珀にとっては鬼のように見えた。
火はついに琥珀の身体に燃え移った。業火に身を焼かれ悶え苦しむが火は消えない。
なぜ自分はこんな目に遭わなくてはいけないのか、自分はただ生きようとしていただけだ。それなのに人間はなぜ自分をこんなにも苦しめるのか？
この時の琥珀には人間の気持ちなど全くわからず、ただ憎しみ怨むだけだった。
檻の中で狐の形をした炎が暴れまわっている。そして、その炎の塊は檻に激しくぶつかった。
炎によって脆くなっていた檻は簡単に壊れた。琥珀は檻から逃げ出せたのだ。しかし、依然琥珀の全身は炎に包まれ焼かれている。
檻から出た琥珀は生きようとした。逃げようとした。
炎に包まれた狐が暴れ回るのを見て人間たちは逃げ惑った。
熱さに悶える琥珀は人にぶつかり火を点けていった。火を点けられた人間も琥珀のように燃え上がり悶え苦しむ。

やがて、弓を構えた人間たちに琥珀は囲まれ、合図と共に幾本もの矢を身体に刺された。それでも逃げようとする琥珀であったが、ついに地面に倒れ身体が動かなくなってしまった。

人間たちが動かなくなった狐に近づいたその時だった。燃え上がる狐に触れもしないのに近づいた全員の身体が真っ赤に燃え上がったのだ。

全身を火に焼かれ地面に転がり苦しむ人間に囲まれて、炎を身に纏った『妖狐』琥珀が立ち上がった。

全ての怨念が琥珀を本当の妖怪へと変えたのだ。

この後、琥珀は里を焼き払い、大勢の人間を焼き殺した。どうにか命の助かった里のものは炎を纏う狐をこう呼んだ『琥珀』と――。

炎に包まれ、その奥に見える狐を琥珀に見立ててその名がついたのだ。

妖狐になった琥珀は多くの里を襲い、大勢の人間を焼き殺して復讐をしていった。そのことにより人間は琥珀に強い恐怖心を覚え、琥珀の力は人間に想われることにより、増していくことになった。

琥珀に敵う人間など現れなかった。幾人もの武士が琥珀の命狙ったが皆焼き殺してやった。

各地を廻るうちに力を蓄えていった琥珀はいろいろな妖術も覚え、人間に化ける術も会得した。このことにより琥珀は、人間に化けて人間たちをたぶらかすことも覚えた。

ある時、琥珀は都に美男の姿で訪れた。そこで多くの女性をたぶらかし、屋敷に火を点けるという毎日を送っていた。だが、少々長居をし過ぎたようだ。

ある日のこと、いつものように美男の姿を取った琥珀は、言葉巧みに女性の家に泊めてもらい、その日の晩に屋敷に火を点けようとしていた。

夜になり屋敷に火を点けようとした時、琥珀は大勢の人間に囲まれてしまった。全て罠だったのだ。

琥珀を捕まえようとしていた都は女性を使って琥珀を誘い出し、

召し取ってやろうと考えていたのだ。琥珀はその罠にまんまとはまってしまったのだ。
大勢の人間に囲まれた琥珀は慌てることもなく、銀色の美しい毛を持つ妖狐の姿に変身した。
鎧を着た武士が襲いかかってくるが、琥珀は全身に炎を纏い、その炎を武士目掛けて飛ばした。
鎧を着ていても炎に包まれては意味がない。
今の琥珀には恐れるものなど何もなかった。今の今までは――。
琥珀に一枚の紙切れが投げつけられた。そんな紙切れなど燃やしてしまえと火を投げつけたのだが紙切れは燃えず、紙はそのまま琥珀の後ろ足に貼り付いた。
この時、琥珀は悟った。都には陰陽寮という役所があり、そこに勤める陰陽師とやらは大変術に長けており、妖怪を倒す専門家なのだという。もしや、その陰陽師か！？
案の定、紙切れを貼られた琥珀の後ろ足は、金縛りに遭ったように動かなくなってしまっていた。
武士とは違う着物姿の男が前に出た。琥珀はその男から只ならぬ物を感じ後退った。この男が陰陽師だ。
陰陽師は指で印を組むと何やら呪文を唱え始めた。するとどうだろう、子鬼がどこからともなく現れた。これは式神というやつだ。
琥珀は自らの力で強引に足に貼られたお札を取るが、陰陽師は式神を操り琥珀に攻撃を仕掛けてきた。
二匹の子鬼は琥珀の放つ炎を掻い潜りながら襲いかかってくる。
琥珀は自らの鋭い爪で子鬼の胸を切り裂いてやった。それでも子鬼は襲いかかって来るので火で全身を焼き、首に噛みついてやった。
その間、琥珀も子鬼たちや武士たちに攻撃を受けて傷ついた。身体は刀で切られ、子鬼たちには殴られた。
ボロボロになりながらも琥珀は屋敷中に炎を放ってやった。燃え上がる屋敷から武士たちが退却していく、しかし、子鬼たちは遠く離れて非難している陰陽師に操られて執拗に攻撃を仕掛けてくる。

重症を負った琥珀は自分の存在が消滅してしまうことを恐れて逃げ出した。
山を越え野を越え、三日三晩寝ずに逃げ続けた。しかし、その間も子鬼たちの攻撃は続き、傷ついていく琥珀は己の存在がこの世界から消えるのを覚悟した。だが、琥珀は四日目の朝についに子鬼たちから逃げることができたのだ。
どうにか逃げきることはできたが、もう力は残っていない。知らない土地で自分は消えるのだと思い地面で倒れていると、そこに一人の美しい女性が現れた。この女性が椛だったのだ。
椛はこの辺りの土地を守る土地神であるが、彼女もまた狐の化身であった。
琥珀が同属であることを感じ取った椛は、琥珀のことを何も知らぬまま自らの神社に連れ帰った。
この頃の小春神社はこの地域で最も有名で大きな敷地を持っていた。
連れ帰った琥珀は重症で、生死を彷徨うそんな彼を椛は寝ずに十日もの間看病を続け、自らの力を琥珀の身体に注ぎ込んだ。
やがて傷が癒えた琥珀は力を回復した。しかし、以前の琥珀とは一つ違う点があった。それは身体の中に椛のエネルギーを貰い受けることにより、神格としての善の心が注ぎ込まれたということだ。
命を救われたことに琥珀は感謝し、今までの行いを少しずつだが悔いるようになっていた。
琥珀は椛と共に暮らすことになり、椛が人間たちを救うのを見るうちに、全ての人間が残虐非道な者たちでないことを知った。
人々は椛を頼りとして、敬い感謝する。琥珀は自分もそういう存在になりたいと思った。そして、琥珀は椛と共に神となり人間に罪滅ぼしをすることにしたのだった。
月日は流れ数百年の時経ち、椛を信仰するものは次第に減り、それによって神社の規模は縮小されていった。
人々に必要とされなくなった椛の力は年々衰えて、ついには幼児

化してしまった。そして、琥珀もまた存在の危機にあった。
ある日の晩、若者のグループが神社にやって来た。
若者たちは持ってきた石油を楓の御神木にかけて火を放った。なぜ、そんなことをしたか、それは実にくだらない理由だった。
酒に酔った若者たちの度胸試しと、それに加えてグループの中の一人が、だいぶ前に小春神社で受験祈願をしたのに合格できなかったことへの腹いせ、――それでだけの理由だった。いや、理由などなかったのかもしれなし、どうでもよかったのかもしれない。ただ何となく魔が差しただけだったのかもしれない。
長い年月ここに立っていた楓の御神木は短い時間で燃え上がった。
異変に気づいた椛と琥珀は紅葉したように燃え上がる楓の木に駆け寄った。逃げる若者たちの後ろ姿は見られたが、すぐに闇の中へと消えていってしまった。
椛は燃え上がる楓をただ呆然と見ることしかできなかった。その傍らでは琥珀は怒りに打ち震えていた。
「許さぬぞ……人間どもが……」
この時、琥珀の中の何かが呼び覚まされた。まさに炎が琥珀の心に火を点けたのだ。
「炎で焼かれる苦しみを味わせてくれる……」
琥珀は炎で焼かれる苦しみを誰よりも知り、炎の恐ろしさを誰よりも知っていた。
椛によって注がれた清い力に押されていた琥珀が本来持つ憎しみの力が爆発した。
「この楓に火をつけた奴らを探し出し、炎で炙ってやろうではないか！」
琥珀の姿が白銀の狐へと変化し、紅蓮の炎を身に纏い深夜の町に出て行こうとしたのだが、それを椛が止めた。
「いけません琥珀。人間に復讐するなどいけません」
「うるさい！」
我を失っている琥珀の身体から大きな炎が辺りに飛び散った。そ

の炎の塊は椛の身体を掠り火傷をさせた。
装束の腕の部分が焼け焦げ、椛の腕までも痛々しく焼け焦げていた。それを見た琥珀は何も言わず外へと飛び出して行ってしまった。
「琥珀！」
椛は叫ぶが、それが琥珀に届くことはなかった――。

第7話―ぶつかる想い

別れた二人は再び出逢い、運命のこの場所で対峙することとなった。

「貴方を力ずくでも止める覚悟はできています」

静かな声であったが、その声には強い決意が感じられた。

「僕も力ずくでも君を連れていく。あの計画には僕らの未来がかかっているからね」

琥珀の手が獣の手と変化した。まずは風の刃で小手調べだ。

シュッという風の音を立てながら琥珀の手が振り下ろされると、風の刃が発生して椛に襲いかかった。けれども一つではなかった。琥珀は連続して風の刃を放ったのだ。

いくつもの風の刃は地面を切り裂きながら椛に向かっていく。その刃の破壊力は、輝の家で放たれたものを遥かに凌駕していた。

椛も負けずと円舞を踊るように風の刃を作り出し、琥珀が放った全ての風の刃を相殺した。

次に琥珀は韋駄天のような身のこなしで、椛を中心にして円を描くようにぐるぐると回った。ずっと見ていると目を回してしまいそうなくらい琥珀は回っている。

椛の周りを回る琥珀が残像によって何人も見える。これは残像のせいだけではなく、琥珀の妖術だった。

何人もの琥珀は椛の周りを高速で周りながら別々の動きを見せた。まるでそれは本当に何人もの琥珀がいるようだった。

一人目の琥珀が鋭い爪を振りかざしながら襲いかかってきた。

椛は自らの力を具現化して弓矢を作り構えると、襲いかかって来た琥珀に矢を撃ち放った。

矢で心臓を射抜かれた琥珀は瞬時に透明な物体になり、シャボン玉のように弾け飛んだ。四方に弾け飛んだ物体は床に落ちると煙を立てながら消滅した。

椛が後ろを向くとすでに二人目の琥珀が襲いかかって来ている。
後ろだけではない――左右からも琥珀の魔の手が襲いかかる。
弓矢を構える椛は狙いを定め次々と琥珀を射抜いていく。その間に二人の琥珀が風の刃を放った。
自分に襲いかかって来る琥珀を射抜くことに気を取られ、椛は風の刃に気づくのに遅れてしまった。
鋭い爪を振りかざしながら襲いかかってくる三人の琥珀を射抜いたものの、一撃目の風の刃を避けたところで二撃目の刃を腕に受けてしまった。装束の左腕部は鋭い刃物で切り裂かれたようになり、その奥の白い肌には一筋の赤い線が走り血が流れ出していた。
琥珀は一人だけになっていた。
「もう止めよう。僕らは戦うべきではない」
「私も貴方とは争いたくありません。けれど、私は人間の味方です。貴方が人間の敵である限りは争わなくてはいけません」
「どうしてだ！？　なぜ、そんなに人間の肩を持つんだ？　君も僕と同じ狐の化身だろ、同じ仲間じゃないか……それなのにどうして……」
「今は人間の姿が私の真の姿です」
「そうか……『人間』は僕の敵でしかない」
琥珀は椛を敵とした。しかし、その声には哀しさが含まれていた。
紅蓮の炎に包まれた琥珀は白銀の狐へと変化し、妖狐琥珀となった。彼は本気だった。先ほどまでは力を抑え戦っていたが、今は違う。
椛はためらうことなく燃え盛る琥珀に矢を放った。しかし、矢は琥珀の放った炎によって消滅させられてしまった。
咆哮を上げた琥珀は地面を蹴り上げ天高く舞い上がった。そして、上空から地面に炎の塊が降り注ぐ。
飛来してくる炎の塊を避けながら椛は矢を天に向けて放った。矢はことごとく炎によって消滅させられ、上空から落ちながら琥珀が襲いかかってきた。

琥珀が椛に飛び掛る寸前、椛は目を閉じた。恐怖からではなかった。椛が目を閉じた瞬間、地面の石畳を押し上げて木の根らしきものが飛び出して来て、琥珀に絡みつき動きを封じた。
土地神である椛は自然の力を自由に借りることができるのだ。そして、この小春神社内は椛の力が最も強くなる聖域だった。先ほど受けた傷もすでに完治している。
後ろに飛び退いて間合いを取った椛の顔色が険しくなった。琥珀は身を包む炎の勢いを強くして、身体に巻きついた木の根を焼き払ったのだ。
「木の力などでは僕の動きは封じられない。この炎を身に纏っている限りは、椛、君には負けない」
「私もこの聖域では貴方に負けないわ」
椛は幾本の矢を同時に放なった。その矢は全て琥珀を外れ、とんでもない方向に飛んでいった。
「どうしたんだ？　矢を放つ力もないのか――いや、違う！？」
琥珀は大誤算をしてしまった。外れたとばかり思っていた矢は狙い通りに放たれていたのだ。
「もう貴方は逃げられません」
椛の宣言どおり、琥珀はある一定の範囲から外に出られなくなってしまった。
琥珀の周りには円を描くように矢が地面に突き刺さっている。椛は矢を使って結界を作ったのだ。
琥珀は結界から出ようと見えない壁に勢いよく突進するが、バネで弾き返されたように吹っ飛ばされしまう。
「私は戦の神々の眷族ではありません。私の力を攻守で例えるなら、防御的・受動的な力。私の役目はこの地に住む人間を含める全てのものを守ることです。結界を作り出すことが私の最も得意とするもの」
琥珀はいつの日だったか、普通の狐だった頃に檻に閉じ込められ、生きながらして炎で全身を焼かれたこと思い出し、激しい咆哮を上

げた。
炎で全身を焼かれたあの時の想いが蘇り、琥珀の身を包む炎はより一層激しく燃え上がった。
椛はそれを受けて結界の力を強めた。
円形ドーム状の結界の中を炎が満たし、今にも渦巻く炎によって結界は壊されそうだった。
椛は結界を破られまいと全神経を集中させ力を結界に注ぐ。その顔からは汗がにじみ、地面にぽたぽたと雫を落としていた。
互いに一歩も引かない苦しい状況となった。戦いは持久戦にもつれ込み、少しでも気を抜いた方が負ける。この戦い、大地からエネルギーを借りることのできる椛の方が有利か？
結界の中の炎が弱まりを見せ、勝負あったかと思ったその時、椛は背中を刺されたような痛みを覚え地面に倒れ伏してしまった。その瞬間、琥珀を覆っていた結界は弾け飛び壊れ、神社全体を覆っていた結界までもが大きな音と共に弾け飛び消滅してしまった。
椛は地面に手をつきながら後ろを振り返ると、そこにいたのは！？

神社の前までは来たが中に入ることができない。悠樹と未空は神社の鳥居の前で立ち往生していた。
悠樹は何もないはずの場所に手を触れて見ると、そこには目の前に見えない壁があるようだった。
「何なんだこれは？」
「きっと結界ね」
「結界？」
「中にきっと二人の人物がいる。激しいエネルギーのぶつかり合いを感じるもの」
悠樹は見えない壁を手探りで触りながらいろいろな場所を調べてみるが、どこにも入口はない。
「どうやって中に入ったらいいんだ」
「葵城クン伏せて！」

「えっ？」
悠樹が地面に伏せる未空を見た時には、彼の身体は見えない何かによって五メートル程吹き飛ばされていた。悠樹が吹き飛ばされた時、彼は何かが弾け飛ぶような大きな音を聞いて、身体に無数の小さな塊がぶつかったのを感じた。
「何だいったい？」
膝を曲げアスファルトの地面に片手をつきながらどうにか受身を取った悠樹は、何が起きたのか全くわからなかった。
未空が神社の中へ走り出した。
「結界が壊されたわ、きっと中で何かが起こったんだわ」
「待って、星川さん！」
悠樹もすぐに未空を追いかけて神社の中へ入っていった。
境内へと走って来た悠樹は驚きのあまり足が動かなくなり立ち止まってしまった。
「なんだあれは？」
悠樹の視線の先には炎を身に纏った狐が地面に倒れていた。あんなものがこの世にいるわけがない、と思った悠樹だったが、それだけではなかった。
背中に矢を刺されてうずくまる巫女装束を着た女性と、その女性が向いている方向にはなんと！？
「尊！」
悠樹は思わず叫んでしまった。矢を構えているのは黒装束に身を包んだ女性。それは紛れもなく月夜霊尊だった。
悠樹は何がなんだかわからなくなった。いったいここで何が起きているというのか、なぜ尊がここにいるのか、矢を刺された女性はいったい何者なのか、この狐はいったい何なのか？
呆然と立ち尽くしている悠樹に対して未空は至って冷静だった。
「あの狐の妖怪が琥珀の真の姿、そして、あそこで倒れている女性が椛ちゃんよ」
「あれが椛……いや、どうして、どうして彼女は矢で……尊、なぜ

君が椛を……」
尊は悠樹に名前を呼ばれ、構えていた弓をゆっくりと地面に下ろすと悠樹を見てこう言った。
「私は人間たちの敵だ。そして、君とも……」
もう悠樹は何も言葉を発することができなかった。悪い夢ならば覚めてくれと願うのみだ。
椛は背中に刺さった矢を苦痛に顔を歪ませながら自ら引き抜き、弓を掴んでゆっくりと立ち上がった。
「やはり、あなたも人間ではなかったのですね」
これは尊に向けられた言葉だった。尊も人間ではなかったのだ。
椛は言葉を続けた。
「あなたに初めてお会いした時は私の力は衰えており、あなたも自らの力を隠しておられた。あの時は漠然としかわかりませんでしたが、今ならはっきりわかります。あなたも私と同じ――神々の一人であらせられますね。それも、私よりも神格の高い神でしょう。しかし、あなたのような神格の高い神がなぜ……？」
「私は夜の眷族の神。昼がある限り、夜もまたある。夜がある限り私はこの世界から消えることはないだろう。しかし、人間は夜を拒み、光を灯し眠ることのない街を作り出した。私の存在は消えなくとも、力だけは急激に落ちていった。消えることもできず、ただ老いていく自分が嫌だったのだ。だから私は昔のように人間に夜を恐れさせたかった、昔のように人間が幻想の世界に生きる我々に畏怖を抱かせたかった」
未空がゆっくり尊に歩み寄ろうとすると、尊はすぐに弓を構えて矢を放った。矢は未空の耳のすぐ横をビュンという音を立てながら通り過ぎた。
「どうして外したの？」
「人間は私たちが生きるために必要だ。無駄に殺しはしない」
未空は再びゆっくりと歩き出した。それに向かって尊は再び弓矢を構えた。

「次は射抜くぞ」
尊の忠告を無視して歩く。矢は放たれ未空の肩を射抜いた。紅い血が傷口から滲み出でくる。
「尊はあたしの大切な友達。それは今も昔もかわらないわ」
再び歩き出す未空に対して尊も再び矢を放った。今度は右足のふとももを射抜かれた。「私にとって未空は友達でもなんでもない。ただ利用しただけだ。未空の持つ霊力は非常に高い、その未空が私のことを強く想えば私の存在を強く維持することができる。それだけのために友達のフリをしただけに過ぎない！」
尊は弓を構えて、今度は未空の心臓を狙った。ビュン！　矢が放たれた。しかし、矢に刺されたのは尊だった。
「お返しです」
そう言うと椛は連続して矢は放った。その放った矢は全て尊の身体に突き刺さり、尊は地面倒れた。それに続いて未空も地面に倒れそうになり、悠樹が急いで抱きかかえた。
「大丈夫ですか星川さん！」
「少し貧血になっただけだから……」
「少しどころじゃありませんよ！」
未空の受けた傷は重症だった。このままでは命の危険にも差し障る。
よろめきながら椛も未空の元へ駆けつけてきた。
「私の力でどうにか出血は止められるでしょう。ですが、その前に矢を抜かなくてはなりません」
すでに悠樹は未空が倒れそうになった時に冷静さを取り戻していた。
「星川さん、矢を抜く時に激痛が伴いますが我慢してください。椛さん、星川さんが舌を噛まないように厚手の布か何かが欲しいんですが、持ってますか？」
椛は白い布を自分のエネルギーを消費して具現すると悠樹に手渡した。

「星川さん、これをしっかり噛んでいてくださいね」
未空は悠樹に言われたとおり布を口に挟み噛み締めた。
矢は二本とも身体を貫通しており、抜くためにはまず矢先を折らなくてはいけない。
悠樹はまず肩に刺さった矢先を折ることにした。矢に手をかけ、
「折りますよ」
「うう……うっ……」
矢を折った瞬間、未空はビクッと震え身体を反らせた。悠樹は間入れず折った矢を引き抜いた。
「うぐっ……」
再び未空の身体が震えた。激しい痛みが未空の身体を襲っているのだ。見てる悠樹たちも苦痛に顔を歪ませてしまう。
口に加えていた布を落として未空はぐったりしてしまった。
椛は矢が抜けて血の吹き出してきた傷に手をかざし、すぐに治療し始めた。傷はすぐに塞がったが、矢はもう一本残っている。
未空は自ら落とした布を掴み、
「早く、次の矢を……」
と言って再び布を咥えて噛み締めた。
悠樹は言われたように矢に手をかけて力いっぱいへし折った。
「ううっ……」
身体を震わせながら未空は折られた矢に手をかけ、自ら矢を引き抜いた。
「……う……くっ」
抜いた矢を遠くに放り投げた未空は、ゆっくり息をして呼吸を整え始めた。
椛が再び治療に取りかかり傷は塞がり、腕の傷も包帯を外して傷跡まで全く残らないまでに治療した。しかし、未空の衣服に染み込んだ血の量を見ればわかるが、生命の危機にあることは先ほどと変わりない。
自分のエネルギーを送りつつける椛。彼女の疲労も大きなものだ。

「大丈夫です。私が力を送っていれば、徐々にですが回復しますから」
心配そうな顔をして未空を見守っていた悠樹が何かに気づき顔を上げると、そこに立っていたのはなんと、人間の姿に戻っている琥珀と矢を身体に刺したままの痛々しい姿の尊だった。
椛が後ろを振り向いた途端、琥珀は炎を手に溜めた。
「動くな、動くとそこの人間どもを火あぶりにするぞ」
「迂闊でしたね。未空さんに気を取られて、あなた方のことに気づかなかったなんて……」
自分を悔いて椛は唇を噛み締めた。
現状は最悪だった。椛は少しくらいの炎では死ぬことはないが、人間では駄目だ。
尊は指で印を組んだ。
「仲間になる気がないのならば、術を架けて仲間に引き入れるしかないな」
何語ともつかぬような呪文を唱え、椛にそれを架けようとしたその時だった。尊は思わぬ妨害を受けた。靴が飛んで来たのだ。
「よっしゃー、ヒット！」
遠くには綾乃と靴を履いていない輝がガッツポーズをして立っていた。
「輝、あの人月夜霊さんみたいだけど、靴当てちゃってよかったのかな」
「何か、悠樹たちに危害加えそうな雰囲気だったからいんじゃないの？」
二人は現状が掴めていなかったが、輝は何となく靴を飛ばしたのだ。
椛は急に酷い頭痛に襲われた。尊の術を受けていたのだ。
頭を押さえながら椛は狂気の形相で地面に膝をついた。そして、信じられない現象が起った。
椛がまばゆい光に包まれたかと思うと、次の瞬間には幼児化して

二人に分裂したのだ。それも二人の見た目は瓜二つだ。
この場所にいた全員が驚きを隠せなかった。
力を消費した尊は地面に膝をつき眉をひそめた。
「やはり先ほどの邪魔で術が失敗していたか……」
輝たちも何がなんだかわからないまま駆け寄ってきた。
「何だよ、椛ちゃんが二人？」
琥珀が目にも止まらぬ速さで動いた。そして、尊と二人の椛を抱きかかえると逃走しようとした。しかし、一人の椛が激しい抵抗をして逃げ出した。
琥珀は逃げた椛を捕まえようとしたが、二人を抱きかかえているだけで、それはできなかった。
「仕方ない、今日のところは両者ともに深手を負ったので帰るが、すぐにもう一人の椛を連れ戻しに来るからな！」
そう言って琥珀は人間業では到底なしえないジャンプ力で天高く飛び上がり、そのまま住宅の屋根などを飛び越えながら消えていった。
輝が突然叫んだ。
「わけわかんねぇーよ！　何か映画で一番重要なシーン見逃した感じだよな。よし、俺んちで会議だな」
「待て輝」
悠樹が声をかけた。
「その前に星川さんを病院に連れて行きたいのだが？」
先ほどから未空は悠樹に抱きかかえらたままだった。そんな未空を見て輝は今更気づいた。
「まさか、その紅いのって血なのか！？」
「ホントに！？」
綾乃もびっくりした。二人とも琥珀と尊に気を取られて気づかなかったのか、それとも二人があまりにも鈍感なのかだ。
未空はゆっくりと目を開け、悠樹の肩を借りながら立ち上がった。
「大丈夫だから心配しないで……。傷は椛ちゃんに治してもらった

から……ただ、ちょっと貧血」
「な～んだ、だいじょぶなのか」
呑気な口調な輝にすぐさま綾乃のパンチが入る。
「だいじょぶなわけないでしょ！　傷が治ってもこれだけ血を流したらヤバイに決まってるでしょ！」
「大丈夫よ涼宮さん、本当に心配はいらないから、早く真堂クンの家に行きましょう。だって……」
「「だって？」」
全員が口を揃えて聞いた。
「だって、血みどろじゃ気持ち悪いでしょ。早くシャワー浴びて着替えたい」
「……」
最も理由だったが全員沈黙してしまった。ほんの少しだけかもしれないが、未空の感覚はズレているような気がする。
「……ウソ」
未空がぼそりと呟き言葉を続けた。
「この事件のことを表沙汰にはしたくないから、人に見つからないうちに早く逃げましょう」
なぜか全員未空にからかわれたような気がしたが、そのことについては誰も触れなかった。
確かに未空の言う通り、この事件のことを表沙汰のはよくないだろう。それに境内には多量の血痕が残ってしまった。今は証拠隠滅をするよりも、さっさと逃げてしまった方がよさそうだ。
悠樹は着ていた上着を脱いで未空に今着てる服の上から着せると、一同はなるべく人に見つからないように輝の家まで急いだ。

第8話―休息

家に着いた輝たちがまず最初にしたことは、深く息をつきながらダイニングのソファーにもたれかかることだった。全員心身ともに疲れ切っていたのだ。

まだ疲れが取れないようすで座っている人たちを後目に、未空は立ち上がりつかつかとどこかに歩き出した。

「どこ行くんですか？」

悠樹が聞くと未空は一瞬だけ振り向き答えた。

「お風呂」

「あの、案内します」

悠樹は慌てて立ち上がり未空の後を追った。

脱衣所まで案内した悠樹は未空に、

「服を脱いだら、ここにある洗濯機に放り込んでおいて下さい。後で僕が洗って乾かしておきますから」

「下着も？」

「えっ？」

迂闊だったと悠樹は思った。いつもは男所帯だったので輝と自分の洗濯物は下着も全部まとめて洗ってしまい、悠樹が干してたたんでタンスにまで入れていたのだが、女性の下着までは悠樹は洗えなかった。

「パンツは大丈夫だけど、ブラジャーが血みどろなんだけど？」

「あ、あの自分で洗ってもらえますか、洗濯機の使い方教えますから」

「うん……たぶん使えるから大丈夫」

悠樹は早くここから出ていこうとした。どうも未空と二人っきりだと少しペースを乱される感じだ。

「洗剤はここにありますし、バスタオルはそこに積んであるのを使ってください、それと血は漂白剤入れないと落ちないと思いますん

で、ええと、ここに出して置きます」
悠樹は戸棚から漂白剤を出すと、そそくさと出ていこうとした。
「待って」
少しドキッとした。
「何ですか？」
「着替えを涼宮さんに借りて来てくれる？」
「わかりました」
今度こそ悠樹は出ていこうとした。
「待って」
「何か？」
「この家に来た尊も尊。神社であった尊も尊だから……」
この言葉を受けて悠樹は何かを言おうとしたのだが、未空は行き成り服を脱ぎ始めたので急いで外に出てドアを閉めた。
「尊か……」
悠樹がダイニングに戻るとそこは戦場と化していた。疲れてぐったりしていたはずの輝と椛がクッションを投げ合って遊んでいたのだ。
「おまえら疲れてたんじゃないの、ぐはっ！」
椛の投げたクッションがコースを外れて悠樹の顔面に直撃した。それを見た椛と輝は思わず固まった。
無表情のまま悠樹は床に落ちたクッションを拾い上げ、振りかぶって投げた！
クッションは見事命中、輝の顔面を吹っ飛ばした。
「わ～い、悠樹すっご～い！」
ソファーの上で椛は飛び跳ねはしゃぎ出した。
「何でオレに投げるんだよ！」
輝はクッションを構えて悠樹に投げつけようとした。だが、しかし――、
「おまえ夕飯抜きな」
悠樹の冷たい一言によって中止された。

スカートなのに大また開きでぐったりソファーの上で目をつぶっている綾乃に悠樹が声をかけた。
「綾乃、生きてるか？　おまえ特に何もしてないのになんで疲れてるんだよ」
ものすっごい気だるそうな感じで綾乃が目を開けた。
「精神的に疲れたの」
「おまえそんなに繊細にできてないだろ」
「アタシは繊細ですぅ～だ」
「あのさ、星川さんに服貸してあげて欲しいんだけど」
「うん、いいよ別に。じゃ取って来るね」
だらしない格好で座っていた綾乃は、勢いよくバッと立ち上がって駆け足で洋服を自宅に取りに行った。
綾乃は靴を履くのがめんどうだったので靴下のまま玄関の外に出た。家はすぐ隣だが、普通は靴くらい履くものだ。
自分のウチに戻ってきた綾乃は、
「ただいまー！」
と元気な声で挨拶して母親を探した。
綾乃の家も輝の家と部屋の作りは全く同じで、玄関を抜けた先にダイニングがある。
「ママただいまー」
「お帰りなさい綾乃」
ニッコリと微笑んだ綾乃の母親は実に若々しい感じだった。今年で三十二歳、つまり綾乃は十五歳の時に生んだ子供ということになる。綾乃の母は若く見えるのではなく、実際に若いのだ。
「今日の夕飯いらないからね」
「また、輝くんの家でご馳走になってくるの？」
「そういうこと」
綾乃は急いだようすで自分の部屋にいってしまった。
「綾乃ちょっと……もう、あの子ったら」
綾乃の母が呼び止めようとした時には、すでにダイニングのドア

がバタンと閉まった後だった。
自分の部屋に来た綾乃はタンスを開けて適当に服をチョイスした。未空とは服のセンスが全く異なるみたいなので、どれでもいいやと言った感じである。
「下着までは別にいらないよね」
服を選び終わった綾乃は駆け足で輝の家に戻った。彼女は特に何もしていないので体力が有り余っているのだ。
輝の家に着いた綾乃はそのまま脱衣所のドアを開けて中に入った。
「星川さん、適当なところに服置いておくからね」
「ありがとう涼宮さん。ところで悠樹クンのことどう思っているの？」
「ど、どうって！？」
思わぬことに綾乃は取り乱した。突然の直球勝負をされてしまったのだから……。
「大丈夫、言わなくていいわ、わかってるから。でもね、今の彼の心の中は大変なことになっているから、いろいろあり過ぎたし、尊のことがショックだったみたいだから。涼宮さんも頑張ってね」
「ふ、服置いたから出てくね」
綾乃は急いで外に出ると力いっぱいドアを閉めてそのドアに背中から寄りかかった。
「いきなり何で？　どうしてわかったのよ！？」
綾乃は未空に心の中を覗かれてしまったようで何がなんだかわからなくなった。もしかして本当に自分の心を……。綾乃は真っ赤になってしまった顔をパタパタ仰いでからダイニングに戻った。
綾乃がダイニングに戻るとそこは再び戦場と化していた。しかも、一人増えている。
「あんたたち、そんなこと……うっ！」
椛の投げたクッションがコースを外れて綾乃の顔面に直撃した。それを見た椛と輝と悠樹は思わず固まった。
無表情のまま綾乃は床に落ちたクッションを拾い上げ、振りかぶ

って投げた！
クッションは見事命中、悠樹の顔面を吹っ飛ばした。
「わ～い、綾乃すっご～い！」
先程と全く同じようにソファーの上で椛は飛び跳ねはしゃぎ出した。
「何で俺に投げるんだよ！」
「……何となく。じゃなくって、なんで悠樹まで一緒にはしゃいでるのよ！」
実際の理由は未空に変なことを言われたせいだ。だから、どうしても悠樹に投げつけたくなったのだ。
「椛に一緒に遊ぼうって言われたから……」
「だからって、部屋の中で暴れるなんて非常識でしょ！」
綾乃は妙にカリカリしていて、悠樹にキツく当たった。それもこれも未空に変なことを言われたために当り散らしているのだ。
「椛ちゃんも女の子なんだから、クッションなんか投げて遊んじゃダメでしょ！」
「綾乃お姉ちゃん恐～い」
輝と悠樹は綾乃に何かあったのかと二人で首を傾げたが、触らぬ神に祟りなしということわざもあるので何も聞かなかった。
遠くの方から微かな声が聞こえた。
「……洗濯機の使い方がわからないんだけど」
未空の声だった。『たぶん使える』の『たぶん』に引っかかってしまったのだろう。
悠樹は自分でいこうとしたが、
「俺は今から夕食の準備するから、輝いってくれないか？」
「オレが？」
「ボタン押すだけの全自動だからおまえだって使えるだろ」
「しょーがねぇなあ」
輝はしぶしぶ脱衣所に向かったが、これでもし輝が洗濯機を使えたら、未空は輝未満ということになる。

だるそうな感じで脱衣所に入っていった輝は思わず目を剥いて口を開けてしまった。
「ああっ！？」
輝の視線の先には素っ裸の未空が洗濯機の前で悪戦苦闘していた。
「輝クン寒いから閉めてくれる？」
「は、はい！」
バタン！　とドアを閉めた後に輝は重大なミスをしたことに気がついた。何でドアを閉めた時に外に出なかったのか……。
ドアにノブに手をかけたまま固まってしまっている輝の後ろでは、素っ裸の未空が洗濯機と格闘中だ。そう思うと輝はものすごい汗が出てきた。
「あ、あの、なんで裸なの？」
「えっ？　何か変？」
「変って、変でしょ？　普通は服着るし、オレに裸見られたら『きゃ～！』とか言うのが女の子の反応でしょ」
「ふ～ん、そうなんだ。あたしは別に恥ずかしくないから」
「そういう問題じゃなくって」
本当にそういう問題ではない。しかし、未空は別に裸を人に見られても恥ずかしいとも思わないみたいだ。少し感覚がズレているかもしれない。
「輝クンはあたしの裸を見ると恥ずかしいの？」
「そ、そうじゃなくて」
「……えっち」
このひとことで輝は会心の一撃を受けたような気がした。
「とにかく、早く服着て！」
「ふう……」
なんだよ今のため息は、と思いながらも輝はちょっと待った。
「いいよ、こっち向いても」
着替えは終わっていたのだが、そこに立っている未空は全然違うキャラだった。綾乃の服を着ているために別のキャラになってしま

っているのだ。
白系のちょーミニのスカートとオレンジ系の派手なTシャツの組み合わせ。こんな未空は他では絶対見れない。と思いながら輝はまじまじと見てしまっていて、あることに気づいてしまった。
「……デカイ、じゃなくってノーブラッスか！？」
「うん、だって洗濯機の中入れちゃったから」
輝は急いで洗濯機の中を覗き込むが、ご丁寧にもブラジャーとパンツが上の方にあり、洗剤がすでにぶっかけられていた。
「……もしかして、ノーパンですか？　っていうかそうですよね！？」
「うん、ついうっかり入れちゃった」
このミニスカでノーパンはマズイだろと輝は本気で思った。てゆーかこいつ電波じゃなくて天然だろ、とも輝は思った。
「ちょっと、待ってて、いや、その前に……」
輝は洗濯機のボタンを押してから、ダイニングに走っていった。この時点で未空は輝未満に家事ができないことになった。
ダイニングに着いた輝は、椛と一緒にテレビを見ている綾乃の腕を引っ張って廊下まで引きずり出した。
「何すんのよ！」
「あのさ、星川さんに下着貸してあげてくれ」
「下着も血で汚れちゃってたの？」
「とにかく、今ノーブラ・ノーパンで危険な状態にあるから」
「あのミニでノーパンはヤバイよねぇ～。すぐに取ってくるから待ってて」
そう言ってまた靴下のまま綾乃は家に戻り、手さげ袋に下着を入れて帰ってきた。
綾乃はまたそのまま脱衣所の中に入っていった。
「お待たせ、この中に下着入ってるから」
「ありがとう」
紙袋を受け取った未空は綾乃がいる前でさっとパンツ穿いて、T

シャツを脱いだ。
「……デカイ」
思わず綾乃はそう呟いてしまった。
ブラジャーを付け終わると再びTシャツに着替えて、これで完璧だというところで未空がボソッと呟いた。
「……胸が苦しい」
このひとことで綾乃は会心の一撃を受けたような気がした。綾乃は自分の胸に自信を持って今まで生きてきたが、この一言は効いた。
ダイニングに二人が戻ると輝が椛と仲良くテレビを見ていたので、とりあえず二人もソファーに腰掛けてテレビを見始めた。
しばらくすると、トレイにチャーハンを乗せた悠樹が現れた。
「一様全員分作ったけど、綾乃と星川さんは？」
「あったり前でしょ、食べてわよ」
「ご馳走になるわ」
輝を引き連れて一度キッチンに戻った悠樹は、二人でさっき持ってこられなかった分のチャーハンとコップと飲み物を持ってきた。
ダイニングにあるテーブルは小さいので全員分のお皿やコップは乗り切らない。そのため自然とコップだけを置いて、チャーハンのお皿はずっと持ちながら食べる形になる。この家での朝食もそんな感じでいつもダイニングで食べていた。
全員がそろったところでやっと重要な話が始まった。
食事をしながら、まずは椛が自分のことや琥珀のことなど、知りえる情報を全てみんなに話した。その話口調は子供のしゃべり方だったが、大人の姿をした椛の記憶も取り戻しているので説明や言っていることはわかりやすかった。
その話を聞き終えたところで輝が質問をした。
「じゃあ、どうして二人になっちゃたかはわからないの？」
「うん、それは椛にもわからないの。でも、あの子はもしかしたら……」
未空ももう一人の椛についてある推測があった。

「あのもう一人も椛ちゃんにあたしは会ったことがあるわ、きっと」
輝は首を傾げた。会ったことがあるのは椛なんだから当たり前じゃないかと思った。けれど、未空の言いたかったことはそうではなかった。
「あの椛ちゃんに会ったのは小春神社の境内。椛ちゃん、あの子はそうなんでしょ？」
「椛もそう思うの」
二人の間だけでは会話が成立しているが、他のものは誰一人としてついていけていなかった。
「だからぁ～、どういうことなのよ？」
綾乃に話を急かされ椛が答えた。
「あれはきっと楓なの」
答えを聞いても何のことを言っているのかさっぱりわからなかった。そこで未空が補足を加えた。
「さっき椛ちゃんが琥珀と戦う前に楓の御神木から力を貰ったって言ったでしょ？　きっと、あの時分かれたもう一人の椛ちゃんは、その楓の御神木が椛ちゃんのエネルギー元にして人間の姿になったもの」
輝の頭の中では椛が一匹、椛が二匹、椛が三匹……と廻り廻っていた。
「だから、二匹目の椛は楓ってことで一匹目の椛は椛で、楓は椛とは全然別人ってことかよ？」
輝の中では椛は『匹』で数えることになっていた。
未空が空かさず答えた。
「そうとも限らないわ。椛ちゃんをベースに楓のエネルギーから生まれたわけだから、椛ちゃんと同じ能力や性格を持っているかもしれないわ」
「とにかく、こっちの椛が椛で、あっちの椛が楓ってことにしとけばいいんだろ？」
少し強引な解釈なような気がするが、輝が納得したのならそれで

いいだろう。
一通り話を聞いたところで悠樹がやっと口を開いた。
「では、問題はこれからどうするがだが、俺は明日学校を休んで椛の傍にずっといようと思う」
「オレも残るぜ」
「あたしの力が必要になるかもしれないから、あたしも学校休む」
「じゃあアタシも学校休んで……」
「駄目だ！」
悠樹が綾乃の言葉を途中で遮った。
「どうしてダメなのよ！」
「綾乃にまで危険な目に遭わせたくないから、おまえは学校に行け」
悠樹の言葉は完全に命令口調だったがそれにはわけがある。悠樹は目の前で矢を刺されて血を出した未空も見たし、椛によって大量の矢を射ち込まれた尊の姿も目のまで見ていた。そんなところに綾乃を巻き込ませたくなかった。だからと言って他の者ならいいのかというとそうでもなく仕方なくだった。
輝は悠樹に学校に行けと言われても意地でも椛の傍にいると言うだろう。未空はもっと危険で、学校に行くと口では言っても、きっと独りで行動して危険なことをするに違いないので、それなら一緒にいて貰った方がいい。
綾乃は少し考えてから口を開いた。
「しょうがないわね、学校行けばいいんでしょ。でも、椛ちゃんに何かあったら承知ないからね」
悠樹はほっとした。しかし、悠樹の読みは甘かった。
綾乃は口では学校に行くとは言ったが、内心では学校を休んで何かをしてやろうと考えていた。
夜の深さは増し、綾乃は自宅に帰ることになり、未空は今晩はこの家に泊まっていくことになった。
「星川さん、おうちの人は心配しないんですか？」
悠樹が聞くと未空はまるで他人事のように答えた。

「あの人たちは子供になんて無関心だから」
未空の親のことをいう『あの人たち』という言葉を聞いて悠樹は自分の家庭と重ね合わせてしまった。そして、これ以上は聞かない方がいいなと判断した。
この二人が比較的シリアスモードなのに対して残りの二人は再び暴れていた。
輝に飛びかかる椛。輝はすんなり避けて軽くチョップを椛の頭に炸裂させる。
「痛ぁ～い」
と言いながらも椛は輝の膝にキックして、輝も負けじと小さい子供に対して関節技を決める。
「どうだ、参りましたお兄様と言え！」
「うぅ～……椛負けないもん！」
ガブッと椛は輝の腕に噛み付き、輝が怯んだ隙に後ろに回って殴る蹴るの猛襲。
そんな二人の光景を見ながら悠樹は思った。もしかして、妹ともこんなことしてたのか？　悠樹には少し理解しがたかった。
輝は再び椛に関節技をかけながら余裕を見せて全く別の話をした。
「ところでさあ、星川さんどこで寝るの？」
「あたしならソファーでも平気だけど、真堂クンあたしと寝る？」
これはマジで言っているのか、冗談なのか、はたまた天然なのか、輝には理解できなかった。
「星川さんは輝のご両親の寝室でいいんじゃないか？」
「そうだな、あのダブルベッドだったら朝までぐっすりだな」
「ふ～ん、ダブルベッドなの……真堂クンあたしと寝る？」
これはわかった。完全にからかわれている。
さっきの素っ裸の未空の映像と今の発言で輝は顔を真っ赤にしてしまった。
「輝クンってわかりやすいのね。ふふ……」
完全に輝は未空の玩具にされていた。

椛を自由にした輝は顔を真っ赤にしたまま歩き出した。
「お風呂入ってくる！」
「輝クン、背中流してあげようか？」
これが止めとばかりのこの言葉を聞いた輝はわき目も振らずに走って逃げた。
「星川さん、輝のことからかっておもしろいですか？」
やさしい笑顔で未空は首を大きく縦に振った。
「葵城クンもからかってあげましょうか？」
「結構です」
悠樹は未空の性格が掴めそうで未だに掴めないでいた。

第9話｜破魔の弓

小春市某所にある今は廃墟と化してしまった立ち入り禁止の病院に琥珀と尊は潜伏していた。

琥珀と尊はすでに人間の世界での生活に溶け込み、互いにマンションで独り暮らしをしているのだが、ここ数日はこの病院で寝泊りをしていた。それには理由がある。

この病院が潰れた理由は人的要因だが、それを引き起こしたのはこの病院が建っている敷地に問題があった。この病院が建っている大地はこの地域のエネルギーを最も集めやすい場所で、そのエネルギーがあまりにも大きかったために、ここにいた人間たちが絶えられなくなったのだ。

人間たちには手の余る巨大なエネルギーを琥珀と尊は操ろうとしていた。

「だが、片割れだけでは私たちの計画には不十分だ」

「それはわかっているが僕も君も負傷して動くことができない。どうするんだい？」

「大丈夫だ、もうすぐ使い魔たちが到着する。そやつらにもう一人の椛を連れてくるように命じる」

尊は結界の中に閉じ込めている椛を見た。椛はここに連れて来られてから一言も口を聞いていなかった。

「あの時に邪魔さえ入っていなければ私の術で椛を仲間にできたのだがな」

「真堂と言う男のことだな。それに未空という女も図書委員で顔を会わせていたよ」

今になると琥珀の口から図書委員という世俗的な言葉を聞くと、とてもミスマッチな感じに聴こえる。

「未空は私の友達だった」

「あの未空という女は危険な存在だ。そう、あの図書室で最初に顔

を会わせた時も僕の顔をじっと眺めて何も言わずに去って行った。すでにあの時に僕が人間でないことに気づいていたのかもしれない」
尊は心の中で思った。ならば私も、最初から人間でないとわかっていながら未空は友達として接してくれていたのか？
「星川未空……人間の中で最も理解できない人間かもしれないな」
そう言うと尊は遠い目をして物思いに耽った。夜の暗闇が深くなり、今は彼女の時間であった。

翌朝日が昇る前よりも早く起きた綾乃は学校には行かず駅に向かった。
「ごめ～ん待った？」
綾乃が手を振る先には藍澄武がいた。
「綾乃っていつも待ち合わせに遅れて来るよね」
「だって寝癖が直らなかったんだもん」
毎回待ち合わせの時間に遅れて来るという綾乃の心理には、自分は相手よりも価値があり、相手は自分に従うのが当然だという傲慢な態度の現われだったりする。
今日この場所に呼び出したのは綾乃だが、この計画を持ちかけたのは武だった。
綾乃は昨晩輝の家から帰宅した後、電話で武に洗いざらい話して自分に協力するように仕向けたのだ。
超常現象おたくの武はすぐに綾乃の話に飛びつき、なんでそんなおもしろそうなことを輝と悠樹は自分に隠していたんだとちょっとムッとした。武は輝と悠樹に一泡吹かせる気満々だった。
武情報によると、電車で一時間半くらいの距離にある駅からちょっと歩いた場所にある神社に、ものすっごい霊力を秘めた弓矢があるらしい。
駅のホームにはまだ朝早いというのに微妙に人がいた。しかし、ラッシュアワーまでは時間があるのでシーンと静まり返っている。
駅内アナウンスが入り、すぐに電車が来た。ぼちぼち人が座って

いるがまだ全然席は空いている。
座席に並んで座った二人の片方はすでにぐったりで、もう片方はウキウキ感で心弾ませていた。ぐったりしているのが、朝が非常に弱い綾乃で、ウキウキなのが武だ。
武は昨日電話で綾乃と話している時から胸躍る気分で、昨日から一睡もしてなかったりする。
「いいなぁ、ボクも琥珀って妖怪見たいなぁ。妖狐が紅蓮の炎に包まれている映像を想像しただけで感動しちゃうよね」
「そんないいもんじゃないわよ。星川さんなんて月夜霊に矢で撃たれて殺されかけたんだから、あんな血だらけの服……思い出しただけでも寒気がするわ」
「でも本当にあの月夜霊さんなの？　あの人がそんなことするなんてボクには今でも信じられないけど」
「クラス委員やっててもの悪い奴は悪い奴なの。だって、すごく仲のよかった友達を矢で撃つなんて普通の人にできることじゃないわ」
「う～ん……」
まだ話だけしか聞いていない武には尊が悪い奴だったなんて未だに信じられない。その尊が未空を矢で撃ったなんてもっと信じられない。この話が事実だと知っても、多くの人が『まさか月夜霊さんが』と言うに違いなかった。
月夜霊尊は一年の入学時から小春西高校に在籍して、約一年の間に優等生で美人で誰にでもやさしく接してくれる人として、女子生徒を中心に慕われる存在としての地位を確立していた。その尊が実は人間じゃなくて、未空を矢で射抜いたとなると、天地がひっくり返るに等しいことだった。
電車に揺られて一時間半ほど経った頃二人は電車を降りた。
駅は小さくホームと改札口以外の余計なものは無かった。
駅の外は朝の清々しい空気で満ちていて、景色から判断できるだけでも都心からは離れたことがわかる。
辺り一面広がる野原と田んぼと畑。そして、山が大きく見える。

家と家との距離がだいぶ離れた位置にあり、遠くの方に比較的大きなスーパーっぽいお店があるが、コンビニはどこにあるのだろうか、ゲームセンターはどこにあるのだろうか、デパートはどこにあるのだろうか？

朝のせいもあるかもしれないが、そこから中から鳥の鳴き声が聴こえる。都会でも聞けるスズメやカラスの鳴き声だけではなく、綾乃が名前を知らないような鳥の鳴き声も聴こえる。

「のどかな田舎ね」

綾乃が口に出すまでも無く田舎だった。

「ここからちょっと歩いたところに神社があるんだよ」

「……ちょっとね」

この風景を前にしての『ちょっと』とはどのくらいの距離を示す言葉なのか、綾乃は不安になった。

畑の横の満ちを通り、武に道を案内されながら綾乃は武のやや後ろを隠れるようにして歩いていた。

いつもなら綾乃は知らない土地でもどんどん先を歩いていってしまうタイプなのだが、綾乃にとって田舎は知らない土地ではなく、秘境だった。

道すがらすれ違う人から挨拶をされてりしたので武は元気よく笑顔で挨拶を返すが、綾乃は少ししどろもどろで返した。ここの土地で会う日本人は、綾乃にとっては言葉の通じない宇宙人に等しかった。

普段の綾乃は少し気が強くて強引なところがあるが、自分の知らない環境にはとても弱いのだ。

だいぶ歩いた頃、鳥居と長い階段の前まで到着した。

何百段もありそうな階段を目の前にして綾乃はぐったりした表情を浮かべた。

「これ昇るの？」

「うん、この山の上に神社が建ってるんだよ」

「ふ～ん」

この『ふ～ん』は納得ではなく、あきらめから出た言葉だ。
階段は長くて急だった。普段運動をしない者にはひどく辛いに違いない。筋肉痛は確実だ。
綾乃にはこの階段が罰ゲームのように思えた。学校で放送部に所属している文化部系の綾乃にはこの階段は登れそうにない。彼女は体育も嫌いで汗をかくことも嫌いだった。
それに比べて武は軽快なステップで楽々階段を登って、綾乃の遥か頭上で手を振っている。彼が学校で入っている部活動は剣道部で、それに加えて毎朝近所の周りをぐるぐるジョギングしていて、持久力には自信があるのだ。
体力の有り余っている武はご丁寧なことに、綾乃の元まで降りて来ては急かして上に登り、また降りて来ては急かして上に登るということは何十回も行った。
結局綾乃は一度も武に手を貸してもらえないまま階段を登り切った。武は運動系のことには決して手を貸したりして助けたりはしないのだ。
この神社は小春神社に比べるとものすごく大きかった。境内はだいたいサッカーの試合ができるくらいの大きさだし、本殿はその半分くらいの大きさで、近くにはこの神社の神主の住居などがある。
疲れ切っている綾乃は前を歩く武だけを見て進んだ。そして、何も考えずに武の後について行くと綾乃はいつの間に建物の中に入っていたようだ。
どうやらここは民家の玄関のようだ。
武が大きな声で叫んだ。
「こんにちわーっ！」
すぐに背筋のぴんと伸びた威厳のありそうな老人が現れた。
「おお、よく来たな武。元気にしとったか？」
「ボクはいつでも元気だよ」
どうやら老人と武は知り合いらしいが、この老人はどこの誰で、武とはどのような関係なのだろうか？

綾乃がゆっくり手を上げた。
「あの、こちらの方は誰？」
「この人はボクのじっちゃんでこの神社の神主だよ」
「お嬢さん初めまして、わしはこの神社で神主をしておる葉月光伸と申す者じゃ」
「アタシは涼宮綾乃っていいます」
綾乃はぺこりとお辞儀した。
「都会っ子のお嬢さんにはあの階段は堪えたじゃろ？　家の中にお上がんなさい、茶でも飲んでゆっくり休むといい」
武は靴を丁寧に揃えて家の中に上がった。綾乃はいつもなら適当に靴を脱ぎ捨てるのだが、今日は武に習って靴を丁寧に揃えて家の中に上がった。そうしないとこの老人に激しく怒られそうな感じしたからだ。
老人によって居間に通され綾乃と武は出された座布団の上に座った。この時、綾乃はいつもならば足を崩して座るのに今日は正座をしてしまった。
一度姿を消したかと思った老人はお茶とお茶菓子を持って現れた。
「ところで武はいつも来ているからよいとして、お嬢さんは何の用で来なすった？」
「アタシは武にここに霊力を秘めた弓矢が奉納されていると聞いて連れて来てもらったんですけど？」
「あの弓矢がどうかしたかの？」
「ぜひ、貸していただけませんか？」
神主である葉月老人は少し考え込んでしまった。考えると言うことは貸しくれる見込みがあるということなのか？
「駄目じゃな。あの弓矢を貸して欲しいということは、それなりの理由があるのじゃろう。だがな、あの矢はこの神社を守る神器じゃからな、この神社から外へ出すわけにはいかんのじゃよ」
「えぇ～、そんなぁ」
武はあきらめつかないようすで祖父の顔を覗き込むが、葉月老人

は首を横に振るのみだった。
綾乃はお茶を一気に飲み干し立ち上がると、武の腕を掴んで立たせた。
「仕方ないわよ、大事な神器ですもの……、帰りましょ」
「腕引っ張らないでよぉ、ボクまだお菓子もお茶も飲んでないのにぃ」
「もう帰るのかの？」
綾乃はお辞儀をして、
「失礼しました」
と言うとここに残ろうとする武を引っ張って玄関を出た。
「お茶とお菓子……」
「そんなのどうでもいいでしょ！」
「よくないよ、あのお茶高級玉露で一〇〇グラム七〇〇〇円もするんだよ。それにお菓子だって高級和菓子でおいしいんだから！」
武は食へのこだわりを強く持っていて、祖父の家で出されるお茶とお菓子を毎回楽しみにしていたのに、今日は相当ショックだったのだ。
「そんなことよりも、弓矢ってどこに奉納されてるの？」
「えっ、弓矢？　弓矢は本殿に祭られてると思うけど？」
「じゃあ、取りに行きましょう」
「ええっ！？　それってまさか……盗み出すってこと！？」
「ちょっと借りるだけよ」
ちょっとも何もない。立派な窃盗だ。
「そんな、じっちゃんに言わないで借りるのは……」
「じゃあ、アタシが弓矢を勝手に借りて帰った後に、武が借りましたって伝えといて」
「何それ、意味ないよそれじゃあ……、でもぉ、仕方ないか。黙って借りていこう」
武は綾乃の妙な威圧感に押されて仕方なく綾乃の話を呑んだ。
「じゃ、決まりね」

二人は神社の本殿の中へこっそり侵入することにした。
扉を開けて靴を手に持ち中に入ると、そっと扉を閉めた。
本殿の中は静けさと荘厳な雰囲気で満ち溢れていた。ここで悪いことをしたら必ず神罰が下るに違いない。ここにいる二人はそんな中、悪いことをしようとしていた。
神器である弓矢は盗んでくださいと言わんばかりに、強い存在感で遠くから見えるようば位置に堂々と置かれている。
「あんなわかりやすく置いてあるなんて、盗まれないのかしら？」
今ここにあるということは、恐らく盗まれたことがないということだろう――今の今までは……。
心臓バクバクの武が見守る中、綾乃はすんなり易々と弓矢を手に取った。
その時、場の静かな空気を一気に壊すように扉を開く音が鳴り響いた。
綾乃と武が急いで振り向くとそこには、日の光を背に浴びた人影が！
武は思わず叫んだ。
「じっちゃん！」
「おぬしら、神器をどうする気だ、神罰が下るぞ！」
威圧感を含んだ恫喝で武はすでに目に涙を溜め、綾乃も身をすくめて弓矢を落としてしまった。
弓矢が床に落ちた音で我に返った綾乃は、ひどく慌てたようすで弓矢を拾い上げて言葉を口から搾り出した。
「ご、ごめんなさい、えっと、その、あの、弓矢を盗もうとしてごめんなさい。あと、落としちゃいましたけど、たぶん、壊れてませんから……」
バチン！　と弓の弦が切れた
綾乃は蒼ざめ変な汗がどっと流れた。すぐ横にいた武も完全に固まり、声すら発せられなかった。
どっしりとしていて威厳のある足取りで葉月老人は綾乃の前まで

来た。思わずここで綾乃はごくんと喉を鳴らす。
「何てことを仕出かしてくれたんじゃ。そのレプリカなかなかの値段なんじゃぞ」
「はっ、レプリカ？」
思わず聞き返してしまった綾乃から弓矢を取り上げた葉月老人は、どうにかして弦を直そうとしながら話した。
「この弓矢は壊れたり紛失してもよいように本物ではなくレプリカでな、本物は厳重にしまっておる。盗もうとしたんじゃろうが、残念じゃったな」
内心ほっとした綾乃と武であったが、この後にまだ怒られるのではないかと冷や冷やしていた。
「壊れてしもうた物は仕方がない。形あるものはいつかは壊れるものじゃ。さて、二人とも、盗んでまで弓矢が必要な理由を言うてみなさい。場合によっては貸してやらんこともない」
まさかの展開に綾乃と武は心弾ませた。そして、二人の話を聞き終わった葉月老人はある条件を出した。
「そうか妖怪が……この矢はもともとそのための物じゃし、よし、貸してやろう、一万円で」
「一万円って何だよ、じっちゃん
「レプリカの修理代じゃ」
綾乃はこの爺さん少しガメツイと思ったが、壊した物の修理代を請求するのは当然とも言える。
弓矢を壊したのは自分なのだからと綾乃は財布を取り出した。
「一万円か……なかなかの出費よね」
「お嬢さんは払わなくてよい」
「どうして？」
財布から一万円札を出そうとしていた綾乃を葉月老人の声が止めた。
「武が払いなさい。おまえがついていながらこんなことを仕出かすとは、まだまだ精神の鍛錬が足りん証拠じゃ」

「そんなぁ～、ボク一万円も持ってないよ」
「じゃったら、神社の掃除を隈なくしていきなさい」
「それもヤダよぉ、だって今日中に終わらないよ。明日も学校あるし」
「今日も学校をサボってここに来たのじゃろうが、つべこべ言わずに神社の掃除をしなさい！」
結局武は葉月老人によって軟禁状態で神社の掃除をさせられるハメになり、綾乃は音沙汰なしで帰された。
綾乃は武に何度も謝って神社を独り後にしていった。

第１０話―楓

みんなよりも早く起きて、輝はダイニングでテレビをゴロゴロしながら見ていた。すると、未空がダイニングにやって来た。ちなみに服は洗って乾いた自分の物を着ている。

「おはよう、輝クン」

未空に『輝』と言われてドキッとした。昨晩から『未空』に下の名前で呼ばれるようになって、輝はドキドキしっぱなしだ。

輝は素っ裸の未空を見てしまって以来、未空のことを妙に意識してしまうようになっていた。昨晩もそれでよく眠れず、今朝は早く起きてきてしまった。

未空はソファーで横になっている輝の頭の横に座った。未空の太ももが目の前に来てドキッとした輝は飛び起きて背筋をピンと伸ばしてしまった。

輝はソファーの端に寄って未空と距離を置くが、未空は輝との距離を詰めて来る。

「な、なんで、オレのことからかって楽しいですか！？」

「別にからかっているわけじゃないのよ、輝クンに興味があるだけ……」

「興味って何ですか！？」

この瞬間善からぬ想像が輝の脳内を駆け巡ったが、すぐに首を横に振って掻き消した。「実験台――もとい、あなたは特別な心の持ち主だわ。だから、輝クンのことを知りたいの」

再びこの瞬間善からぬ想像が輝の脳内を駆け巡ったが、すぐに首を横に振って掻き消した。

「ど、どういうことっスか、それ！？」

「普通の人の心は眺めているだけでもわかるわ、でもあなたの心は接してみないとわからないの。――きっと、あなたもあたしと同じ力を持っているのでしょうね」

「同じ力？」
「人間はその力のことを魔力とか霊力とか言ったりするわね。きっと、自分では気づいていないかもしれないけれど、輝クンは潜在的にその能力を持っているわ」
「オレが！？」
「そう。同じ力を持った者同士は惹かれあうことが多いの、その真逆もあるけれど。あたしと輝クンは惹かれあう方なのかしらね、ふふ……」
最後の意味深な笑いが気になるが、輝の頭の中はパニック状態でそんなことにも気づかなかった。
ダイニングのドアが開けられたかと思うと、椛が元気よく飛び入って来た。
「おはよー！」
最初にここに来た時よりも椛は明らかに元気になっている。それに伴い椛の存在も強くなっていた。
椛に少し遅れて悠樹もダイニングに入って来た。
「二人とも早いな。――すぐ、食事の準備をする」
悠樹はすぐにキッチンに消えた。
ダイニングに残された輝と未空と椛。椛が二人の間に入って来て、輝は少しほっとした。未空とふたりっきりの状況は輝の心臓にかなりの負担を与えていたのだ。
――朝食を食べ終わり、ひと段落ついたころ、食事の間黙して語らなかった未空が口を開いた。
「実はあたし、尊が人間でないことを最初から知っていて付き合っていたの」
この言葉を聞いた一同は誰も驚かなかった。未空なら、それもありえることだろうと納得させられたのだ。
誰も口を挟むことなく未空は話を続けた。
「それに琥珀のことも最初に会った時に気づいたわ。あたしは最初から全てに気づいていた。だから、独りで解決しようと思ったのだ

けれど、失敗しちゃったわね。あたしにも頼れる人がいればよかったのに……」
学校では未空は尊といることもあったが、それでも独りでいることの方が多かった。周りが彼女の『噂』を気味悪がって近づかなかったこともあるが、それよりも彼女自身が周りを寄せつけない雰囲気を強烈に出していた。
椛は未空の前に来ると、大きな動作をして自分の胸を叩いた。
「未空お姉ちゃんには椛がついてるから平気だよ！　いつでも椛のこと頼りにしてね」
未空はやさしい笑みを浮かべた。
「ありがとう椛ちゃん」
目の前にいる少女は幼児化してしまっている椛だ。少し心もとない感じもするが、未空にはそれでも十分過ぎるほどに心が満たされた。
玄関のドアが勝手に開けられ、誰かが家の中に侵入して来た。こんなことをするのは綾乃しかいないが、ダイニングの中に駆け込んで来たのは『椛』だった。
誰もが瞬時に理解した。もうひとりの椛だ！
「みんなの力を貸して欲しいの！」
第一声に突然こんなことを言われても何がなんだかわからない。
慌てたようすのもうひとりの椛を悠樹はとりあえずソファーに座らせて話を聞いた。
「君はもうひとりの椛だろ？　琥珀たちに捕まっていたのではないのか？」
「隙を見て逃げ出して来たの。それよりも大変なことになったの！」
「大変なこと？」
輝は聞いた。
「大変なことって何だよ？　琥珀たちがここに攻め込んで来るとか？」
「ううん、琥珀たちは力を蓄える為に隠れて外に出てこれないの。

でも、その代わりに使い魔たちを何匹か呼んだみたいなの」
「使い魔！？」
大きな声をあげて驚いたのは真物の椛だった。それほどまでに驚くべきことなのか？
輝は突然立ち上がると奇怪な行動を取り始めた。
「ギャオー！　ガオー！　うにょら～！　って感じのが使い魔だろ？」
身振り手振りによる熱演ではあったが、輝の説明では使い魔がなんであるか理解しがたい。
「今の輝クンはかわいかったけど、少し誤解があるみたいね。使い魔というのは動物及び低級悪魔などを、一定の魔法法則によって束縛して自分に従わせるものよ。中世の魔女たちの間では、フクロウやオオカミ、そして、黒猫が使い魔として使われていたようね。日本では陰陽師が使っていた式神も使い魔の一種と言えるわね。尊たちが呼んだ使い魔たちは妖怪の一種だと思うわ、きっと」
「なんだ、怪獣とかじゃないのか……」
今の未空の説明を聞く限りでは、怪獣とは違うものに思える。だいぶ輝は誤解をしていたようだ。
一通りの話を聞いて悠樹が口を開く。いつも彼は一通りの話を聞いた後に結論や意見を述べる。
まず、悠樹を人差し指を立てた。
「ひとつ、その使い魔という奴らがここに二人の椛を捕まえに来る可能性が高い」
悠樹は人差し指に続いて中指を立てた。
「ふたつ、そこにいる椛は琥珀たちの隠れ家から逃げて来たのだから、当然その場所を知っている」
悠樹は最後に薬指を立てた。
「みっつ、先程、琥珀たちは『力を蓄えている為に外に出れない』ともうひとりの椛が言ったが、つまり、俺たちが動く絶好のチャンスと言える」

「叩くなら今がチャンスってことだな？」
「そうだ。しかし、その方法をどうするかが問題だ」
「そうだな、ものすっごい問題だな」
何時になく真剣に考え込む輝。しかし、ちょっと的の外れていることを考えていた。
「もうひとりの椛のこと呼ぶ時、困るよな……。やっぱ、もうひとりの椛の名前は楓って呼んで区別するようにしよう」
言葉と同時にバシッと輝の後頭部に悠樹の平手打ちが炸裂した。
そんな光景を見た椛&楓はお腹を抱えて大きな口で笑い転げた。こんな光景前にもあったような気がする。
悠樹は咳払いをするような格好をした。
「こほん、話を元に戻すぞ。ここにいるみんなが止めても琥珀たちのもとにいこうとすることはわかっている。だが、闇雲に奴らに向かっていくわけにはいかないだろう？」
椛と楓がソファーの上に乗ってジャンプした。
「椛がいるから大丈夫だよ」
「楓もいるよ」
ここにいる中では今のところ、琥珀たちと同じ存在であるこの二人が最大の戦力となる。そして、彼女も戦力になってくれるに違いない。
「大丈夫、あたしもいるわ。あたしは学校の『噂』通りの人間よ」
ぞっとするような未空の声だった。その声を聞いた者は誰も震え上がり凍りついてしまうに違いない。現にここにいる者たちは皆、蒼ざめた顔をしている。
未空は冷笑を浮かべて輝を見た。
「それに、輝クンの力もきっと役に立つわ。一番危ないのはあなたよ、悠樹クン」
まさかこんな展開で自分の名を呼ばれるとは思ってもみなかった悠樹は、大声を張り上げた。
「なぜ輝は力になれるのに俺は駄目なんだ！」

「駄目とは言っていないわ。ただ、あなたは普通の人間だから、琥珀たちと戦うのは無理だわ」
「輝だって普通の人間だろ！」
「輝クンは特別なのよ。彼はあたしと同じで強い力を持っている。だから琥珀たちと戦える――あたしはそう信じてるわ」
未空は立ち上がると誰もがそうだにしなかった行動をとった。
「ごめんなさい、悠樹クン」
そう言うと同時に未空はすばやい動きで悠樹の前に移動して、悠樹を気絶させた。
誰もが一瞬何が起きたのかわからなかった。未空の手が悠樹の首元に動いたようにも見えたが、手の動きが早すぎて断言はできない。しかし、悠樹はその直後に意識を失いソファーにもたれるように倒れた。
輝はすぐさま悠樹に駆け寄り、悠樹の意識を確かめると、びっくりした表情をしながら未空のことを見た。
「マジですんげぇ！　未空さんどうやったの？　てゆーか、未空さんが体育苦手なの有名な話じゃ！？」
学校一の運動オンチと言われる未空があんなすばやい動きで、それもあんなことをしてしまうとは輝にとってそれは、悠樹が鼻からスパゲティーを食べながら逆立ちをして町内一周するくらいの驚きだった。
「学校の体育は、だるいだけ……」
未空はだるいだけで、マラソンの途中で学校の横を流れる川を眺めたり、ハードルを全て足で明らかに蹴飛ばしてゴールまで行ったり、バレーボールのボールを顔面で受けたり、テニスのボールを打ち返そうとしてラケットを相手の顔面に当ててみたり、その他にもいろいろとあるが、全て『だるい』から……なのか？
未空はソファーに再び座ると一息ついた。
「ふぅ、疲れた、悠樹クンは三〇分は目覚めないと思うわ。それよりも、椛ちゃんと楓ちゃんは一人には戻れないの？」

困った顔をして首を傾げる椛と楓であったが、とりあえず互いの両手を合わせて何かをしようとした。
「「無理みたい」」
双子のような息のぴったりさで二人が同時に言った。
「そう、仕方がないわね。それじゃあ悠樹クンが起きる前に琥珀たちのもとへいきましょう。楓ちゃん、案内できるわね？」
「うん！」

自宅マンションに戻ってきた綾乃は自分の部屋には戻らず、そのまま輝の部屋に入ろうとした。
いつも通り勝手に入ろうとしたが、今日は玄関の鍵がかかっていた。
「出かけたのかな？」
ピンポーンとチャイムを鳴らすが人が出て来る気配はない。
それでも綾乃はあきらめずチャイムを連打して押した。せっかく弓矢を持ち帰ったのにこのままでは苦労が水の泡になってしまう。
そろそろ指も疲れてきたのであきらめて帰ろうとした時だった。男の声とともに玄関のドアが開かれた。
「うるさいぞ綾乃！」
玄関を開けたのは首を痛そうに擦っている悠樹だった。
「どうしたの？　もしかして寝起き？」
普通の人が見たら、寝起きで首を寝違えた人みたいな光景だった。しかし、その想像は近からず遠からずと言ったところだ。
「星川さんに気絶されられて、おまえのチャイムで起きた」
「星川さんに気絶させれたってどういうことよ！？」
一瞬綾乃は、未空が自分たちを裏切って敵の仲間になったのかと思ったが話を聞くとそうではないらしい。
「俺がおまえを学校に行けと言ったのと同じ理由で、俺も星川さんたちに気絶までさせられて置いていかれた……おまえ学校はどうしたんだ？」

「えっと、武と一緒にこの弓矢を取りにいって……」
綾乃は袋の中から弓矢を取り出して悠樹に見せた。
「その弓矢は？」
「妖怪退治とかに強力な力を発揮する霊力を秘めた弓矢なんだって」
「……琥珀たちと戦うためにそれを取りに……もしかして武に今回のこと全部話したのか！？」
「ええ、ぜ～んぶ話したわよ。悠樹と輝が自分にそんなすごいこと黙ってたなんて許せないって怒ってたわよ」
「そうか、話してしまったことは仕様がない……。それで武は？」
「この弓矢を借りるのと交換条件で神社で働かされてるから、たぶん明日も帰ってこれないかな？」
「まあいい、とにかく家の中に入れ、輝たちがどこに向かったのか考えよう」
玄関で靴を脱ごうと綾乃がしている時だった。ベランダの窓ガラスが叩き割られるような音が聞こえてきた。
悠樹はすぐさま現場へ向かい、綾乃も靴をは履いたまま悠樹に後を追った。
窓ガラスが割られ、室内にガラスの破片が散乱していた。そして、部屋の中には見るからに恐ろしい顔の子鬼がうろついていた。
言葉を出せないで立ちすくんでいる悠樹と綾乃に気がついた小鬼は、睨みつけながら話しかけてきた。
「椛ハ、ドコ行ッタ？」
たどたどしい日本語であったが、低く重い声は恐怖感をさらにあおった。
後ろに一歩下がろうとした悠樹に小鬼が蛙のように飛びかかって来た。
小鬼は悠樹を押し倒し、抵抗していた悠樹をおとなしくさせるために自分の息を大きく吹きかけた。するとどうだろう、悠樹はすぐに気を失ってしまったではないか！
小鬼はすぐさま綾乃にも飛びかかろうとした。

「来ないでよ！」
どうにか小鬼を振りきった綾乃は部屋中を見回した。何か武器になるものはないか？
必死の抵抗をして綾乃は逃げ回りながら、そこら中にある小物を小鬼に投げつけるが、小鬼にはびくともしない。
パニックに陥っていた綾乃はやっとあることに気がついた。武器は最初から手に持っているではないか。
「アタシってホントバカ、どうして気づかなかったんだろ」
袋から急いで弓矢を取り出し、綾乃は鬼に向けてその弓矢を構えた。弓道などをやったことのない綾乃の弓の構え方は様にはなっていないが、鬼はそれを見て怯んだ。弓矢の発する霊気に恐怖を覚えたのだ。
綾乃は矢を弦にかけて後ろに引こうとした。
「あれ、どうして？」
矢が引けない。綾乃に力がないからという単純な理由ではなく、この弓矢は霊力の強いものしか使えないようになっているのだ。
先ほどまで恐れをなして動けなかった小鬼であったが、綾乃の右往左往するようすを見て蛙のように飛びかかって来た。
「きゃーっ！　ヤダ、放してよ」
綾乃は両腕を掴まれ上に乗られて自由を奪われてしまった。暴れようとするがそれもできない。
小鬼は大きく息を綾乃に吹きかけた。すると、綾乃も悠樹のように深い眠りに落ちてしまった。
小鬼は床に転がる弓矢を恐る恐る拾い上げて、気を失っている二人を軽々と持ち上げて抱きかかえると、ベランダに待たせてあった全長三メートルを越える大鷲に乗って空へと消えていった。

第１１話―廃墟の病院

楓が輝たちを連れてきたのは廃墟となった大病院だった。
五年ほど前に潰れたこの病院だが、ここ数年は心霊スポットとして有名で、深夜になると若者たちが集まってくる。
この病院が心霊スポットとして有名になったのは、病院の陰気な雰囲気と、そして何よりも、この病院を建て壊そうとした業者が祟りめいた天災に幾度も遭ったからだ。
病院を建て壊そうとした途端、重機類のトラブルに見舞われたり、突如崩落して来た天上に押しつぶされて人がなくなったりと不幸が続いた。そして、今では手付かずのまま放置され、病院はより一層の不気味さを増していた。
近年では、この病院でお化けや怪奇現象に遭った若者たちが急増して、そういった現象に遭った者たち尋常でないほどに怯えて誰もが無口な人間になってしまった。それが噂として広がり、一時は人足が減ったかのように思えたが、今では前よりも恐いもの見たさの若者が多く訪れる結果となった。
噂が大きくなると、テレビ局や雑誌の取材がこの病院に来た。しかし、この病院の取材をした関係者たちは皆、病気や交通事故などに遭い、ここ病院は『本物』だとされ、それ以降テレビ局や雑誌の取材はタブーとされた。
病院の概観を見ただけでも不気味だというのに、病院内は暗くじめじめした空気に包まれていた。
輝は暗い廊下の中で身震いをした。
「なんか、この中寒くない？」
「霊が近くにいるのかもしれないわね」
あっさりとした口調でそういうことを言う未空の方がよっぽど怖いかもしれない。
大きめ懐中電灯を二つも使って廊下を照らすが、それでも光が闇

に呑み込まれてしまうようで心もとない。
輝は椛と手を繋ぎ、未空は楓と手を繋いで歩いているが、輝の方は椛に手を繋いでもらっていると言った感じで、手に大量の冷や汗をかいていた。
椛と楓はぜんぜん恐がるようすもなく、楓は未空の手を引っ張って先にどんどん行こうとする。
「早く、こっちだよ、あっ！」
楓は先を急ごうとして何かにつまずいてコケた。片手を未空と繋いでいたためにうまく受身が取れなくて、ひざを擦りむいてしまった。
「……うぇ～ん！」
傷は浅いがそれでも楓は大泣きをし出してしまった。
「大した傷ではないから、泣かないで」
未空が楓の手を引っ張り上げて立たせたが、まだ楓は少し嗚咽をしている。
「うぐっ……うっ……」
「歩けないようなら、輝クンが背負ってくれるわ」
「オレが？」
椛が輝の背中を打った。
「男の子の当然だよ！」
小さい子供にまでこう言われてしまっては仕方がない。輝は楓を背負おうとしたが、楓は大きく首を横に振った。
「……大丈夫、歩ける」
楓はそう小さく呟くと、未空の手をぎゅっと握って再び歩き出した。
そんな楓を見て輝はちっちゃな感動を覚えた。小さいのに強い子だ、きっと大きくなってもいい子に育つだろう。けど、なんで不気味なのには恐がらなくて、足をちょっと擦りむいたくらいで泣くんだ？　そんな疑問が輝の頭に残ってしまった。
暗い廊下は続き、静かな廊下には輝たちの足音だけが響き渡って

いる。はずだった。
椛と楓がそれいち早く気がついた。
「「何か来るよ！」」
声を揃えて叫んだ椛と楓は、同時に後ろを振り返った。
二人につられて後ろを振り返った輝が見たものは、暗い廊下の奥にぼんやりと輝く光だった。それはだんだんと近づくにつれて形がはっきと見えてきて、青白い光を纏った人だということがわかった時には、未空がいち早く動いていた。
未空はポケットから子瓶を取り出すとコルクの蓋を開けて、中身の液体を幽霊と思わしき者に振りかけた。
すると、幽霊と思わしき者は闇に溶けるようにして消えてしまった。
一瞬の幻のような光景だったが、輝は心にしっかりと焼き付けた。
「すんげぇ、星川さんってやっぱすっげえよ。何かいいもん見ちゃったなぁ～」
輝の目に映る未空の姿は、映画に出てくるお化け退治の専門家のよう写っていた。
昔から輝はテレビのヒーローなどに憧れている節があり、実際に何かと戦う未空を見たのはこれが初めてだったので感動は一入だった。
「星川さんカッコいいっスよ！」
ワザとらしいまでにはやし立てる輝に未空は照れたのか、少し笑みを浮かべた。
「輝クンにそう言ってもらえると、うれしいかな」
「「未空お姉ちゃんカッコいい！」」
椛と楓も未空のことを褒め称えた。
輝は未空の前に駆け寄ると、未空の持っていた子瓶をまじまじと眺めた。
「でも、それ何なの？　液体みたいのを振りかけてたけど？」
「この瓶の中に入っていたのは、なんちゃって聖水よ」

「なんちゃって聖水って何？」
輝は聖水というのはテレビゲームで何となく知っているが、『なんちゃって』とはどういうことなのだろうか？
「この聖水は、輝クンの家の水道水と塩を使って作ったものなの。簡単に言うと食塩水みたいなものかしら」
「そんなんで、幽霊退治なんてできんの？」
「塩は昔から除霊などにも使われているものだし、それを清めた水と混ぜれば下級霊には効くかなと思って作ってみたんだけど、本当に効いたみたいね」
「もしかして、あの幽霊が実験台？」
「ええ、でも成功したでしょ」
あっさりと答える未空に、世の中は何ごとも結果が全てなのだと思い知らされた気分の輝だった。
幽霊との遭遇がなかったことのように再び歩き出した輝たちであったが、今度は前方から足音が聞こえてきた。
それは先ほどと同じように青白い光を纏った人だった。それも今度は複数だ。
ぞろぞろと歩いて来る青白い人影はゾンビと言われる者に似ていた。
身体をギクシャク動かしながら、輝たちの方に歩いて来るゾンビたちの身体は、いたるところが欠けていた。中には首のない者のいる。
そんなゾンビたちを見て輝は吐き捨てるように呟く。
「ここはホラーハウスかよ」
「それに近いかもしれないわ。すでにここは病院内じゃないかもしれない」
「それって、どういうことだよ？」
「話はあとでね。今はこの状況をどうするかよ」
ゾンビたちの動きは遅いので走って逃げることも可能だ。しかし、椛と楓が前に出た。「椛に任せて！」

「楓に任せて！」
椛と楓は横に並ぶようにして立ち、椛は右手を横に、楓は左手を横に出して互いの出し合った手を合わせてゆっくりと上にあげると、二人の身体はまばゆい光に包まれた。
「「お化けさん、ばいば～い！」」
二人が声を揃えて叫んだ瞬間――二人を包んでいた光がものすごいスピードで飛んでいき、ゾンビたちを丸呑みにして激しく輝いた。
暗い廊下が一瞬にして光に包まれ、それが治まるとゾンビたちの姿も消えていた。
またまた、すごい光景を目の当たりにした輝は感動したが、こんなゲームの戦闘みたいに敵をばっさばっさと倒していいものなのか、とも思った。
未空はすぐさま懐中電灯を持って、ゾンビたちのいたところを照らした。
「やっぱり、そうなんだわ。椛ちゃんと楓ちゃんもだいぶ前から気づいていたんじゃないの？」
「椛も変だなぁって思ってたの」
「楓もそうだよ。尊たちに連れてこられた時から、もしかしたらって思ってた」
「三人とも、何なんだよ？」
自分だけわからないのがもどかしい。仲間外れにされているようにも思えてくる。
「輝クン、こっちに来てここを見てくれる？」
輝は未空に言われるままに椛と楓と一緒に未空のもとに駆け寄った。
「見ろって何を？」
「ゾンビというのは動く死者だから幽霊と違って肉体を持っているのよ。それなのにこの床には肉片の一つも無いでしょ？」
「肉片が落ちてたらグロいじゃん」
「つまり肉片が落ちてたらグロい……じゃなくって、変なこと言わ

ないでよ」
「オレはただ正直な感想を言っただけだよ」
冷たい目をして輝を見た未空だったが、すぐに気を取り直して話を続けた。
「つまり、あのゾンビたちは偽者だったということになるわ。そして、恐らくここはさっきも言ったけど、病院の中ではなく別の場所だと思うの。きっと、異界と呼ばれる類の場所かもしれないわね」
「椛もそう思うよ、ここは人間の世界じゃないと思う」
「楓はね、きっと輝が『寒い』って言った時には違う場所に来ちゃってたと思うの」
何かすごい展開になってきたなと思いつつも、輝はワクワクしていた。一人でここにいたら恐怖に怯えていたかもしれないが、椛と楓、そして、未空が近くにいてくれたので安心していられた。この三人は輝にとって強い味方だった。
「先を急ぎましょう。関係ない敵を相手にしている暇はないわ、早く尊たちを探しましょう」
未空は楓の手を取って歩き出した。輝もまた椛の手を取り未空の後に続く。
やがて輝たちは階段の前に差しかかった。この下に楓は行きたいと言うのだが、階段は見事に壊されていた。
「下に尊たちはいるの」
楓はそう言うが、階段が壊れていては下には行けない。
「あのさぁ、楓が琥珀たちから逃げ出した時ってどうやってここ通ったの？」
至極最もな輝の質問だった。しかし、楓はその質問に答えることができなかった。
「わからないの。ここを通ったと思ったんだけど？」
「はぁ？　どういうことだよ、勘違いじゃなくって？」
「嫌な予感がするわ。もしかしたら、本格的に異界に迷い込んでしまったのかもしれない」

「はぁ？　さっきから異界にいたんじゃなかったの？」
『はぁ？』という声が裏返ってしまった。もう、輝は何だかわからなくなってしまっているのだ。
未空を人差し指を立てた。
「ひとつ、楓ちゃんの勘違い」
未空は人差し指に続いて中指を立てた。
「ふたつ、楓ちゃんが通ったあとに壊された」
未空は最後に薬指を立てた。
「みっつ、空間が捻じ曲がっているということなどが考えられるわ。どう？　悠樹クンのマネしてみたのだけど」
何でこんなところで未空は悠樹のマネをするのか輝には理解不能な行動だった。しかも、そのマネについて意見を求めてくるなんて、未空流のギャグなのか！？
輝の頭は未空の思考を読もうとして混乱した。
「……わからない」
そう呟き輝は未空をふと見ると、未空は嘲笑っているような表情をしていた。
からかわれてるのか！？　全て計算された行動だったのか。そう思うと輝は未空のことを恐ろしく感じた。
「じゃあ、試しに落ちてみましょう」
未空は突然そのようなことを言って、壊された階段の下を覗き込んだ。覗き込んだその先は真っ暗で何も見えない。未空が懐中電灯で照らしても下は真っ暗だ。
輝も下を懐中電灯で照らしたがやはり何も見えない。
「落ちるって、もしかしてこの下に落ちるってこと？」
「そうよ、輝クンが先に行く？」
「落ちたら怪我するに決まってるじゃんか！」
「そう、じゃあお先に――」
未空は闇の中に飛び込んだ。すぐに姿が闇に包まれて消えたが、落ちた音がしない。

「どういうことだよ？」
「椛も行くっ！」
「楓も行くよぉ！」
二人の少女も未空の後を追って闇の中に飛び込んだ。
残された輝は小さな少女に負けられないと意を決して闇の中に飛び込んだ。
輝は着地に失敗してお尻を強打した。
「痛てぇーっ！」
未空が顔を覗き込むようにして聞いてきたが輝は、
「大丈夫、輝クン？」
「大丈夫、大丈夫だから」
と言いながら、大丈夫じゃなさそうにお尻を擦りながら立ち上がった。しかし、思ったよりは大丈夫だった。
さっき上から見たよりは低い位置から落ちたような感じがして、輝は上を見上げて驚いた。
「はぁ！？　何で上が天井なの？」
見上げた先には天井があった。もしかして、これが空間が捻じ曲がっているということなのか？
「よかったわ、下が別の空間に繋がっていて。あたしの勘が外れていたら大怪我じゃ済まなかったわね」
「わかっててやったんじゃないの！？」
素っ頓狂な声を上げてしまった。この時に輝は今までで一番未空に恐怖を感じた。
「椛も勘で飛んだの」
「楓も勘で飛んだよ」
もう輝は何も言わなかった。この三人は勘で人生の全てを乗り切って来たんだと思うことにした。
未空は辺りを見回して、薄気味悪い笑みを浮かべながらぼそりと呟いた。
「霊安室みたいね」

「……ウソ？」
輝は一瞬にして身を凍らせてしまった。
辺りは薄暗く陰気の漂う病院。そして、ここは霊安室ときた。恐がらない者などそうはいまい。
「は、早く出よう」
それが輝の口から出せた精一杯の言葉だった。
あからさまに恐がる輝を見かねて、椛&楓が輝の手を片方ずつ持って引っ張った。
「「恐がらなくても平気だよ」」
二人にそう言われても輝の足は動こうとしなかった。
「「輝、男の子なのに恐いんだーっ！」」
小さな子供にこんなことを言われると腹が立つが、恐いものは恐い。動きたくても足が動かないんだからしょうがない。
「う、うるさいな、も、もう少し経ったら動く……ぎゃ！」
輝は背中に何か柔らかいものが触れたのを感じて思わず叫び声を上げて、椛&楓と手を繋いだまま三メートルほど走ってしまった。
恐る恐る輝がゆっくりと後ろを振り向くと、さっき自分がいたはずの場所に未空が立っていた。
「い、今の、星川さん？」
「うん、後ろから抱きつこうとしたの」
「何でそんなことするんだよ！」
「後ろから抱きついて脅かそうと思ったの。でも、あんなに驚くなんて、輝クンかわいいわ……ふふ」
輝はうつむいて含み笑いをする未空の顔見て、その視線をもうちょっと下に下げて気がついた。その瞬間、輝は顔を真っ赤にした。
「今オレの背中に触れたのって……」
背中に触れた柔らかな感触、あれはきっとアレだったに違いない。そう思いながら輝は未空の胸の辺りを見て、さっと視線をすぐに逸らした。
いろいろな邪念を振り払うために輝は椛&楓と手を放すと、霊安

室のドアからひとり出ていった。が、すぐに戻って来た。
「……あれ？」
思わず輝は呟いた。彼に予期せぬ自体が起きたのだ。
「あれ、確かに外に出たと思ったのに……同じ場所に戻ってきたぞ？」
そう、霊安室を出たつもりが霊安室の中に入ってしまったのだ。
未空と椛&楓も霊安室から急いで出てみたが、結果は輝と同じだった。
「「変なのぉ～」」
「変なのは空間が捻じ曲がってしまっているせいね」
未空は辺りを見回した後に深いため息をついた。
「ふぅ、閉じ込められたわ」
未空の言う通り霊安室にはドアがひとつしかなかった。そのドアから外に出られないということは、外に出るのが不可能ということになった。
「でも、もしかしたら……あの中に出口があったりして」
未空は何かを思いついたらしく、壁に埋め込まれている死体を保管するケースの前に立った。
「ここも扉と言えるから、開ければ他の場所に……あ、死体」
当然と言えば当然だが、未空が開けた中には人の死体が入っていた。しかし、ここは廃墟の病院だ。
手を伸ばし外に出てこようとした死体を無理やり押し戻すと、未空は何ごともなかったように扉を閉めた。
輝が唖然としてしまっている中、未空は次の扉に手をかけていた。
「たまには勘も外れるのね。でも、こっちは……」
今度は何も入っていなかった。未空が懐中電灯で中を照らすが何も無い――いや、懐中電灯の光を闇が呑み込んでしまっている。この現象はあの時と同じだ。
輝たちが見守る中、未空は少しよじ登り『闇』の中に入っていった。

椛&楓も輝に手を貸してもらって持ち上げてもらい中に入っていった。そして、最後に残った輝も『闇』の中に入った。

最終話―トゥプラス

輝が気がついた時には、そこは無限に広がっていそうな空間だった。壁も建物も何もなく、地面は硬く平べったいが、その下では溶岩のようなものが流動している。そして、そこではすでに未空と椛&楓が尊と琥珀と対峙していて緊迫した空気が漂っていた。

輝はそしてもう一つのことに気がついた。

「何でおまえらいるんだよ！」

「すまん、捕まった」

「早く助けてくれるとうれしいかなぁ～……なんて、あはは」

光でできた牢屋の中に悠樹と綾乃は捕らえられていた。

琥珀は牢屋に近づくと炎を手に平の上に出した。

「二人の椛を渡してもらおう。でないと、この二人が地獄の苦しみを味わうことになるよ」

椛&楓が一歩前に出た。

「「悠樹と綾乃お姉ちゃんを放してあげて！」」

椛&楓の感情が高ぶり、大声で叫び声を上げたその時、二人の心が強く同調して奇跡は起きた。

まばゆい光に包まれた椛&楓が立っていた場所には、巫女装束を着た美しい女性が霊気の波動で長く淑やかな髪を靡かせていた。

「今再び、ひとりに戻りました。そちらにいきますから、悠樹と綾乃を解放してあげてください」

「いいよ、椛がこっちに来てくれるなら、この二人を解放してあげよう」

琥珀によって光の牢屋は消され、悠樹と綾乃は外に出ることができた。しかし、琥珀の炎がまだ二人を狙っているのでその場を動くことはできない。

尊が椛のもとへ近づいてくる。

「妙な真似はするな、私が椛を拘束したら二人を解放してあげよう」

そう言いながら尊が椛を拘束しようとした時だった。突然ふたりに戻った椛&楓は、楓が尊を光でできた紐のようなもので身体を拘束して、椛は瞬時に弓矢を具現化で作り出して琥珀に矢を放った。
尊は身体の自由を奪われ身動きができなくなり、琥珀が矢を受けてよろめいたところで悠樹と綾乃は逃げようとした。だが、琥珀がそれを許さない。
「逃がすか！」
琥珀が炎を悠樹と綾乃に放とうとした時、懐中電灯がどこからか飛んできて、続けざまに横から輝のタックルをくらい、炎の塊は狙いを外れて悠樹の横を掠めるように飛んでいった。
すぐに立ち上がろうとした琥珀は椛の猛攻を受けることとなった。幾本もの矢が琥珀に向けて放たれたのだ。
琥珀は全ての矢を避け切れず、数本の矢を身体に受けてしまった。
手負いを受けた琥珀の前に突然、人が通れる高さで長方形の扉のような『闇』が現れ、琥珀はその中に逃げるように入っていった。
『闇』に消えた琥珀の直ぐ後を椛が追い、輝もまたその後を追って『闇』の中に入っていった。 悠樹も『闇』の中に入ろうとしたのだが、輝が入った瞬間に『闇』は跡形もなく消えてしまった。
ここにいる者たちは皆、束縛され捕らえられている尊の周りに近づいて来た。
尊を捕らえることができたが、これからどうするか誰も考えていなかった。
尊が不敵な笑みを浮かべる。
「今が絶好のチャンスだというのに誰も私を殺さないのか？ 甘い奴らだ」
突然尊の足元に穴が開き、尊はその穴の中に落ちていった。――逃げられたのだ。
すぐに椛と悠樹が穴の中に飛び込んだ。すると、穴は跡形もなく消えてしまった。
この場に残されてしまった二人はあることに気がついたが、口に

いち早く出して言ったのは綾乃だった。
「もしかして、アタシたち閉じ込められたの？」
「ええ」
未空はあっさりと答えた。その声からは微塵の動揺も感じさせなかった。
みんなが出ていった『闇』はもう消えてしまっているし、未空が最初にここに入って来た時の『闇』もすでになかった。
ぐるっと一周辺りを見回しても何もない空間。見えるのはどこまでも続いていそうな地平線。状況は最悪と言える。
「星川さん、何かいい考えない？」
「向こうの方まで歩いてみる？」
未空の指差した先には地平線が見えるのみだ。未空は本気で歩こうと言っているのか？　ボソッと未空が呟いた。
「……冗談」
「……」
綾乃は、この人の性格は絶対好きになれないと思ったが、ここでケンカをしてもしょうがないので、そのことは心に留めて置いた。
「涼宮さん、あきらめては駄目よ、方法が無いわけではないわけではないから」
「本当に！？」
「これを使ってみる」
未空はポケットからいつも持ち歩いているナイフを取り出した。綾乃は何でそんな物を持っているんだ、と思ったがこれも心に留めて置いた。
未空によってカバーを外すされたナイフは不思議な光を放っていた。その光を見ていると吸い込まれそうになる。
「このナイフは特別なナイフなの、だから、こうやって――」
未空はナイフを地面に突き刺して手前に引いた。すると、地面に黒い筋が入った。そして、この黒い筋――あの『闇』に似ているような気がする。

だが、未空がナイフを抜くと黒い筋はすぐに消えてしまった。やはり、あの『闇』と同一のものかもしれない。
「空間に傷はつけられたけど、力が足りないわ」
「どういうこと？」
「魔力などの力を秘めたもので空間に穴を空けようとしたのだけれど、もっと強力なものでないと人間が通れる穴は空けられないみたいね」
「もっと強力なもの……あっ、そうだ！」
「何かあるの？」
綾乃は何かを思い出してある場所に駆け出していった。未空もその後をゆっくり歩いて追う。
綾乃が着いたのは、先ほど綾乃と悠樹が閉じ込められていた牢屋のあった場所だ。そこには、あるものが落ちていた。
「コレコレ！　閉じ込められてた時に一緒に入れられてたのよねぇ」
うれしそうな声をあげながら綾乃が拾い上げたのは弓矢だった。そう、この弓矢は『あの』弓矢だ。
綾乃は拾い上げた弓矢をすぐに未空に渡した。
「星川さん、これ使える？」
「強い力を感じるわ、……これならいけるかもしれないわね」
口元で笑った未空が綾乃の顔を見ると、綾乃は蒼い顔をしていた。未空の笑みが不気味だったのではない。この場に現れた者どもを見てだ！
未空の後ろからは五匹の赤黒い肌をした小鬼がぞろぞろと歩いてきていた。それに気づいた未空は矢筒から矢を出して、振り返りざまに矢を小鬼に向けて放った。
矢は見事子鬼の心臓に突き刺さり、小鬼はどろどろに溶けて地面に吸い込まれるように跡形も無く消えた。
「星川さん、カッコいい！」
「今の奴の横の鬼を狙ったんだけど……」
「……」

「……ウソ」
綾乃に何も言わせないまま、未空は矢筒の紐を肩に掛けて背負うと、矢を連続して小鬼目掛けて放った。
弓矢は一本も外すことなく小鬼の心臓を貫き、矢を受けた小鬼はどろどろに溶けて跡形もなく消えた。
「星川さん、すごい、すごいよ！　弓道とかやったことあるの？」
「いいえ、この弓と矢は、弓矢の腕前とは関係無しに使用者の思い通りに矢を飛ばすことができるみたい」
未空は全神経を集中させて弓矢を地面に向けて構えると、力いっぱい矢を引き、手を放した。
矢は地面を貫き直径一メートルの穴を空けた。
「どこに繋がっているのかしらね？」
意味深なことを言い残して未空は『闇』の中に飛び込んだ。
「星川さんと別の場所に行っちゃったりして……なんてね」
顔を引きつらせながら綾乃も『闇』の中に飛び込んだ。
闇を抜けて二人が出てきた場所は、薄暗い廊下だった。きっと、病院に戻って来たに違いない。しかし、病院内は琥珀たちが逃げるために前よりは明るく、廊下の先まで見渡せるようになっていた。
これは未空たちのとっても好都合だ。
未空は床に座り込み壁に疲れたように寄りかかった。
「弓矢を放つのに力をだいぶ使ってしまったようね」
「だいじょぶ、星川さん？」
「あたしはここで休むから、この弓矢を誰かに届けてくれる？」
「アタシ独りで！？」
廃墟の病院で女の子独りでいけるわけがない。綾乃は絶対ここを動きたくなかった。
「みんなのピンチを救ってきて、お願い……」
弓矢を託して未空はぐったりとして目を閉じた。
「星川さん、だいじょうぶ！」
綾乃は未空の肩を揺さぶるが反応がない。息はしているようなの

で気絶しているだけだろうが、独りになってしまった綾乃はパニック状態に陥った。
「星川さんってば、起きて、起きてよ、お願いだから起きて！」
未空は起きることがなかった。
絶望の淵に追いやられた綾乃は無言で肩を落とし泣いた。
「うっ……うう……どうしよう、どうすればいいのよ！　恐いよ……誰か……悠樹……助けてよ……」
綾乃の口から本音が出た。誰よりも助けに来て欲しい人――それは悠樹だった。
輝を通して悠樹と幼稚園の時に知り合った綾乃は、いつしか悠樹に恋心を抱いていた。それを自覚したのは中学に入った頃に悠樹の性格が少し変わってしまった時だった。変わってしまった悠樹に反発を覚えた綾乃は、それと同時に悠樹のことが好きだったことに気がついたのだ。
しばらくの間、肩を揺らして泣いていた綾乃であったが、弓矢を手に取り立ち上がると涙を拭いて走り出した。
そんな綾乃を誰かが止めた。
「そっちじゃないわ」
「えっ？　ありがとう」
誰かに礼を言った綾乃はUターンして廊下を駆け抜けていった。そんな綾乃は走りながら何かの疑問を覚えたが、今は無我夢中で走ることで精一杯だった。
廊下に残された未空はゆっくりと目を開けて、むくっと立ち上がった。気絶は演技だったのだ。
「……やっぱり、葵城クンのことが好きだったのね」
未空は綾乃が走っていった方向とは別の方向へ歩き出した。しかし、その足は三歩ほど歩いたところで止まった。
「あ、そうだ……懐中電灯あそこに置いてきちゃった。輝クンのウチのだったのに、あとで弁償しよう」
未空は再び歩き出した。

身体を拘束していた紐を無理やり解き放ち、尊は長い廊下を逃げていた。
尊は大きな誤算をした。まさか、椛があれほどまでの脅威になろうとは思ってもみなかったのだ。
椛の力は確実に強くなっている。それは周りにいる人々の椛への想いが強くなったからだった。
琥珀と尊が別れることによって相手の力が分散できた。現に後ろからは悠樹と楓が追いかけて来ている。二人の椛がいなければ勝算は十二分にある。
後ろの二人を迎え撃つために尊は全力で戦える広い場所を探していた。しかし、廊下の途中である人物に出くわしてしまった。
「未空！？」
「尊のことは、あたしが止めなくてはいけないと思うの」
未空は自分を悔いていた。尊が人間でないとわかっていながら、事件が大きくなるまで何もできなかった自分に……。
すぐに尊の後ろから悠樹と楓も駆けつけて来た。
「星川さん！」
「未空お姉ちゃんだ！」
尊は自らのエネルギーを使って弓を具現化したが、誰かに向けて構えることはしなかった。楓を倒すのが先決ではあるが、この狭い廊下では楓に弓矢を構えた瞬間に、後ろにいる未空に何かされるかもしれない。
楓も弓矢を具現化して、こちらは尊に矢先を向けた。
誰も動かない緊迫した空気が流れる。
未空が一歩尊に近づいた。
「あたしはできれば尊に前のように人間の生活に戻って欲しい。そして、またあたしの友達になってほしい……」
「私はおまえたちを利用していただけだ。人間など道具に過ぎない！」

「俺にはそうは見えなかった。一緒にクラス委員をやったり、料理を作ったこともあったし、尊さんは本当に悪い人には見えなくて……」
「人間とは愚かな動物だ。私の演技に心を動かされるなど……、おまえたちがや殺れなくても、私は容赦なくおまえたちを殺す。そして、自分の存在をこの世界に強く刻み込む！」
尊は弓矢を構えて楓に矢を放った。
少し遅れて楓も矢を放ったが、尊の放った矢の方が早く楓の身体を貫いた。しかし、尊の狙った心臓ではなく肩を貫いただけだった。
楓の放った矢は大きく反れて廊下の奥に飛んでいってしまった。しかし、尊の心臓の部分からは鋭い刃物が突き出ており血が流れていた。
「ごほっ……未空か……」
尊の背中には未空が覆い被さるように立っていた。尊が矢を放った瞬間に、未空は尊の背中にナイフを突き刺したのだ。尊の矢が狙いを外れたのもこのせいだ。
背中からナイフを抜かれた尊はゆっくりと膝をつき、そのまま仰向けに倒れた。
「……人間との生存競争に私は負けてしまったな。やはり人間によって創り出された者は、人間には勝てないということか……」
未空は尊の手を取って、やさしく握り締めた。
「あたしは尊が人間じゃなくても、それでよかったのに……」
「未空は私が人間ではないことを知っているんじゃないかって思ってた。でも確信はなかったんだ。でも、椛が人間ではないことを言い当てた時わかった。未空は最初から私が人間でないことを知っていたんだと……。不思議な人間だな未空は……」
楓が尊に駆け寄り、傷の治療をはじめた。
「同属のお姉ちゃんを死なせるわけにはいかないから」
尊は苦笑を浮かべた。
「敵に情けをかけられるなんてな……。私なら大丈夫だ、人間と違

い、心臓を射ぬかられたくらいでは死なない。数日の間、ここでこうして倒れていなければならないだろうがな……」
尊は廊下の先を指差した。
「私のことなど放っておいて、仲間を助けにいけ。琥珀は人間に容赦しないだろうからな」
楓はそう言われても治療を続けようとした。悠樹もまたここに残ろうとしたが、そんな二人の手を強引に未空が引っ張った。
「輝クンたちが死んでもいいの？　早くいきましょう！」
「でも、尊さんをここに残してはいけない」
「尊お姉ちゃん、このままだと死んじゃうかもしれないよぉ」
未空は普段は絶対出さない大声で怒鳴った。
「輝クンたちが死ぬわよ！」
「未空の言うとおりだ。私など置いて早くいくんだな」
未空に強引に引っ張られて、悠樹と楓は無言で背中を引っ張られる思いでこの場から立ち去っていった。
未空は決して振り返らず誰に見せない前顔は、大粒の涙が光っていた。
残された尊は深く息をついた。
心臓を刺されても人間と違い、そう簡単には死なない。だが、未空のナイフは普通のナイフではなかった。
普段ならば、傷口は数秒も経てば塞がるはずなのだが、この傷からは今も血が流れ出ている。
「私は少し人間の世界に溶け込みすぎたようだ……」
尊はそう言ってゆっくりと目を閉じた。

広いロビーで琥珀は狐の姿なり、椛と戦っていた。輝もこの場にいるが、普通の人間には手出しができない状況なので、コンクリートの壁に隠れて椛を応援することしかできなかった。
琥珀の放つ炎が乱れ飛びながら椛に襲い掛かる。椛はそれを掻い潜るように避け、的を外れた炎は地面の表面のビニル樹脂を溶かし、

下のコンクリートまでも焦がす。
椛の放つ矢も琥珀の素早い身のこなしで避けられ、両者一歩も譲らぬ状況だ。
咆哮を上げるなり、琥珀は巨大な狐火を口から吐き出し飛ばした。椛は小回りの利く身体で身を翻しながら避けると、琥珀の横に回った。
琥珀は首を横に振りながら再び巨大な狐火を吐き出し飛ばしたが、椛はすぐに琥珀の後ろに回って矢を放った。
振り返ることもできず、背後から矢を受けた琥珀の身体には大きな穴が空いた。
一瞬表情を崩した椛であったが、すぐにその表情は曇っていった。
琥珀が身に纏う炎が穴の空いた身体に吸い込まれるようにして傷口を塞いだのだ。炎を纏う琥珀は傷ついてもすぐに完治してしまう。
燃え盛る琥珀は本気であった。椛が自分たちの仲間になることを強く望んでいたが、それが叶わぬと悟ったからだ。
「椛が敵である以上、それは脅威でしかない。計画なんてもうでもいい、君を愛した僕の手で君を必ず滅ぼし、僕も滅びよう……」
琥珀の炎は激しさを増し、業火と化したその光は陽光のように辺りの闇をまばゆく照らした。
意識せずとも琥珀の炎は辺り一面に飛び散り、壁や地面を焦がす。
再び炎を吐き出す琥珀。椛はその圧倒した姿を見て勝てないことを悟り、避けることさえを忘れた。
巨大な炎の塊が椛を喰らう瞬間、椛は輝によって押し飛ばされた。
「熱ーっ！」
椛を助けた輝の右腕は服が真っ黒に焦げて、肌は焼け爛れていた。
「マジ、熱かった。てゆーか重症か！」
「大丈夫だよ、皮膚の表面が少し焼けてるだけだから」
椛はすぐに輝の治療をしたいが、琥珀がそれを許さない。
「二人とも焼き殺してやる！」
大きな口を空けた琥珀の口の中に椛は矢を放った。それにより琥

珀は一瞬怯み、その隙に輝と椛は琥珀との間合いを取った。
「輝はまた隠れてて、傷は後で治してあげるから」
「わかった」
輝が再び壁の後ろに隠れると、椛は弓矢を構えながら琥珀に向かっていった。
椛と琥珀の戦いは、今の現状では椛が不利に思える。だが、輝には大したことができない。
その時だった。輝のもとへ誰かが駆け寄ってきた。
「あー、もう、ホント恐かった！」
それは涙目で息を切らせている綾乃だった。
「死にそうなくらい恐かったんだから！」
「他のやつらはどうしたんだよ」
「知らないわよ！」
綾乃は感情が高ぶり少しキレ気味だった。
輝は綾乃が弓矢を持っていることに注目した。
「何だよ、その弓矢？」
「超強力な武器なんだけど、霊能力みたいなのがないと撃てないのよ」
「ちょっと、貸してみろ」
輝は綾乃から強引に弓矢を奪うと琥珀に向けて矢を撃とうとした。しかし、矢を引くことはできなかった。
「何でだよ？」
「だから、普通の人じゃ無理なんだって！」
輝が懸命に矢を飛ばそうとしている中、椛は琥珀の戦いは激しさを増していた。
炎を飛ばす琥珀に椛は一歩も近づくことができなかった。矢を放ったとしても軽がると避けられる状況だ。そして何より、今の椛は二人に分かれている分、その力も半分になっていた。
椛にとって状況は最悪だ。けれども椛はあきらめはしなかった。
さっき、輝が傷ついてしまったのは自分のせいに他ならないのだか

ら、もう、あきらめるわけにはいかない。
今の椛の最大の武器は小さな身体を生かした小回りの利いた素早い動きだ。その動きを生かして椛は琥珀の背後に周り矢を放とうとした。しかし、同じ手は二度も通用しなかった。
椛が矢を放とうとした瞬間、それを読んでいたように琥珀が素早く炎を吐いた。それを避けるに精一杯で椛は矢を放つことができなかった。だが、矢は以外な方向から飛んで来た。
輝はついに矢を放つことに成功し、矢は琥珀の身体を掠めるように飛んでいった。矢は弓矢の腕前とは関係無しに使用者の思い通りに矢を飛ばすことができると未空は言っていたが、輝には矢を飛ばすだけで精一杯で、矢のコントロールまではできなかった。
矢は琥珀の身体を掠めただけだったが、それだけでも琥珀の身体の三分の一が消し飛んだ。
「すんげぇ、マジすっげえ！」
輝は感嘆の声を上げてはしゃいだが、琥珀の身体は自らの炎にとってすぐに復元され傷一つなくなった。
輝は顔面蒼白になり、すぐに再び壁の後ろに隠れた。
「何だよ、反則だろうがあの再生能力は！」
「でも、輝すごいじゃないの！　どうして矢が撃てたのよ？」
「知らねぇよ、無我夢中でやったらできたんだから。そうだ、星川さんにオレは潜在的には魔力とか霊力みたいな力を持ってるって言われたような気が……」
「きゃーっ！」
綾乃が突然悲鳴をあげた。
輝が綾乃の視線の先を見ると怒りに燃える琥珀が立っていた。
すぐに輝は綾乃の手を取って逃げ、間一髪のところで琥珀の炎から逃げた。輝たちのいたところは黒く焼け焦げてしまった。もし、少しでも逃げ遅れたら丸焼けになっていたに違いない。
琥珀は輝たちに気を取られている間に椛の矢を背中に幾本も浴びた。しかし、琥珀は少しも怯むことなく輝たちを追った。

「人間風情が脅威になろうとは！」
琥珀はまさか輝によってあんなにも強力な一撃を喰らうとは思っても見なかったのだ。今の琥珀には輝しか見えていなかった。
輝と綾乃はロビーを抜けて琥珀の追撃から逃げた。時折、炎の塊が二人の上や横を通り過ぎるが、どうにか当たらずに済んでいる。それは、琥珀の後ろを追う椛が弓矢で琥珀の攻撃を妨害しているからに他ならない。
逃げ回る輝と綾乃はやがて廊下の端まで来てしまい、階段に差しかかった。
「ここ何階だと思う？」
「とりあえず下にいきましょう」
二人は示し合わせるように互いの顔を見てうなずくと、階段を駆け下りた。
階段を下りている途中で炎の塊が雨のように振って来たが、どうにか無傷で逃げ切ることができた。
階段を駆け下りた輝と綾乃は後ろを振り返ることなく、無我夢中で逃げた。その間も後ろからは琥珀の咆哮と共に炎の塊が飛んで来ていた。
玄関ロビーが見えて来て、そこを抜ければ外に出られると思ったその時だった。琥珀の吐き出した紅蓮の炎が渦巻きながら綾乃の背中に命中した。
「きゃーっ！」
炎は服に引火して熱さと痛みによって綾乃は廊下を転がりまわった。炎はすぐに消えたが、綾乃の背中は服も肌も焼け焦げ、髪の毛も背中に面していた部分が焼けて独特の異臭を放っていた。
「うっ……うっ……痛いよ、死にそうなくらい痛いよ」
「死ぬわけないだろうが！」
輝は綾乃を抱きかかえるとロビーに向かって走った。
ロビーに着いた輝と鉢合わせになるように、別の方向からちょうど未空が走ってきた。その後ろには悠樹と楓もいた。

輝は楓たちに向かって叫んだ。
「綾乃が重症を負ったから楓ちゃん治療を頼む、二人は綾乃についてやっていてくれ」
輝は綾乃を床に仰向けに寝かせた。そこにすぐに楓たちが駆け寄って来て、楓は綾乃の治療を始めた。
輝はすぐに自分が走ってきた方向に弓矢を構えた。すると、すぐに琥珀がロビーに現れた。刹那のうちに輝は矢を放った。
矢はまたも琥珀の身体を掠めるだけだった。だが、それでも威力は強力で琥珀の頭を吹き飛ばした。
「やったか？」
頭を吹き飛ばしても輝には不安が残る。
頭を失った琥珀の後ろから椛のよって矢が放たれ琥珀の身体を幾本もの矢が貫いた。残酷とも言える容赦ない攻撃であるが、相手は驚異的な再生能力を持っていた。
琥珀の身体が炎に包まれ、その身体が再び復元された。
「ウソだろ、もういい加減にしろよ！」
輝は再び矢を放とうとしたが、矢が切れた。矢を全て使い果たしてしまったのだ。
巨大な炎が輝に襲いかかった。もう駄目だと輝が思った瞬間、綾乃の治療を終えた楓が輝の前に飛び出し、円舞を踊るようにして爆風を巻き起こし火を掻き消した。
「大丈夫ぅ、輝？」
「サンキュー、楓」
「もう、安心して楓と椛が揃えば恐いものなんてないもん！」
椛&楓が琥珀を挟み撃ちにして、鋭い矢先を向けてチャンスを伺っている。
戦線離脱した輝はすぐさま綾乃の様態を確かめた。
「だいじょぶかよ綾乃？」
「うん、楓ちゃんのお陰で傷と痛みは消えたけど、ちょっと体力が……」

綾乃はじゃべっている途中で意識を失った。
輝は驚いて綾乃を叩き起こそうとしたが悠樹がそれを止めた。
「大丈夫だ、眠っているだけだ」
「今あたしたちにできるのは、涼宮さんにつき添っていることと、椛ちゃんたちの戦いを遠くから見守ってあげることだけ」
悠樹と未空がそうするように、輝もまた、二人の少女に運命を託した。
椛&楓は阿吽の呼吸で矢を放った。琥珀はそれを上空に飛び上がり避けると二人に向かって炎を飛ばした。
飛んでくる炎を椛&楓はまるで鏡のような動きで、同時に円舞を踊るにして爆風を巻き起こして炎を掻き消し、その風は炎を消してもなお勢いが治まることなく琥珀の身体を包み込んだ。
「くっ、なんだこの風は！？」
風は琥珀の身体を上空に止め、その動きを封じた。
「「今のうちに輝の弓矢で！」」
二人に同時に叫ばれたが、輝はどうすることもできない。矢は全て使い果たしてしまっている。
「そんなこと言われても、どうすりゃーいいんだよ！」
輝の肩に未空が手を乗せた。
「輝クン、弓を構えて。葵城クンもあたしと同じように輝クンの肩に手を乗せて」
悠樹は未空に言われたとおりに輝の肩に手を乗せ、輝の左右の肩には未空と悠樹の手が片方ずつ乗る形となった。
「どういうことだよ、何しろっていうんだよ！？」
「椛ちゃんたちがするように、矢をあたしたちの力で作り出すのよ。さあ、輝クンは矢を引くイメージをして、あたしと悠樹クンは目を閉じて輝クンに力を送るように念じるのよ」
未空が目を閉じ、それに続いて悠樹も目を閉じると、輝に自分の力が流れ込むように念じた。
輝も半信半疑だったが矢のイメージを頭の中に思い浮かべながら

矢を引く動作をした。矢を引いているつもりの手には、確かに何かの手ごたえがある。
「「早くして、琥珀が逃げるよ！」」
琥珀は身体を激しい炎で燃やし風の結界を打ち破ると、上空から今までで一番大きく激しく燃え上がる紅蓮の炎を咆哮と共に吐き出し輝に向かって飛ばした。
輝は自分に向かってくる紅蓮の炎から逃げることなく矢を解き放った。
弓から放たれた矢は光の刃と化して紅蓮の炎を突き破り掻き消すと、そのまま琥珀の身体を突き抜けた。
琥珀は声にならない叫びを上げると、炎を全身に纏いながら地面に落下し、やがて琥珀の身体を包み込んでいた炎は静かに消え、そこには銀色の狐だけが残った。
生き絶え絶えながらも琥珀はふら付く足で立ち上がると、廊下の奥の闇へ逃げようとした。だが、琥珀は途中で廊下の床に倒れこみ動かなくなった。その途端に、建物が急に揺れ始めた。
椛&楓が騒ぎ出した。
「「力を失った建物が崩壊するよぉ！」」
悠樹は綾乃を担ぎ上げて、力を使い果たして動けなくなっていた輝は未空の肩を出口へと歩き出した。椛&楓もそれに続いた。
未空が急に足を止め何かを感じたように後ろを振り向き、他の者もそれにつられるようにして足を止めて後ろを振り向いた。
未空の視線の先には、銀色の狐を抱きかかえた女性が立っていた。しかし、すぐに天井が崩落してその狐と女性の姿は見えなくなってしまい、女性が誰だったのかまで判別できなかった。
誰も何も言わず、前を振り向き走り出した。
病院の玄関を通り抜け外に出て、何十メートルも走ったところで、やっと足を止めて後ろを振り返る。
大病院の廃墟は大きな音と共に脆くも崩れ去った。あのようすでは中に誰かがいたとしたら、決して助からないだろう。そんなひど

い有様だった。

廃墟の病院での事件から数日が経った日曜日の昼下がり、輝の家にあの事件に関わった全員が集まって来ていた。

ダイニングで寛ぎながら、みんなで悠樹に焼いたクッキーを食べていた。

「「悠樹のクッキーおいしかったよ！」」

声を揃えてそう言った椛&楓は手を繋ぎ、突然『一人』に戻った。

「悠樹はお菓子作りも上手なのね」

美しい椛は笑顔までも美しかった。あの事件以来、『椛』は一人に戻ったり、椛&楓に分かれることが自由にできるようになり、食事などの間は必ず椛&楓に分かれていた。

クッキーを思う存分食べた綾乃は紅茶を飲んで一息ついた。彼女はあの一件で髪の毛が少し焦げてしまったのでショートカットでボーイッシュなイメージに変身していた。

「ふぅ……あれからもうすぐ一週間も経つのよね。未だにあの時のことが夢みたいに思えるけど、椛ちゃんは確かにここにいるのよねぇ」

綾乃の話を聞いていた武が急に顔を膨らませた。

「ここにいるみんなは大冒険したのに、何でボクだけ神社の掃除なのさぁ。輝と悠樹がもっと早くボクに話してくれてたらよかったのに……、ボクってそんなに信用されてないの？」

「おまえなぁ～、オレたちがどんな死ぬ思いしたかさんざん聞かせただろ」

輝は呆れ切った口調で言うが、武はそんなことなど聞き流していた。

一人黙々と紅茶を飲んでいた未空がティーカップをテーブルの上に置いた。

「それで、椛ちゃんはいつまでこの家にいるのかしら？」

この言葉には妙な殺気というか、嫉妬が含まれていた。

綾乃も未空に続いて同じようなことを言った。
「こんな絶世の『美女』が、いつまで男所帯の家にいるつもりなの？」
やはりこの言葉にも妙な殺気というか、嫉妬が含まれているように思える。
未空は輝を、綾乃は悠樹のことを同時に一瞬睨みつけた。――ように思えた。
輝と悠樹は不思議な顔をしながら、互いの顔を見合わせ首を傾げた。
何か嫌の空気を感じ取った椛は突然椛&楓に分かれた。そして、何かから逃げるように子供らしくはしゃぎだした。
そんな椛&楓を見て、未空と綾乃は『子供のふりして』と思った。
ここ最近、椛&楓の性格が掴めて来たような気がする。この二人は都合が悪くなると『一人』から『二人』に分かれる。
悠樹は自分のティーカップに紅茶を注ぎながら、二人で遊んでいる椛&楓を見て呟くように言った。
「仕様がないだろう、小春神社が取り壊されることになって、この二人の帰る場所がなくなったんだから」
悠樹が椛&楓を本気で心配してこの家で面倒を看ているのはわかるが、未空と綾乃は少し不安だった。しかし、二人はここでムキになってボロを出さないように紅茶を同時にひと口飲んで黙った。
武が自分の持ってきたバッグからある雑誌を出してテーブルの上に広げた。
「この記事見てよ」
「B級オカルト雑誌だろ？」
つまらなそうに言う輝の目がだんだん大きく見開かれていった。
悠樹は渋い顔をして目を細めた。
「俺と綾乃だな」
「ウソ！？　これアタシ？」
開かれたページに掲載されていた写真には、大鷲と人らしくもの

が写っている。そして、記事の一節にはこう文章が書かれている。
大鷲に乗った悪魔が二人の人間を連れ去るのを偶然居合わせた地域住民が写真に激写。
何かに気がついた未空は横のページを指差した。
「……これ見て」
その記事には『怪奇ジャンピング女の恐怖』と題され、銀髪の女性が若い女性を抱きかかえながら、家の屋根をぴょんぴょん飛び越えていったという証言をするインタビュー記事が掲載されていた。
悠樹が失笑を浮かべると、それにつられて全員が顔見合わせて苦笑いを浮かべた。
そんな中輝が堪え切れなくなって空気を口から噴出した。
「ぷっ……ははは っ、マジかよ、B級オカルト雑誌だろこれ？」
そんな輝を見て悠樹は頭を抱えた。
「誰も信用しないと思うが、俺たちの顔が誰にもばれていないことを祈るのみだな」
まだ、しばらくの間、悠樹たちの受難は続きそうな予感がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0476e/

トゥプラス

2010年10月8日14時31分発行